ISSN 2187-6894

BULLETIN OF FUKUOKA ART MUSEUM

No. 7

“Anywhere Museum” -Outreach activities as an educational program during the renovation of Fukuoka Art Museum — ONIMOTO Kayoko 1

Report: 4th *IkiYoYo* Workshop,“Let’s make a chatting cloth” — UENO Maho 7

Report: Transport of “At the Seaside” by Raphaël Collin — WATANUKI Yuki, MORI Naoyohi 13

Research Material: Kai Mihachiro in Manchuria Drawings and Articles Published in the Magazine “Kyowa”4 — NAKAYAMA Kiichiro 18

The True Character of “The Tiger” drawn by Sengai Gibon — NAKAYAMA Kiichiro 36

Transcripiton of “Unchuan Chakaiki”- The Tea Party Records by OGI Seisai 3 — GOTO Hisashi 71

Edited by Fukuoka Art Museum
1-6 Ohorikoen, Chuo-ku, Fukuoka, Japan

福岡市美術館研究紀要

第七号

二〇一九年

福岡市美術館

研究紀要

第７号

休館中におけるアウトリーチ活動「どこでも美術館」について — 鬼本佳代子 1

【報告文】第4回いきヨウヨウ講座「おしゃべりな布をつくろう」について — 上野真歩 7

【報告文】ラファエル・コラン≪海辺にて≫の輸送 — 渡抜由季, 森直義 13

【資料紹介】 満州の甲斐巳八郎 雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事 ④ — 中山喜一朗 18

仙厓雑論 「虎図」の正体 — 中山喜一朗 36

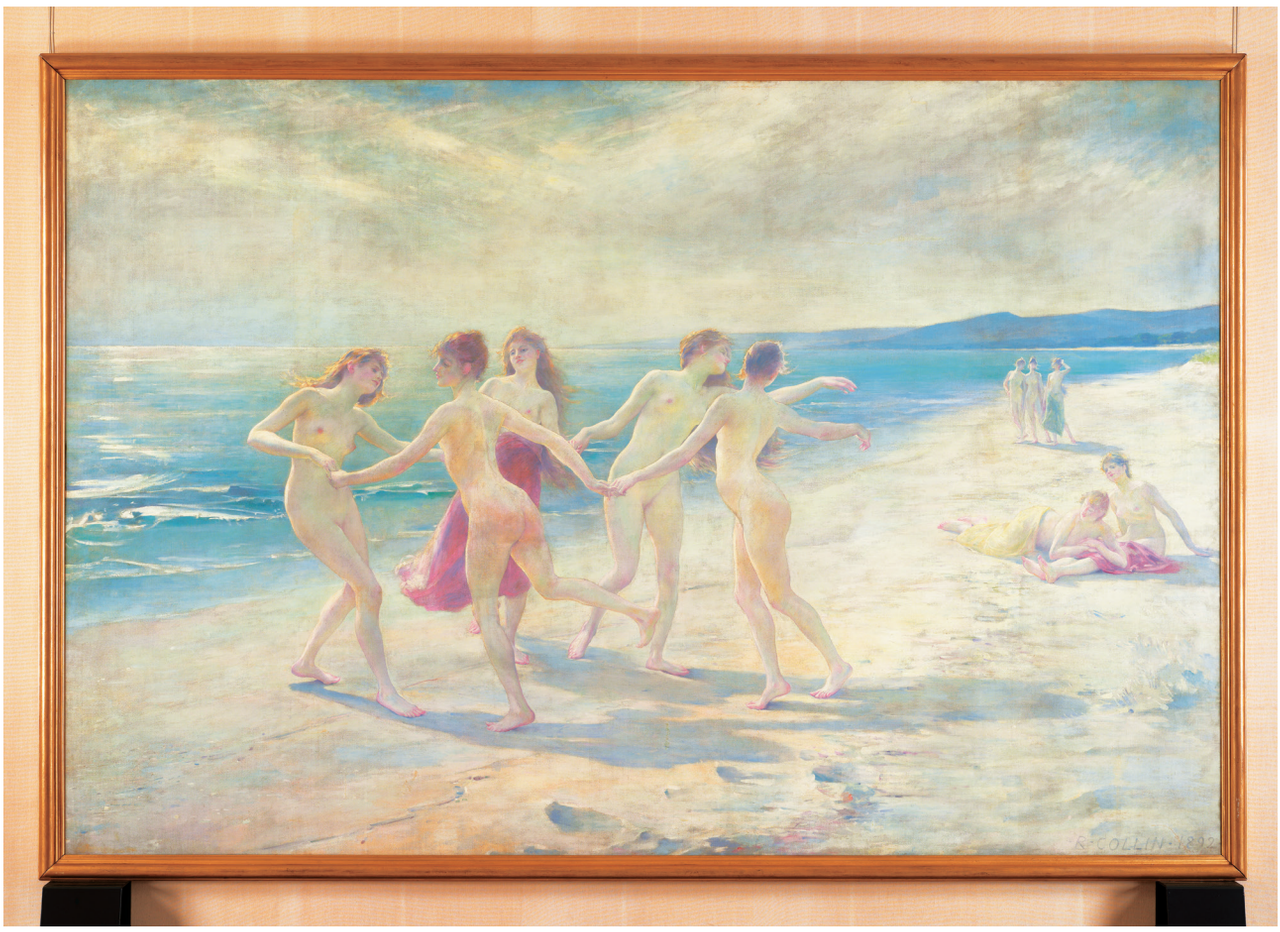
『雲中庵茶会記』翻刻稿 ③ — 後藤恒 71

2019 年

口絵１　「どこでも美術館」教材　日本画画材ボックス

口絵２－１
カンガ（2016 年以前）ケニア製　福岡市美術館「どこでも美術館」教材

口絵２－２
第４回いきヨウヨウ講座「おしゃべりな布をつくろう」作品発表の様子



口絵３　ラファエル・コラン≪海辺にて≫ 1892 年

口絵４　仙厓「虎図」江戸時代

休館中におけるアウトリーチ活動「どこでも美術館」について

鬼本佳代子

2016年9月1日より、福岡市美術館はリニューアルのため、2年半の休館に入った。その間、館内での教育普及活動は、休止となった。当館では開館以来、そのマスタープランでも示しているように、学校との連携を深めることに努めており、2000年代の半ば以降は、ボランティアガイドが対話型鑑賞法によって子どもたちに作品鑑賞をうながす、学校のための教育プログラム「スクールツアー」を推進してきた。当館が休館する前年度の、2015年度のスクールツアー利用校は、福岡市内外の小中学校合わせて37校となっている。これらの小中学校に対し、休館中でもなにがしかの教育プログラムを実施できないかというのが、アウトリーチ活動を行う一つの動機であったことは想像に難くないだろう。それと同時に、欧米諸国ではさまざまな形で実施されており、また日本でも一部の美術館・博物館で行われている「美術館・博物館に来られない／来にくい」層のための教育活動への試みとしてアウトリーチ活動を行おうという機運が、当館でも2012年以降、高まっていた。そこで筆者をはじめ、教育普及担当者はこの休館を機に、アウトリーチ活動を計画実施することとした。本稿は、休館中に実施したアウトリーチ活動について、その目的、教材としてどのようなものが開発されたか、そして実際に実施した結果として明らかになったことを、実施ごとにその前後に行ったアンケートから分析したい。

1.実現まで～何のためにアウトリーチ活動をするのか～

手元に残っているアウトリーチ活動計画の最も早いものは、2013年の文書であり、そこで筆者が提示したのは「アートツールパッケージ事業」という事業名、そして「現状と課題」として、下記のような内容であった。

・当館は、平成27（2015）年度から平成28（2016）年度にかけて休館する予定であり、その間、これまで行ってきた学校団体向けの鑑賞活動や、家族向け等のワークショップが実施できなくなる。そこで、休館中に館外での活動を可能にするため、平成26（2014）年度は、その準備として、持ち出し式の「アートツールパッケージ」を制作する。また、それにともない、他館の先行事例を事前調査として実施する。
・さらに、老人ホーム、障害者施設、保育園・幼稚園、公民館などに「アートツールパッケージ」を貸出もしくは持って出かけていき、これまで美術館に来なかった層、来られなかった人にアプローチし、美術館利用者のすそ野を広げる。

また、「今後の展開」として下記のように書いている。

・平成26年度 「美術」を持ち出すための「アートツールパッケージ」について調査、制作
・平成27年度～28年度の休館中、各学校の鑑賞活動をサポートするため、希望校に上記アートツールパッケージを持っていき、活動を行う。
・学校と同時に、養護施設や保育園・幼稚園、老人ホームなどでの活動を実験的に実施。年5か所程度。
・リニューアル後（平成29（2017）年度）は、学校団体が実際に美術館を利用することを鑑み、学校への事業は縮小し、養護施設・保育園・幼稚園・老人ホーム、そして公民館、一般会社などに展開していき、物理的に

来られない層に加え、これまで美術館の利用の少なかったサラリーマンなどが美術館の楽しさを知る機会を作る。

上記のようにこの時点で、すでにリニューアル後の活用法などについても、さまざまに考えをめぐらせていた。最終的にはターゲットからはずしたが、サラリーマンというのは、その年代の美術館利用が低いということからアウトリーチ対象として考えていたということである。ただし、「サラリーマン」は美術館に来ないかもしれないが、美術館に来にくい／来られないわけではないということで、後述の最終案には残らなかった。

さて、目的の設定や対象などを考えると同時に、先行事例の調査も行った。実物資料や教材を館の外に持ち出すというプログラムは、自然史科学系博物館ではそれほど珍しいものではなく、また人文系の博物館でも見られるものである。筆者及び教育普及担当者は、先行事例である福島県立美術館・郡山市立美術館共同開発の「Art Cube」、国立科学博物館の貸し出し教材、国立民族学博物館の「みんぱっく」、九州国立博物館の「きゅうぱっく」、そして目黒区美術館の「素材と画材の引き出し」について、いずれも実際に各館を訪問、実見し、どのように使用しているかを担当者に聞き取り調査をした。

その調査を経て、思考をめぐらす中で、最終的にアウトリーチ活動の目的を下記のように絞ることとした。

1）休館中（平成 28（2016）年 9 月 1 日～平成 31（2019）年 3 月）も、学校団体をはじめ、これまで当館を利用していた多くの方々に美術に触れる機会を提供する。
2）リニューアル開館後は、引き続き、高齢者、障がい者、未就学児童など、美術館を訪れることが困難な方々や、訪れる機会が少なかった方々に対して、積極的に出前講座を行うことにより、美術に触れる機会を提供する。
3）視覚だけでなく、触覚等の実体験を伴った鑑賞体験を提供する。

また、活動名については「アウトリーチパッケージ」は長いこともあり、美術館の活動であるとすぐわかり、「いつでもどこでも美術館体験ができる」ことを込めて「どこでも美術館」とした。ただし、これから述べる教材の総称については、2019 年 2 月時点では特に定まったものはない。ここでは便宜的に「どこでも美術館」の略称である「DOCOBI」から「DOCOBI ボックス」とする。

2．教材について

アウトリーチ活動計画当初から休館時期がずれ、2016 年度が休館の年となり、その年に予算がつくこととなったため、「DOCOBI ボックス」の制作は、2016 年 4 月から行うこととなった。「DOCOBI ボックス」の制作方針については、はっきりとは定めてはいないものの、アウトリーチ活動の目的、先行事例の調査やこれまでの教育活動の経験から鑑み、教育普及担当者たちの共通理解として以下の 3 点があったように思う。

1）当館の所蔵品に関連すること
2）持ち運びが可能であるサイズ・重さであること
3）教材を参加者に見せた時に驚きがあること

項目の 3）については、特に重要であると考える。というのも、美術館に来館した子どもたちが実感するのは、作品の内容だけでなく大きさや空間の広さへの驚きであることがしばしばだからだ。単に作品を鑑賞するという行為だけでなく、そこにある驚きも含めて、美術館体験ではないか、と筆者は考えている。そこで、可能な限りそのような「驚き」も一緒に持っていければと考えた。つまり、機能はもちろんのこと、そこに「驚き」や「楽

しさ」、「遊び」といった曖昧さを盛り込もうとしたわけである。そのような曖昧さを形にするのは、容易ではない。そこで、制作にはプロダクト・デザイナーを入れることとした。

それぞれの教材の詳細については、各担当に論を譲るとして、ここではどのような教材が完成したかを述べるにとどめておく。まず、2016 年度に制作した教材は、下記の通りである。

1）やきものボックス（図１）
2）絵画・彫刻ボックス
　① マルク・シャガール≪空飛ぶアトラージュ≫複製（図３）
　② 長谷川派≪韃靼人狩猟図屏風≫複製（図４）
　③ 藤浩志≪ヤセ犬≫（図５）
3）染め・織りものボックス（図２）

1）については、当館の所蔵作品である≪初期伊万里染付釣人物図皿≫と≪絵唐津秋草文向付≫の写しを制作してもらい、資料として寄贈された陶片などを収納した。また、デザイナーのアイデアで、簡易の琉球畳も入れ、器を見るときの安全確保及び雰囲気づくりにも一役買っている。実際に授業をした時の子どもたちの反応は非常に良いのだが、大きさや重さのため、取り回しが悪く、それが課題となっている。２）については、ひとくくりにしているが、実際には３つの別々の教材である。①、②については、実物になるべく近い物、しかし、美術館で使用しているワンボックスカーに収まるよう、実物の 80 ～ 90 パーセントの大きさの複製を制作した。①については設置用の台座、②については収納袋と毛氈が付属物としてついている。③は、当館の所蔵作家である藤浩志氏に実際に制作していただき、そのおかげで、実物の美術作品の鑑賞とワークショップが可能となった。最後に３）であるが、これには東アフリカの布「カンガ」40 枚と繭、絹糸、綿、綿糸、染色原料などを納入したものである。カンガはこのボックスのために新たに購入したが、その他の納入物については、特別展に使用した資料をリサイクルするという方法をとった。また、教育普及資料として 20 世紀初頭に製作されたインドネシア

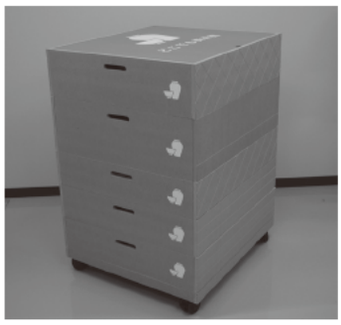


図１　やきものボックス

図２　染め・織りものボックス

図３　絵画・彫刻ボックス
マルク・シャガール
≪空飛ぶアトラージュ≫複製

図４　絵画・彫刻ボックス　長谷川派≪韃靼人狩猟図屏風≫複製

図５　絵画・彫刻ボックス　藤浩志≪ヤセ犬≫

のバティックも購入して、このボックスに付け加えた。
上記のボックスに加え、2017 年度には、４種類の「素材と技法ボックス」を作成した。
素材と技法ボックス
① 油彩画（図６、７）
② 日本画（図９、10）
③ 彫刻素材（図８）
④ 螺鈿（図版 11）
いずれも、運搬が容易にできることを最優先に考え、デザインしてもらった。結果として、旅行鞄のような形（①, ②）や、菓子箱のような形（③）となり、④においては既存のキャリーケースを利用することとなった。また、①については、福岡教育大学の油彩画研究室、②については同大学の日本画研究室、そして③については同大学の美術教育講座に制作協力をいただいた。これらの「素材と技法ボックス」は、単独で使用することはもちろんであるが、絵画・彫刻ボックスと合わせて使用することも考えて作られた。さらに①については、当館の所蔵作品の技法を再現したパネルを８種、②については、日本画に使われる技法がわかるパネルを９種制作してもらった。大きさは 300 × 120 × 5 mm と、運搬の容易さだけでなく、それぞれ手に取って見られるよう考えられている。

図６　素材と技法ボックス
油彩画　画材ボックス

図７　素材と技法ボックス
油彩画　技法ボックス

図８　素材と技法ボックス
彫刻素材ボックス

図９　素材と技法ボックス
日本画　画材ボックス

図 10　素材と技法ボックス
日本画　技法ボックス

図 11　素材と技法ボックス
螺鈿ボックス

そして、2018 年度には、これらに版画の技法・道具を紹介する「版画ボックス」と、「ワークショップボックス」の２種類が加わることとなる。なお、「版画ボックス」については、九種産業大学芸術学部の先生方にご協力いただき、また「ワークショップボックス」は、2005 年に福岡市美術館でワークショップを行い、2017 年 11 月に逝去したアーティスト・小林重予氏の作品を寄贈されたことにより実現することとなった。これらの詳細についても、いずれ紀要等で報告したい。

3.「どこでも美術館」アンケートから読み取れること

実際のアウトリーチ活動は、2016 年 11 月より始まった。2016 年度は、こちらから声をかけて 6 つの小中学校に出向いたが、翌 2017 年度からは応募制とし、市内小中学校だけでなく、公民館にも出向くこととした。その結果、14 の小中学校、 4 つの公民館、そして 1 つの病院でプログラムを実施することとなった。翌 2018 年度はそのプログラム内容が浸透したのか、市内小中学校については 25 校と大幅に増えることとなった。なお、公民館・市民センターは 6 館と微増、病院は院内学級を入れると 2 件、そして大学が 1 件となっている。

さて、今回、興味深かったのが、応募してきた地域である。福岡市美術館が位置する区、つまり比較的来館しやすいと思われる中央区の小中学校については、2017 年度は 4 校の申し込みがあった。その他の地域からは 10 校であった。さらに、翌年の申し込み状況を見てみると、中央区の小中学校は 25 校中 3 校で前年度より減ったにもかかわらず、他区は 22 校と 2 倍以上の申し込みがあった。一見、郊外の学校ほど美術館に来にくく、そのためにアウトリーチプログラムを利用したい、と結論付けたくなる結果である。しかし、ことはそう簡単ではない。2015 年度、つまり同館が休館する前年度に、館を訪れた学校を見てみると、福岡市内の来館校 27 校中、中央区の小中学校はやはり 3 校であった。2014 年度は比較的中央区の小中学校が多いが、それでも 26 校中 5 校となっている。この数からみると、必ずしも近隣小中学校が美術館に来ているとは限らないことがわかる。アウトリーチと実際の来館の数の比較をすると、福岡市内の小中学校に限れば、美術館利用への関心と距離との関係性を単純に結びつけることはできないといえよう。

ところで、「どこでも美術館」を行うときに、小中学校に関しては、必ず事前と事後に、児童・生徒および教員にアンケートを実施していた。このうち、応募制をとった 2017、2018 年度のアンケートについて分析をしたい。児童生徒に実施したアンケート項目は次のようなものであった。

【事前アンケート】
1）美術の時間がすきか
2）美術館という場所にいったことがあるか
3）日頃、美術館に行ってみたいと思うか
4）福岡市美術館を知っているか
5）美術全般についておもしろいと思うか
【事後アンケート】
1）どこでも美術館は楽しかったか
2）どこでも美術館ではじめて知ったことはあったか
3）福岡市美術館に行ってみたくなったか
4）美術は面白いと感じたか

一方、教員については、次のような項目のアンケートを実施した。
【事前アンケート】
1）日頃から、授業で美術館・博物館を利用しているか？
　→はいと答えた方のみ。授業科目と、利用先の博物館・美術館について記入
2）普段、 1 年間に何回程度、美術館に行くか
　→ 0 回とつけた人のみ。理由を記入。
3）普段の様子から、児童・生徒は図工・美術に興味があると思うか

4)「どこでも美術館」に期待すること・また不安に思うことなどあれば自由記述。
【事後アンケート】
1）児童・生徒は「どこでも美術館」を楽しんでいたと思うか
2）先生ご自身の「どこでも美術館」への満足度を聞かせてほしい
3）今後も、授業の中で博物館・美術館と一緒に活動をしたいと思うか
4)「どこでも美術館」を実施して、児童・生徒の図工・美術への興味が増したと思うか
5）その他、自由記述。

※アンケートの集計は、2017 年度はギャレット三宅万里子、崎田明香、土橋佳那子、中原千代子が行った。
2018 年度については、上野真歩、中原千代子が行った。

このうち、筆者が注目したのが、児童生徒の事前アンケート項目２）と教員の事前アンケート項目１）と２）である。2017 年度に関していうと、中央区の児童生徒で美術館へ行ったことがあると答えた子どもは約 80％にのぼった。一方、他区においては、美術館に行ったことがあると答えた子どもは 53％程度にとどまっている。ただし、2018 年度には、中央区では 50％、その他の区で 48％となっており、その差は前年度ほど開いていない。しかし、中央区の子どもたちの方が美術館に行く率はやはり高く、さらに「行ったことがない」と答えたのが、中央区では約 29％、その他の区では約 32％となっている。なお、残りは「わからない」という回答であった。

この結果と、先ほどの学校の来館と距離とそれほど大きな相関関係が見られないことから推測されるのは、学校での美術館来館よりも家庭での来館が子どもたちの美術館訪問の有無を左右しているということである。実際、アウトリーチプログラムの際に美術館で何を見たかを聞くと、「兄弟姉妹の絵が飾られたので行った」や「家族で展覧会を見に行った」と、答える子どもが多い。

では、教員の質問項目１）、２）についてはどうだっただろうか。まず、授業で美術館・博物館を利用しているか、という質問については、2017 年度は「している」が 22％、「していない」が 78％であった。また、2018 年度においては、「している」が 16％、「していない」が 84％であった。そして、項目２の質問に対して、年１～２回と答えた教員が最も多く、2017 年度のアンケートでは 51％、2018 年度においては 53％がこの区分を回答として記入している。一方、０回というのも 2017 年度には 24％おり、2018 年度でも 19％いた。一方、年に５回以上行くと答えた教員は、2017 年度で 14％、2018 年度はなんと０人という結果となった。

この結果から考えられるのは、教員にとって、美術館や博物館が、それほど身近なものではないということであろう。学校として美術館に来られない理由は、もちろん他にもさまざまあるだろうが、まずもって美術館や博物館が訪問先の候補にあがらないということが、考えられるのではないだろうか。

4. 終わりに

既に述べたように、学校団体については、利用促進をするといっても、ことはそれほど単純ではない。子どもたちの美術への関心を高める以前に、教員たちの関心を高める必要がある、というのがこの分析の結論である。リニューアルオープン後の「どこでも美術館」については、すでに目的として挙げているように、美術館に来にくい／来られない人々のためのアウトリーチ活動として継続する予定である。しかし、それだけでなく、学校の授業で「DOCOBI ボックス」を利用できるようにしたり、教員研修に利用してもらったりなど、教員自身が美術や美術館の楽しみに目覚めるきっかけづくりに利用できればと考える。まずは「DOCOBI ボックス」の貸し出しを実施する予定であるが、実践の中でより良い方法を考えたい。

（おにもとかよこ　福岡市美術館主任学芸主事）

【報告文】第 4 回いきヨウヨウ講座「おしゃべりな布をつくろう」について

上野真歩

はじめに

本稿では、平成 25 年度より福岡市美術館の教育普及事業として実施している「いきヨウヨウ講座」についての概要と、筆者が担当した平成 29 年度第 4 回いきヨウヨウ講座「おしゃべりな布をつくろう」と題し東アフリカの布であるカンガをテーマに行った企画についてその目的と実施内容について述べる。

まず、「いきヨウヨウ講座」とは、平成 25 年度より毎年 3 月に実施している、60 歳以上を対象としたワークショップ型の講座である。発案当初の資料によれば当時、日本では美術館や博物館で子供向け・大人向けのプログラムはあるものの高齢者向けのものはほとんどなかった。しかし、社会的には超高齢化社会に突入しているという背景もあり、シニア世代の文化活動をサポートする美術教育の取り組みが必要なのではないかという理由から「いきヨウヨウ講座」を実施することとなったという。企画を立ち上げたのは当時嘱託職員であったギャレット三宅万里子氏である。自身もいわゆるシニア世代でありその経験から「年齢を重ねると身近な人間の病気や死など、気の塞ぐことが増える。しかし、それでも前向きに生きようと、明るくポジティブになれるものがあればいい」という思いから立ち上げたという。

ここで、筆者が担当する以前の、第 1 ～ 3 回「いきヨウヨウ講座」の内容を紹介する。

平成 25 年度第 1 回「私の桜、わたしの梅」（2014 年 3 月 16 日実施）（**図 1**）では、常設展示「桜と梅」の作品を鑑賞し、展示担当の学芸員が美術の視点から、福岡市植物園の展示係長が植物学の視点から作品についてトークをおこなった。トークを聴いた後、参加者が梅や桜の思い出を語った。自身の過去を振り返ったあとは、一年後の自分に向けて絵手紙を書く。絵は色紙や和紙を用いたコラージュやペンで描いたものなどがあり、思い思いのメッセージが書き込まれていて作品の様相はさまざまだった。発案者の意図としては、過去を振り返って肯定し、また 1 年後の自分を想像することで未来に向かう機会としたのだとのこと。

つづく第 2 回「音と色とかたち」（2015 年 3 月 14 日実施）（**図 2**）では、最初に所蔵作品のジョアン・ミロ《ゴシック聖堂でオルガン演奏を聞いている踊り子》を、ミロが実際に聞いたであろうパルマ大聖堂のオルガンで演奏された音を聞きながら鑑賞した。その後、参加者があまり馴染みがないであろうガムラン音楽をきいて水彩絵の具を用いた絵画作品を制作した。ピンクの背景に青や黄など絵の具が飛び散った絵や、緑や黄、赤でくねくねと線が描かれポップな印象を与えるもの、また黒一色で描かれたものなど様々であった。ひとつの音楽から何かを感じまたそれを表現すると一人一人異なり多様であることがうかがえる。このプログラムでは作家の制作方法を追体験し表現してみるという、普段の生活ではなかなか味わえないだろう新鮮な体験が提供されている。

第 3 回「きもちの樹をつくる」（2016 年 3 月 12 日実施）（**図 3**）では、最初に当館所蔵作品であるデイビッド・ナッシュ《内側 / 外側》という木の立体彫刻作品を鑑賞した。ナッシュは、自然のなかで倒木などをつかって作品制作をしており当館の作品も同様の方法で制作されている。鑑賞後、外へ出て付近の自然観察を行い、気に入った木枝や落ち葉などの素材があれば拾い作業部屋へ持ち帰った。参加者同士で拾った木々について話し合ったのち、それらの素材と対話しながら各自彫刻刀ややすりを使い制作を行った。出来上がった作品は、自然のもつ力強さや形の魅力が引き立つものなど様々だった。作家の制作コンセプトを理解してそれに沿って作品を制作して

みるという試みである。

以上のようによくに練られた内容を踏まえて、2018 年 3 月に実施の第 4 回「いきヨウヨウ講座」は、大学卒業後 2017 年 8 月より勤務を始めた筆者が初めて担当することになったプログラムである。これから筆者が企画した第 4 回いきヨウヨウ講座「おしゃべりな布を作ろう」について述べていこうと思う。

テーマの決定

まず、いきヨウヨウ講座の内容となるワークショップを考える上で筆者は、「講義などの一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創りだしたりする学びと想像のスタイル」を目指した[(1)]。

そこで以下に記す 3 つの理由で、第 4 回いきヨウヨウ講座は「おしゃべりな布をつくろう」と題し、当館所蔵品である東アフリカのプリント布であるカンガ（**図 4**）をテーマとした。

1 つ目の理由は、当館は 2016 年秋から 2019 年 3 月まで改修工事のため休館しており館での作品鑑賞ができなかったため、他施設で実施できる形態にする必要があった。また筆者自身、休館中に配属されたこともあり実物の所蔵作品をほとんどみたことがない。一度も触れたことがない作品をテーマにすることはできないと思った。そこで、当館が教育普及の一環として行っているアウトリーチ活動「どこでも美術館」の教材を使用することにした。「どこでも美術館」の教材は、所蔵作品の複製や作家に依頼して作ってもらった作品などがある。また、やきものや彫刻の素材、絵画の道具などの教材は実際に手にとってみることができる。学校や公民館などに持ち出して、鑑賞や制作のプログラムに使用している。そのなかのひとつに「染め・織りもの」の教材がある。染色や織りの材料のほか、実際に巻いて使える「カンガ」が入っている。カンガとは、19 世紀中頃に東アフリカのケニア・タンザニアで誕生したプリント布である[(2)]。大きさ約 110 × 150cm の一枚布で、現在も東アフリカで、主に女性がファッションとして身につけたり、インテリアとしてもつかわれている。また当館の所蔵品にもある。

2 つ目の理由は、カンガの鮮やかで力強い色彩、そして言葉にして主張を表すカンガに刻まれたセイイングと呼ばれるものが、未来に向かって希望をもちポジティブな気持ちになるという「いきヨウヨウ講座」の題材にふさわしいと考えたからである。

3 つ目の理由は、カンガは東アフリカの布であり、普段の生活では意識していない限りあまり馴染みがないと思われるからである。馴染みのないものをテーマとして扱うことで、当館所蔵品でもあるカンガについて知ってもらい、人とモノとの新たな出会いのきっかけ、あるいは興味関心へのさらなる学びが提供できると考えた。

以上の理由から第 4 回「いきヨウヨウ講座」ではカンガをテーマとし、カンガについて知り、セイイングを考えてオリジナルのカンガを制作するワークショップをすることにした。

準備

本物ではなくても、カンガらしいものを作るにはどうすれば良いか。テキスタイルを専門とする岩永学芸課長に相談したところ、カンガの 3 つの特徴が挙げられた。

1. カンガには外側と内側に黒枠がある。
2. カンガの柄にはパターンがあり、大きい柄と小さい柄の組み合わせで構成されている。
3. カンガはそれぞれセイイングを持っている。

1、2 は柄についての特徴であり、3 はカンガ最大の特徴である。今回の題にある「おしゃべりな布」とはこのカンガを指している。セイイングとは、スワヒリ語でスワヒリのことわざ・愛のメッセージ・社会的なものな

ど大きく３つに分類される言葉を指す。スワヒリ社会では女性は性別・年齢による階層を超えて意見を直接発言することや、公的な場での議論は社会的タブーとされている。そのために現地の女性はカンガを身に纏ったり、またプレゼントとして送ることで自身の主張や感情などを表現している。参考としてセイイングの一例を挙げる[3]。

・ことわざ

Wema wakoni（wako ni）kielelezo. （和訳）あなたの良い行いは、あなたの良い性格の証。
Jamani mambo si bure. （和訳）みなさん、どんなこともムダではありませんよ。

・愛のメッセージ

Tusidharaurane duniani sote tunapita. （和訳）世の中は、お互い尊重しあえばみんながうまくいく。
Dua njema kwako mpenji （和訳）恋人に幸あれ

・社会的なもの

Damu moja,ngozi moja,siasa na amani ni nguvu ya Tanzania. （和訳）（部族は異なっていても）血は一つ、皮膚の色も一つ、良い政治、そして平和。これがタンザニアの発展の原動力。（独立記念カンガ）

また、カンガらしく見えるよう、ワークショップでは色つきの綿布に黒一色でスタンプを押し制作することにした。カンガには色布に単色で刷られたものも存在する。試作の結果、多色よりも単色で制作するほうが見栄えよくカンガらしい仕上がりになることがわかった。制作のための染料はバインダーとフィクサー、インクを混ぜた布用のものを使用した[4]。ワークショップのために、あらかじめ布に内枠と外枠の黒線を書き込んでおいた（**図 5**）。

実施内容

日時：2018 年 3 月 11 日（土）10:30 ～ 15:30
会場：福岡市立南市民センター実習室（福岡市南区塩原 2-8-2）
講師：織本千知英子（カンガ研究家）
定員：15 名（事前応募制）
参加者：14 名
内容：

最初にカンガ研究家の織本知英子氏がカンガについての歴史やカンガの特徴についての講義を行った。織本氏は年に 1 度は必ず現地へカンガの買い付けに行っている。そのため織本氏から語られるのは今現在のアフリカについてであり、参加者は異国の話に興味深げに聞き入っていた。講義ののち、参加者は織本氏からカンガの着方のレクチャーを受け実際にカンガを身に纏ってみた（**図 6**）。カンガは巻き方や結び方の違いで自由に着ることができる。レクチャーでは、スカート・エプロン・ポンチョの３つの着方を試した。参加者は、最初こそ真剣な面持ちで織本氏の説明を聞きながら着ていた。しかし、一度身に纏うと色鮮やかなカンガのパワーか気分も上が

るようで、最終的には参加者同士で見せ合いっこをしたり記念撮影をしていた。一通りカンガについての知識を得たあとは、午後から制作するカンガのためのセイイングを考えてもらった。セイイングを考えるときに設定したテーマは「日頃のことを振り返って日常をみつめなおし、伝えたい他者へのメッセージや主張したいことを考えて言葉にする」というものである。考えてもらったセイイングはポジティブな言葉が多かった。

・参加者が考えたセイイング一覧

勇気を持ってチャレンジしよう
人は石垣、人は城
Everything goes well based on decision.
起こることは全て必要があって起こること
Qué, Será, Será.
My Heart with Five Senses
I am happy because you are here.
私はあなたの太陽よ
また会えたわね
笑顔と感謝の気持を大切にね
平和な世界を 平穏な日々を
今、とても楽しくて幸せな時間を過ごしている
This Is Me!!!
MAISHA MATAMU LAKINI MAFUPI
ASENA NZONI HUSHEREKEE SIKU NI RERO

「いきヨウヨウ講座」では参加者が心も身体もリラックスできるよう、必ずティータイムを設けている（**図 7**）。この時間は、参加者の円滑なコミュニケーションにも繋がる。今回はカンガゆかりの地アフリカにこだわり、ケニア産の紅茶とウガンダ産のドライフルーツを用意した。

制作では、あらかじめ内枠と外枠の黒線を引いた 90 幅× 110cm の布に、大型スタンプと小型スタンプを使って模様を形成した（**図 8**）。参加者は、一度布にスタンプを押すと引き返せない不可逆性と大きな布を装飾するためのバランスには苦心している様子だったが、大きな布にスタンプを押すという普段ではあまり味わえない体験に心踊らせている者も多かったように思う（**図 9**）。セイイングの部分は転写シートに出力しアイロン熱で貼り付けた。完成後、ひとりずつ制作したカンガを披露し、織本氏から一言ずつコメントを受けた。作品を発表するたび全員から拍手が起きた（**図 10**）。制作後の達成感と他者を認め合う和やかな雰囲気で幕を閉じた。

まとめ

第 4 回いきヨウヨウ講座では、当館の所蔵作品である東アフリカの布・カンガをテーマとした。講座終了後にアンケートを実施したところ、「初めての体験で楽しかった」という意見が多数あった。また、「カンガについて興味があったが期待以上の内容であった」という意見もいただいた。筆者は、「幼女に戻ったようで無心に楽しむことができた」という意見が印象深かった。普段の生活ではあまり馴染みのないカンガついて知り、制作す

ることで新しい体験が提供できたといえる。筆者は今回のワークショップ企画を通して、参加者が『楽しい』と思えるかが重要だと思った。新しいものに触れたり、作品制作に熱中して取り組んだり、人と共有したり、このような体験また学びや発見が『楽しい』を生む。まず企画者自身が興味をもつこと、おもしろいと思うことがあり、それらをどうワークショップやプログラムに落とし込んで参加者と共有し伝えるかが重要だと考える。今回は高齢者向けプログラムであったが、今後も美術を通して、世代に関係なく『楽しい』と思える学びや体験を提供していきたい。

（うえのまほ　福岡市美術館学芸員）

〈註〉

（1）中野民夫『ワークショップ―新しい学びと想像の場―』（岩波新書、2001 年）より引用

（2）織本知英子『Art of Communication：カンガ　主張する布』（ポレポレオフィス、2013 年）

（3）織本知英子『カンガに魅せられて』（連合出版 1998 年）、織本知英子『カンガコレクション』（ポレポレオフィス刊 連合出版 2006 年）

（4）バインダー T-571 を 100% に対し、ネオカラー（黒）6%、フィクサー２% を撹拌したもの。

図 1　第 1 回いきヨウヨウ講座「わたしの桜、私の梅」作品

図 2　第 2 回いきヨウヨウ講座「音と色とかたち」制作の様子

図 3　第 3 回いきヨウヨウ講座「きもちの樹をつくる」
デイビッド・ナッシュ《内側 / 外側》鑑賞の様子

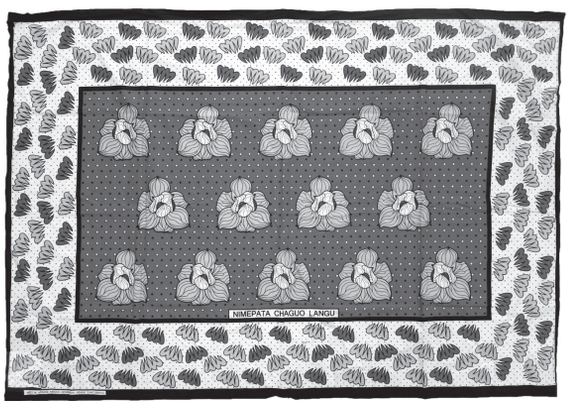


図 4　カンガ実物

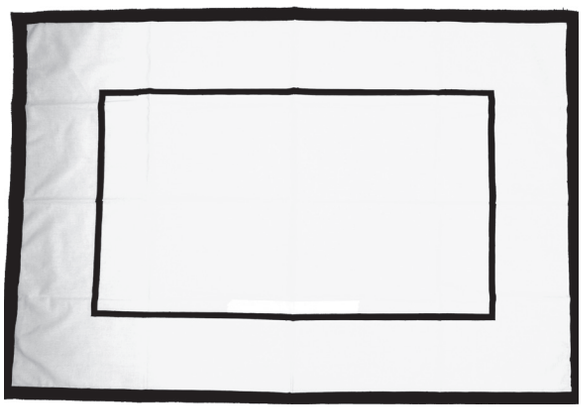


図 5　カンガの黒線を引いたもの

図 6　カンガを身に纏っている様子（右）織本氏

図 7　いきヨウヨウ講座内で設けているティータイムの様子

図 8　スタンプ　木製とウレタン素材のもの

図 9　布に大きいスタンプを押して制作している様子

図 10　制作したものを発表している場面

【報告文】ラファエル・コラン≪海辺にて≫の輸送

渡抜由季
森直義

1. 概要

本稿は平成 28 年度から 30 年度にかけて行われた美術資料等の輸送のうち、ラファエル・コラン≪海辺にて≫の輸送を記録・報告するものである（口絵）。福岡市美術館はリニューアルに伴い平成 28 年 9 月 1 日から平成 31 年 3 月 20 日まで改修工事のため閉館し、この改修工事に先立って美術資料を輸送した[1]。対象となる本作品は縦 297.0 × 446.0cm という超大型の彩画である。あまりに巨大であるために、開館以来、一度も館外に出されたことがなく、文字通り「門外不出」の作品であった。しかし、今回の大規模改修工事を契機に初めて輸送を必要とする経緯にいたった。これは超大型作品を所有する美術館特有の事項ともいえるが、超大型絵画の移設は他館にもいくつか事例があり、作品を巻く他、作品を分割し移設するケースもある[2]。環境や条件によって輸送手段の選択を変えるということは当然であり、まずは、その判断のための選択肢を増やすことが重要といえるだろう。この報告が作品を安全に輸送するための手段として、その選択肢の一部になれば幸いである。

2-1.　作品の状態

本作は麻布に描かれた油彩画で額装された状態で収蔵・展示されていた。画面と裏面いずれもガラス板や裏板といった保護処置はされておらず、ほぼむき出しの状態であった。にもかかわらず絵具の固着状態は非常に良好であった。ワニスは塗布されていないこと、また補彩跡が作品全体に点在していたことが目視および紫外線蛍光反応調査から確認できた（図 1 ）。絵具層は、灰白色の地塗り層に淡い色調の絵具層が筆を用いて重ねられている。ハイライトには白が使われ、しっかりとマチエールが残されている。支持体である麻布は、上部左側と中央部分に 4 か所、布の破れを補強するための布が貼付されていた（図 2 ）。裏面右側の上下部分には「 HARDY-ALAN 56, Rue du Cherche-Midi / PARIS / FABRIQUE 7, Avenue Victor Hugo à Vanves」の印が記されていた（図 3 ）。支持体側面には補強のため別の麻布が縫い付けられており、オリジナルの麻布に縫いつけられていた。画面に測光線を当てたところ、縦にいくつもの折れ跡が残されていた。その間隔から、過去に巻かれた跡が残されたものと推測する。麻布は木枠に張り込まれており、木枠の中桟は縦に 4 本横に 2 本設けられていた（図 2 ）。縦の中桟は、木枠の上辺から下辺まで一本板で通っており、横の中桟は約 80cm の長さで、それらが縦の中桟と交差・接合していた。中桟交差部分には楔が取り付けられていたが、接合部の数か所は耐久性が低下していた。中桟の接合部には〇や△といった鉛筆跡が付いており、おそらく組み立てる際の目印となっていたと推測する。また、中桟の裏面下部には文字が書かれていた（図 4 ）。

2-2.　作品の来歴、安永幸一氏の証言

ラファエル・コラン（1850 年－ 1916 年）は 19 世紀末から 20 世紀にかけて活躍したフランスアカデミズムの画家であり、黒田清輝をはじめ明治洋画壇で活躍した画家達の師である。伝統的な古典技法を踏襲しつつ、柔らかい光の描写と軽やかな裸婦の表現が特徴といえる。1892 年の制作当時の経緯、また下図の存在について

は三谷氏が過去に研究・発表しているため詳細は割愛する[3]。しかし、その中で黒田清輝によるラファエル・コランの邸宅を訪れた際の記述が非常に重要と思われるので、その記録を取りあげたい。「吾師のコラン氏が海邊の圖を描かれる時に水色の布を庭に敷き、其れを海に見立て其前にモデルを立たせて寫生せられた。其時拙者に向つて彼の布が空の色を受けたる所は海面の色と殆んど同じ様だ下圖を作るには是れで充分だと云はれた事がある」[4]。下図とはいえ本作がもつ柔らかな光は、この手法を用いた影響があると考えられる。

制作された本作品は、1892 年にパリのサロン、1900 年のパリ万国博覧会に出品した後に日本にもたらされた[5]。1932 年に東京で開催された「世界古美術展覧会」にも≪海辺の舞踊≫という名称で出品されている。しかし、そこから 1974 年に福岡市美術館が購入するまでの記録はほとんど残されていない[6]。さらに購入時の様子についても、当時学芸係長であった安永幸一氏が一部証言を記録したのみである[7]。安永氏は本作品の購入にあたり多くの役割を担っており、その証言は非常に重要なものといえる。そこで、再度安永氏にインタビューを行い、当時の様子について伺った[8]。下記に要点を時系列で並べる。

① 画廊がどのような経緯で本作品を購入したかは不明のまま。
② 河北倫明氏を通じてフジカワ画廊から≪海辺にて≫の打診を受けた。
③ フジカワ画廊から当館が購入する前､画廊の依頼によって修復家の黒江光彦氏が本作品を全面的に修復した。
④ 1974 年秋冬頃、安永氏ほか関係者数名で画廊に下見に行った。その際作品は巻かれた状態で置かれており、巻いた状態で梱包するための木箱も存在した。画廊の内部は広かったため、作品を広げて下見をした、その当時の様子を「かなり画面も手を入れてあったような気がしたんだよ。僕もまぁ全然詳しくはなかったけど、画面が痛んでいるようなことは全くなかったんだよね、奇麗だった」と安永氏は証言している。
⑤ 福岡市が所有する唯一の文化施設だった少年科学文化会館（現在の福岡市科学館の前身）の倉庫に一時保管のため輸送した。
⑥ 収集審査に諮るため、安永氏と尾野正晴氏の 2 名がキャンバスを巻いた状態で肩にかつぎ、会場となる西鉄グランドホテルへ運んだ。これは当時、美術品の取り扱いは学芸員のみという風潮があったためという。
⑦ 1974 年 12 月、収集審査会を西鉄グランドホテル 2 階の会場内でキャンバスを広げて審査した。
⑧ 一度、作品を少年科学文化会館に戻し、巻いたまま年度末まで保管した。この時も作品は安永氏と尾野氏の 2 名で運んだ。
⑨ 1975 年、年度明けに福岡市内の民間貸倉庫を借りコラン作品を含む収集作品を移設し、開館直前までそこに保管した。
⑩ 開館直前にコランを美術館の展示室内へ巻いた状態で運び入れた。
⑪ 展示室内で黒江氏ら数名によってキャンバスに張り込まれた。

この証言から、過去に修復された後、少なくとも 3 回はキャンバスを巻かれていたことが伺える。巻かれた回数が複数回に渡ったにも関わらず、現在も画面上の絵具層の固着状態は良好であったのは、コランがフランスアカデミズム絵画の伝統的技法を守り制作していた、という一つの裏付けにもなるだろう。

3. 処置材料選定と輸送方法の検討

本作品の安全な輸送方法を検討するにあたって、まず三つの前提があった。一つめは、福岡市美術館館内は展示室と収蔵庫を繋ぐエレベーターが存在するが、そのままの形状では本作を載せることが出来ない状態であったこと。二つめは輸送手段が限定される上に、輸送のリスクが他の絵画よりも高いことが想定されたため、館内保管を原則としたこと。三つめはエレベーターを介さずに展示室から収蔵庫へ繋ぐ導線も存在するが、その場合非

常に狭い出入口を通らなければならなかったこと。これらの制限の中で、開館準備期間と同様に巻くという選択肢以外に、考えられる方法として、工事の時期に合わせて出入口を壊し広げることも想定したが、導線の確保、粉塵対策や温湿度管理、セキュリティの問題の他に工事の工程・日程調整など問題が次々と想定されたため、早々に断念した。結果的に当初の予定通り、作品を巻くという方法に落ち着いたのである。ただし、巻く手段を選択して問題がなくなった訳ではない。油彩画を巻くという行為は絵具層の亀裂や剥離、剥落、さらには巻き跡の発生等、の危険が孕んでいる[9]。例えば、油彩画の画面側を内側に巻いた場合、絵具層は横方向に負荷がかかり、亀裂や剥離、剥落を発生させる要因になる。そのため画面側を外側に向けて巻くことが必須となる。また、巻かれた状態で保持し続ければ、巻かれる力や保管状況によって巻き跡が残る。これらの問題に対し、予防措置として太い巻き芯を用し、画面を外側にして巻き取ることで作品への負荷の軽減化を図った。また、保管中は作品を木枠に張り込み直し、巻きぐせを予防することとした。絵具層だけでなく支持体である麻布の状態や、額、木枠にも注意を向ける必要がある。これらを再度安全に解体・組み立て出来ることが条件となるためである。事前調査の結果、本作品は巻き取りと張り込みに耐えうるだけの強度があると判断し、巻き取り作業に踏み切った。

4. 作業工程

今回の作業工程は 2016 年 11 月 7 日～ 10 日（4 日間）および 2018 年 11 月 27 日～ 12 月 5 日（9 日間）の計 13 日間をかけた。往路と復路の作業工程は下記の通りである。

往路	復路
① 点検	① 点検
② 剥離止め	② キャンバスの巻き取り、梱包
③ 額装解除	③ ルースライニング用布の取り外し
④ 裏面洗浄	④ 木枠の補修
⑤ キャンバス取り外し	⑤ 木枠の解体
⑥ 変形矯正	⑥ 移動
⑦ ルースライニング	⑦ 木枠等の組み立て
⑧ 作品の張り込み	⑧ 開梱
⑨ 作品の巻き取り・梱包	⑨ 側面部の裂けの補修
⑩ 木枠の解体	⑩ 作品の張り込み
⑪ 移動	⑪ 吊り金具の取り付け
⑫ 木枠等組み立て	⑫ 洗浄
⑬ 開梱・作品の張り込み	⑬ 撮影・調査
⑭ 点検	

今回はこの中で特に特徴的といえる作品の巻き取りについて述べる。作品を巻取るにあたって守るべきことは前述した通り、出来る限り作品に負荷をかけないよう巻くこと、また、描画面を外側にして巻くことであった。これは、いずれも描画面のマチエールや絵具層の厚みのある箇所などが特に亀裂剥離や剥落の危険性があるためであり、巻くことによって細かい亀裂や剥落が発生する恐れがあるためである。そこで、絵具層への負担をかけないよう直径 80.0 ×長さ 400.0cm の太い巻芯を用いそこに巻き付けることにした（**図 5**）。また、導線の途中には、階段を降り、さらに外部に出るという選択があったため、巻き終わった作品の上から描画されていない箇所を選び紐で結び固定し、木箱に入れ梱包した[10]（**図 6**）。作品を巻いた状態で 2 階の展示室から階段を利用して 1 階へ降ろした後、館外へ運び、さらにトラックヤードを通じて館内収蔵庫へ輸送する方法を選択した。収

蔵庫内へ運びこんだ作品は再度木枠に張り込んだ。基本的に復路は往路の工程を逆に行うものであった。ただし、復路の戻し作業時には紫外線・赤外線・蛍光X線等の光学調査が追加されている。

5. まとめ

今回の輸送作業で、2度巻き取りと作品の張り込み作業を行ったが、支持体、絵具層、地塗り層ともに安定している。従来は張り込んだ状態で移動する際キャンバスの振動と揺れがかなり大きかったが、ルースライニングを施したことで、それも改善された。ただし、木枠がゆがみやすく、キャンバスの張りも僅かに弱くしているため、引き続き移動には注意が必要である。将来、また何らかの理由で本作品が巻くことがあることが予想されるが、しっかりと現状を維持した上で記録を残し伝えていけば、今後も移動は可能だろう。絵画あるいは作者そのものの価値が忘れられ、廃棄処分という悲しい選択をしてしまった例もある(11)。技術的な問題であれば必ず何らかの解決策や糸口を見つけることができるが、作品そのものの存在価値が忘れ去られてはせっかくの選択肢を作る意味もなくなる。やはり大切なのは記録を残し、この作品を所有しつづける意味や意義を伝えることなのだろう。

最後に、本作品の輸送にあたって東海大学の田口かおり氏に作品調査、助言など多大な協力を賜りましたことを深く感謝いたします。

（わたぬきゆき　福岡市美術館学芸員）
（もりなおよし　森絵画保存修復工房）

註：

（1）詳細は渡抜由季「平成28年度福岡市美術館大規模改修工事に先立つ美術資料の輸送」『福岡市美術館研究紀要』6号、福岡市美術館、2018年、pp.11-18を参照のこと。

（2）・神奈川県立近代美術館所蔵の田中岑≪女の一生≫の輸送の事例、この時は作品を分割し輸送した。詳細は桐生論 他「田中岑「女の一生」壁画移設に伴う修復」文化財保存修復学会第39回大会、2017年を参照のこと。・諸橋近代美術館所蔵のサルバドール・ダリ《テトゥアンの大会戦》の輸送、輸送方法は作品の巻き取りを採用した。詳細は諸橋美術館機関誌「DALImo」（2017）を参照のこと。

（3）三谷理華「ラファエル・コランとフォントネー＝オ＝ローズのアトリエをめぐる一考察」『美術史』美術史學會、2010年、pp.323-339

（4）黒田清輝「画壇叢話」『精華』第一巻第一号、1903年、pp.12

（5）三浦篤（監修）福岡市美術館（三谷理華［ほか］）（編）『ラファエル・コラン展図録』、1999年、pp.92-93

（6）一説によると松方幸次郎が所蔵していたという。（（5）前掲書、pp.26）

（7）①『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ』より「安永幸一オーラル・ヒストリー　2016年2月6日」の証言（URL　http://www.oralarthistory.org/archives/yasunaga_koichi/interview_01.php、最終アクセス2019年1月26日）②安永幸一「美術館うらおもて」2017年3月29日　西日本新聞（朝刊）

（8）インタビューは2019年2月1日（金）13:00～14:00に福岡市美術館内学芸課にて行った。

（9）指触乾燥の段階といった描き上げたばかりの油彩画の場合は、本文で挙げたリスクに加えて、作品同士の接着や絵具の皺発生等の可能性が追加される。

（10）復路の戻し作業時には新規エレベーターを利用して展示室へ運び込むことが出来た。

（11）2018年、東京大学中央食堂にて展示されていた宇佐美圭司≪きずな≫が中央食堂の全面改修工事にともない廃棄された事案は記憶に新しい。

図１　ラファエル・コラン《海辺にて》（紫外線蛍光反応画像）

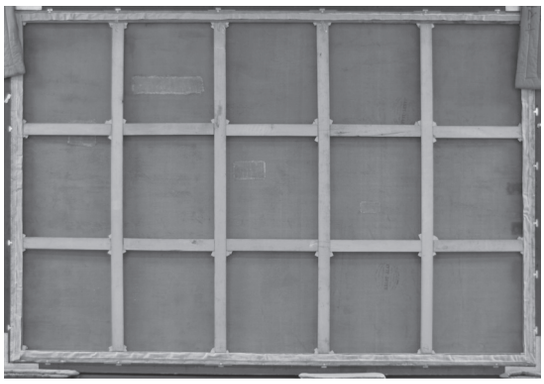


図２　作品の裏面

図３　HARDY-ALAN のマーク

図４　木枠裏面に記された文字

図５　作品の巻き取り

図６　作品固定と木箱梱包

図７　作品輸送

図８　収蔵庫への仮置き

【資料紹介】 満州の甲斐巳八郎
雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事④

中山喜一朗

解　題

第139号（昭和10年2月1日発行）から約1年間の記事と作品を掲載している。そのすべてが「満州郷土画譜」シリーズであり、他の記事や挿絵などは発見できなかった。つまり『協和』における甲斐巳八郎の仕事がほぼ固定化されたとしてよいと思われる。

グラビアページの紙質を生かした墨調の作品が目立った「満州郷土画譜」シリーズだったが、第149号あたりから紙質が落ち、本文ページと変わらなくなってしまった。その結果、巳八郎の作品もまた白黒の対比的な効果を主眼とした作品に変化している。一方では第143号（昭和10年4月1日発行）から自ら撮影した写真掲載も始まり、タイトルにわざわざ［写真と絵と文の構成　満州郷土画譜35　観音老母廟会］などと明記している。以後、絵画と写真の併用が続き、№151［満州郷土画譜39　蒙古包］や№154［満州郷土画譜42　茶館］などでは作品の上から大胆に写真をかぶせてコラージュ風の表現になっている。ページレイアウトまで含めて巳八郎が編集していたと考えられる。

またこの頃になると巳八郎が満鉄社員会嘱託となった時からの先輩画家で、文筆家としても「クリーニング水滸伝」を連載していた伊藤順三の挿絵がほとんど見当たらなくなる。伊藤が満鉄のポスターデザインなどを手がけていて多忙だったためもしれないが、『協和』に携わる画家の中心はすでに巳八郎だったと言えるだろう。

先にふれた№151［満州郷土画譜39　蒙古包］は内モンゴルに旅行して取材したものであるが、極寒のため強い酒を飲み過ぎて急性胃カタルになり、巳八郎は終生胃病とつきあうはめになった。ダライノール付近で撮影された写真（右上・『甲斐巳八郎展』図録年譜P75より再掲載）が遺品として残っているが、この写真には32才の巳八郎（向って左端）と一緒に、№151［満州郷土画譜39　蒙古包］に登場する女性たちも写っている。

（なかやまきいちろう　福岡市美術館副館長）

凡　例

1　甲斐巳八郎の挿絵や記事が掲載された『協和』の号数（発行年月日）を見出しとし、掲載順に配した。掲載ページは省略した。
2　自筆記事、挿絵や作品には通し番号をつけて№で示した。最終的には、№は『協和』に掲載された全作品点数とほぼ一致する。
3　活字化されたタイトルや署名などがある場合は、№のあとに［　］で記した。ない場合は、［なし］とした。
4　活字化されたタイトルや署名とは別に画中に文字や署名があり、解読可能な場合は「　」で記した。
5　ルポルタージュなどの自筆記事は、タイトル等のあとに全文を掲載し、挿絵をそのあとに配した。文章の旧漢字、旧仮名遣いは意味が異ならないかぎり現代表記に改めた。地名、固有名詞等はそのまま記した。原文は、グラビアページの文章以外はほぼ総ルビであるが、本稿では必要に応じて一部を残し、他は省略した。明らかな誤植は（ママ）としたが、意味が通じる範囲で訂正しなかった。
6　作品や記事の理解の助けとなる情報、語句解説などは、適宜＊印で記した。
7　挿絵は原寸ではなく、それぞれ縮尺は異なる。
8　原本が縦組の場合も、本稿では横組とした。

第 139 号（昭和 10 年 2 月 1 日発行）

№ 144［満州郷土画譜 32　満州の正月］

爆竹聲中一歳除　春風送暖人屠蘇

千門萬古瞳瞳日　總把新桃換舊符

これは王安石の賦である。今は満州にも支那本土にも屠蘇はない。ひとり日本のみが支那から渡ったまゝに慣用されている。

寝もやらず爆竹をならし明かした元日の朝は、大風のあとのように爆竹の殻が散乱して大戸を下した街の様子はひっそりとして、春聯に正月を偲ばせる他、見るべきものはない。

耳をつんざく鐘太鼓の音のみが、そこら中から聞えて来て限りなく喧しい。日本で三日三小夜を打ち鳴らすというのがあるが、満州では五日でも六日でも打ち鳴らす。

店を閉じて開かないのを以て誇りとする習慣は今日まで続けられているが、昔のように一ト月も一ト月半にも亙って店を閉じるようなことはしなくなった。

見たところ水を打ったような静けさのある日本の正月に較べて、満州の正月は喧しいだけで汚い正月である。（巳八郎）

№ 144「巳八郎」

＊1 ページ大のグラビア。以下、満州郷土画譜シリーズは基本的に 1 ページのグラビアである。春聯は、春節を祝うためにめでたい文句を赤い紙に書いて門口に張るもののこと。

第 140 号（昭和 10 年 2 月 15 日発行）

№ 145［満州郷土画譜 33　吉林］

冬の吉林はとげとげしい氷に威（ママ）すくめられて、わずかに歳の市の雑沓が旅の心に息ぶいてくれたに過ぎなかった。

北山（ペーシャン）はまだら雪に裸樹の小枝が灰色の煙のようにぼかされ頂上にかたまる数々の廟も山には不似合いなほどに、頭でっかちの感があった。

松花江は四辺の風物をおさえて強い真白な光を投げて動きを止めているし、野ら犬の転がり遊んでいる様が一里二里の遠くまでも見通せる大きな凄い冬景色も見捨てたものではなかったが、新緑の頃ならばどんなだろうとこの大きな景観の前に一応想像を廻らすのは自分ばかりではなかろう。

牛馬行、此処は場末の大衆相手の盛り場である。三角な広場の頂点に三角形の長い広告塔がたって、その下には駄菓子売りが郷土人形を商っていた。

支那料理の河魚料理もすばらしくうまかった。建物に木材が多く使われてあるのも南満からの旅行者にとっては嬉しいものゝ一つである。

物売りのケダルく眠くなるような竹や鉄片の音が北平の胡同の情緒を偲ばせて古都らしい落著きのある面影がこうしたものに窺えるのも喜びであった。（巳八郎）

№ 145「巳八郎」

＊吉林市の牛馬行には通天街という繁華街があった。

第141号（昭和10年3月1日発行）

№.146［満州郷土画譜34　蓋平］

蓋平駅から南に三十丁あまり、右手に満州にはめずらしい地平線のない幾重にも畳まった雪の山を眺め、左はゆるい丘陵が道路まで下りて来てそのまゝ城壁に辿りつく。城壁には丈の高いアカシヤが並び、林のなかには常は置き忘れられたような廟さんが、春聯を張りまわされて今日は目立って美しい。

城内は元宵節をひかえて芋を洗うような人出である。殊に西南門外の雑沓はウカウカ歩いていると踏みつぶされそうだ。

山楂子（サンザシ）は此処の名物ででもあるのか足ごしらえ物々しい大の男が一本のワラグツを肩にしているのが、群衆の二、三割を占める位であった。

西門を出て南に歩くと広々とした農村風景が展けてくる。この農村風景を右に見やりながら城壁に沿ってゆくと、柱を朱塗りにした魁星楼が城壁のつきるところに空に光って見える。その下が平康里になっている。場所もつくりも略々海城のそれと似て海城よりも田舎臭みが深い。土の色と変わらない平康里の地低い土塀が城壁に寄って二丁も三丁も続き、南の陽が冬の日とは思えぬ位に照り映えて、人々はそこを油玉のように動き、一段下手の広場に手品や村芝居のかゝっているのを何時迄も見守っている一群もある。春の気が何処とはなしに感じられて来る。（巳八郎）

№.146「蓋平城外　巳八郎」

＊蓋平（がいへい）は現在の遼東省蓋州市。文中で比較されている海城の魁星楼と平康里については、前号で紹介した№.132［満州郷土画譜　海城］を参照のこと。

第143号（昭和10年4月1日発行）

№.147［写真と絵と文の構成　満州郷土画譜35　観音老母廟会］

老母廟の廟会は満州のお祭の魁だ。例年ならまだ寒々とした風が吹くのに今年はもう素晴らしい春の光が、地の底から高梁の垣根に至るまで輝き、待ちに待った祭に集う村人の眼は甦ったように活々している。

老邊駅を下りて西北に十丁、夏は増水で草の葉一本見えなくなるという畑とも径ともつかぬ荒地をゆくと、先ずお祭につきものゝ野芝居に、アンペラがこいの馬車を並べて見入っている群衆が、目につく。芝居小屋のうしろは驢市がたち、廟までの一丁ばかりの間は小間物類、飴菓子、飲食店など子供の眼と嗅覚を唆（そそ）るものが立ち並び、廟前には厄除けの人形、鞋、面など、それから牛荘、海城、大石橋在で作られる泥娃娃（ニーローロー）（泥人形）に撥不倒（パンプータオ）（起上り小法師）の大小こまごましたものが美しく飾り出されている。

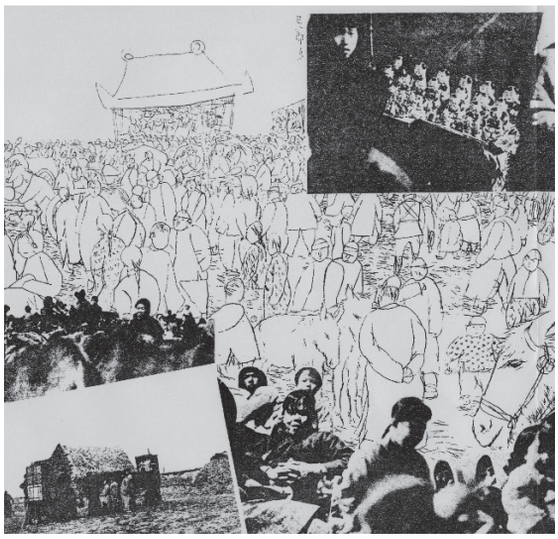
廟のうしろは材木の市、それを取り巻いて馬具類から高梁、柳の編物の市がまた大変な賑やかさだ。去年は大石橋方面から運ばれた木材は馬車で六十車だったという。それが五日間の祭に売り切れると聞いた。

老母廟の神体は本尊が観音で、左脇士に関帝の像、右に娘々四神が、村人のどんな無理な願いごとでもきゝとどけていられる。

今から百二、三十年前までは、そこらに置き忘れられた洞の廟さんに過ぎなかったが、村人のわがままな願いが一つ一つきさとどけて貰えるので村人達によって今日の立派な廟宇が作られたのだそうだ。

しかし村人にとっては廟さんのあらたかなることやイワレは大した問題ではない。春を真先きに運んでくれる村祭は、冬籠から甦った意識をはっきりと植えつけてくれる生活躍進への悦びの対象なのだ。それだから村祭には必ず生活要品の市がたつ。村人は一年間の生活要具を村祭に求め、これから本格的な生活がはじまるのだ。（巳八郎）

№147「巳八郎写」



＊タイトルに［写真と絵と文の構成］とあるように、コラージュに使われている写真も巳八郎撮影と思われる。老邊は現在の遼寧省営口市にある行政区画老辺区である。営口市については次の［影絵芝居］にも出て来るので、同じ時期の取材と考えられる。

第144号（昭和10年4月15日発行）

№148［満州郷土画譜36　影絵芝居］

満州国建国後、各地の郷土的風物は逐次影をひそめてゆくなかにひとり、営口の影絵芝居がネオンサイン的文化とは無交渉に年中休みなく演じられているのは嬉しい。影絵芝居は日本の文楽にも較ぶべきもので、驢の皮を芝居人形の形に彫り、燈にすかせば美事な色彩のこまごましたのが塗られてある。大きさは一尺迄、影絵には三本の針金がいわえつけてあって針金の先に葦が取りつけてあり、巧みな手さばきで映写幕に踊るのであるが、人形使いは同時に声色の使い分けもする。手が空けば楽器も叩くというせわしさである。映写幕といっても活動写真のように観客の後ろから光を送るのではなく影絵は幕に常に接触していて幕内に十色光が三つ、幕と電灯との距離は二尺もない位、幕は縦二尺横一丈あるかなしで幕の下はアンペラでかこい、左右は紺布で光を防いでいる。このなかが楽屋で芝居の全機能はこのなかで動いている。人形使い二人、楽士八人それこそ立錐の余地のない狭々した楽屋である。小屋は百人を容れるに足らぬ壁落ち柱傾いた廃屋で化物でも出そうだ。影絵が踊って咽喉をしめられるような余韻のながい歌声と楽器の音色がさびしく震う雰囲気は、現世から全く隔絶された千年も二千年も昔に生きているような気がする。奇怨報という芝居の哀れがこゝではもっと哀れに強調され、殊に女の哀切な声色と共にかなしい音楽が流れると、過酷な歴史を続け来た支那の女達の窘束生活を詠嘆したその声が、そのまゝ歌となり、音楽となったのではないかと思う。蓋し近代的感覚とは縁のないこの驢皮影絵は歴史も伝統も習慣も何もかもを伝えてくれる大きな芸術ではないだろうか。猶場所は営口旧市街小平康里、木戸銭は国幣の十銭であった。（巳八郎）

№148「なし」

＊皮影戯（ピーインシー）と呼ばれる中国の影絵は、2011年にユネスコの世界無形文化遺産に登録され、中国各地でそれぞれの地方劇と密接な関係を保ちながら現在でも上演されている。国幣とは満州中央銀行が発行した満州国の通貨の通称で、正式には満州国圓。この記事が書かれた昭和10年には日本の円と等価とする金融政策が行われた。したがって、ここに書かれている「国幣の十銭」も、昭和10年当時の日本国内

の十銭とほぼ等価と考えてよい。ちなみに当時の物価では蕎麦やカレーライスが十銭程度である。

第 145 号（昭和 10 年 5 月 1 日発行）
№ 149「なし」 № 150「なし」

№ 149・150［満州郷土画譜 37　端午節の門猴兒（メンコール）］

散歩のついで、そこらの満人部落を見歩いていると、戸口に布でこしらえた猿が弁慶の七ツ道具のようなものを持って、桃の小枝にぶら下げてあるのを見うける。日本でも端午の節句に幟の下にさげている猿公があるが、あれよりも念がいっていて面白い。（桃は五木の精にして邪気を圧伏し百鬼を制す）とあるから桃の小枝につるすのだろう。猿が魔除けに使用されるのは日本も同じである。猿が手にしているのは猿牙棒と言い、悪魔をうちのめす棒らしく、又、破邪の剣を持っているのもある。箒も病魔を掃うもの、箒は幔箒と言って、五色の麻を絨線（毛糸）でくくっている。荷包（手に持っている袋）には銑鉄、豆。朱砂がはいっている。銑鉄は農具を意味するものか、豆は作物だろう。

伝説には唐の太祖が遼東に親征した時、または明の永楽帝が侵略した頃、兵乱を逃れる為の思いつきだと伝えられ、孫呉（ママ）空だと言われている。それとも倭寇と結び考案出来ないこともない。

分布範囲は遼東半島の海岸近くに多く、今日までの調査では瓦房店より北にはないものゝようである。（巳八郎）

＊紙面の都合で図を先に掲載した。作品２図は同じ門猴兒の飾りの様子と細部をそれぞれ描いたもので、№ 149 正面奥の扉に飾られた黒い人形が門猴兒である。同じページに「資料・須知善一」と注釈が記され、門猴兒の写真が３点掲載されている。参考にその１枚を掲載する。

《参考》門猴兒の写真

第 146 号（昭和 10 年 5 月 15 日発行）
№ 150［満州郷土画譜 38　復活祭（パスハ）］

思いなしか哈爾浜駅舎内のキリストの金像には路警が大ッ平で燈をあげていたし、寺院の鐘も誰に気兼ねがいるものかと打ち鳴らしているようにきこえた。明日（四月二十八日）はパスハである。日本人ならばお盆を待つ心持か。寒国の春は五月も間近だというのに神壇を飾る花とてもない、漸く芽をふい

た猫柳が唯一の花である。ミルク配達人の老人は老妻を馭車台の脇に坐らせて、我家への帰り車であろう、如何にも頬笑(ママ)ましい顔から時々馬を追う（チョッ）という声が悠長に、満人の掛声の神経質なのに比べてゆとりのある和かさが見える。家には愛娘の手でつくられたパスハ（復活祭に作る菓子）や赤・紫に彩った卵や数々のご馳走が老夫婦を待ち受けていることだろう。ロシア人には一年にクリスマスとパスハとマスリニュッツアの三大行事がある。このなかでもパスハに一番力を入れる。田舎の百姓にとっては、殊に一年の大半を冬籠りと残りの僅かな月日は働き通すものにとって、何はおいてもパスハは楽しいものである。ロシア人はパスハを楽しむ為には一年間別に何はなくとも働き続けることを苦としない、とまで言われているほどである。

巳八郎

№150「巳八郎写」

＊パスハ（復活祭）の前には40日間の断食の期間があり、さらにその直前にあるのが文中にある「マスリニュッツア」である。毎年２月中旬から３月初旬の間に行われる祭で「バター祭」と訳されている。

第147号（昭和10年6月1日発行）

№151［満州郷土画譜39　蒙古包］「巳八郎寫」

扎賚諾爾炭砿から東南に二十六粁、干草ばかりの緩丘の幾つかを越えるとダライ湖畔に出る、更に湖畔を右に五粁余行くと湖面より五十米ほど高い丘に蒙古包が二つ、包のぐるりにはタークル車が乱雑にころがっている。先ず物凄い蒙古犬に誰何されると、羊を殺していた婆さんが犬を壓えて振向いた顔には羊の血が額から顎に流れ、左手は血糊でベトベトしていた。

包に迎え入れてくれた婆さんは牛糞を手づかみにして炉にくべ、敷物をすすめる傍ら牛の仔を片隅に追いやって孫娘に何か頻りと言いつけているようであった。中央に囲炉裏があり、真上の天窓から牛糞の煙が出てゆく。今殺したばかりの羊の脚やら頭やらが包のなかに転がっており、可愛い仔牛が六匹おとなしく遊んでいる。仔牛と三尺とは離れていない壁にくっついて神壇があり、また二三尺隔てて炊事道具の簡単なものが油と血に汚れたまゝ何十年と使い古したものであろう、美事な色に光っていた。包を出て湖畔に下ると千に近い群羊を、羊皮を真赤に彩った着衣の若い女が白馬に跨り見張っている。人怖じをしない名も分からぬ大きな鳥が羊の間を飛び

まわっていた。（巳八郎）
＊紙面の都合で先に作品を掲載した。タイトルの蒙古包は、ルビはないがモンゴルパオと読ませるのだろうか。文中では婆さんと孫娘になっているが、巳八郎が撮影した写真を見ると、孫ではなく娘であるかもしれないなどと思ったりする。また、扎賚諾爾（ジヤライノール）は、ロシアと国境を接する内モンゴル自治区にある地名である。蛇足ではあるがジャライノール炭砿を舞台とした映画『ジャライノール』（中国・2008 年）が日本でも公開されている。

第 148 号（昭和 10 年 6 月 15 日発行）
№ 152［満州郷土画譜 40　ターフリ人（祖国を守る意）］

昔から蒙古人のなかで戦争に強いのはターフリ人だと言われている。三百五十年前のロシヤの書物のなかに、ターフリ人と同人数で戦争をしたら必ず負けるであろう、とかかれてあるそうだ。清朝時代には蒙古人を軍人旗と遊牧旗に分けていたが、彼等は軍人旗に属し、北方鎮定の清朝軍には必ず先鋒を承っており、また度々のロシヤの東漸によくこれを喰い止めたのも彼等であったという。

現在ターフリ人は二万五千人位しかいない。主として興安北分省に居住し、その殆どが固定住宅に住み、農耕を営むものが多い。閑散期には河川を筏流しに賃金労働をなすものもあって、彼等に梅毒患者の多いのは清朝の蒙古人懐柔策の犠牲となったのにもよろうが、川を流す一ト月か二タ月の間にやはり彼等の相手の淫売婦に貰ったものが多かろう。

系統はその発生地であるオノン、ドードル、ゴボル、アオラ、モリドンに分けてあるが、種族としては明瞭な判定は下されていない。便宜上学問的にはツングースとなっている。

現在の蒙政部のなかには蒙古人中最も数の少ない彼等が首脳部を占め、満州国参議の貴福とその息凌陞の興安北分省長はターフリの官吏としての代表的人物であろう。

官吏となった彼等は給料を貰うとその大半を割いて馬を買い、同民族に与えて民族更生をはかっている。

昨今官吏のいかがわしい振舞ばかりの只中にあって、黙々としてのこの美わしい健気な行為は我等大いに学ぶべきであろう。

タークル車

ターフリ人を知らないものでも北満を旅行した人ならタークル車を見た人は多い。潟地や緩丘の大きく起伏する荒原をヨレヨレに今にも毀れそうに見える恰好をして多くは牛が牽く大輪の荷車である。

ターフリ人の家の前には必ずタークル車の五台や十台ないところはない。

これは彼等特有のもので、昔からターフリ人はこの車を自家で製造し使用しているが車の構造は凡て木製で一本の釘も使用されていないのが特徴で、また重量が軽く大輪な為に如何なる路も如何なる潟地（又渉河）も他の車に較べると自由に動き、便利である。

漸次この車が他民族にも普及したが、製造はやはりターフリ人の手になるものが多く、近世漢族が入植してからこれに達呼里車と言い読み訛ってタークル車と言うようになったものらしい。

その部落と家屋

彼等は必ず集団をつくって聚落をつくる、そうしてその位置を定める時に南に川北に丘陵を控えた処を必ず選定する。然も河水は飲用に供する事なく、必ず井戸を掘っている点が他民族と大いに異なる点であろう。

家屋の外観は日本の古代建築に似ていて親しみがある。

垣は丸太に板塀のものもあり、高粱をあんでつくったものもある。門前には円形の牛糞貯蔵棚があるのはホロンバイル地方の一般蒙古人と変りはない。門に近く影壁（突立）のあるのは漢人の家屋に似ている。

門をくぐって前庭には倉庫があり、碾子がある。母屋には大きな煙突が二本家から地を這って一間位

のところから煙突となって突き出ているが、地を這っている箇所には鶏や豚の仔､家鴨を飼っている。

便所は普通の漢人種と同様にない。西と南側には障子があり、南側の窓は二段になっていて、上の段は押しあげるようになっており、厳寒でも昼間は必ずあけている。東に窓を作らぬのは朝方は東が一番冷えるからである。これはホロンバイル地方の気象学から見て全くこの通りだそうである。

彼等の農家のどの家に這入って見ても漢人よりも清潔である。左頁に図示せる如く、三つある部屋の央は土間になっていてそこには竈が多いところには三つ位ある。竈の脇には鶏小屋を造っているのなど面白い。

この土間の左右二た部屋が家人の部屋になっていて、普通家長は家を這入って左の方の部屋の入口側に坐る。家長の前には火鉢が置いてある。

宗教・習慣など

宗教はラマ教を信じ、跳神（シャーマン教）は病気の時、或いは天災地変の時にのみ巫女に頼んで平癒を祈る程度である。

家に伝染病（風邪、天然痘）のあった時は、その英に赤片をあげるなどなかなか気が利いている。

家に老人があれば棺桶の用意をして置く、して置かないとその息子は親不孝者になる。

嫁入は極簡単で、服装は平素のものゝ新しいというだけ、豚の丸煮と焼酎位がご馳走とされている。

彼等は今日まだ血族結婚の悪弊を捨てない。

彼等の貌は蒙古人でもなく、漢人にも似るところがあり、鮮人らしいところも窺えると言った風で服装でも変れば全く見当がつかない。歴史のうちには各民族との雑婚の時代があったのであろうと思われる。

ギャバ

ギャバは系図のことである。彼等は祖先をサージリテハン(成吉思汗の弟)と言っている。それでギャバもサージリテハンにはじまっている。彼等の十戸か二十戸の集団部落にはこのギャバがあり、部落が膨張して分離する時はギャバを写して持ってゆく。

ギャバは一部落に三部揃えてある。一つは焼けた時の用心に、一つは死んだものを記入するもの、今一部は生まれたものを記入するものに、死んだ者は黒字を用い、生まれたものは赤字で記入する。しかしギャバには年代の記入がないために官位の記録によって時代を判定するより仕方がない。

ギャバは彼等にとっては日本の天照大神でもある。一年に一度はギャバを出してサージリテハンの霊と共に祖先の霊を祀るのであるが、近年生活の窮迫から三年後か五年越になった。日取りは各地によって異なった吉日を選び部落民総出のお祭が行われる。ギャバの前には豚と牛を殺して拝する。

民族更生へ

町に近く住んでいるターフリ人は、満州国建国後その子弟は漢人と同じ学校に学んでいるが、どの学級でも主席から二三番はターフリ人が占めている。彼等が同じ蒙古人のなかでも一等人数の少ないなかゝら蒙政部に多くの人材を送っているのを見ても如何に勝れた民族かが窺える。彼等にして血族結婚の風習から脱し恐るべき梅毒が如何に民族更生の上に暗影するものかを自覚したなら七百年前大蒙古建設に世界に君臨した成吉思汗の時代は来なくとも、満州国に於ける彼等の活躍にはもっと目醒ましいものを期待することが出来るだろう。

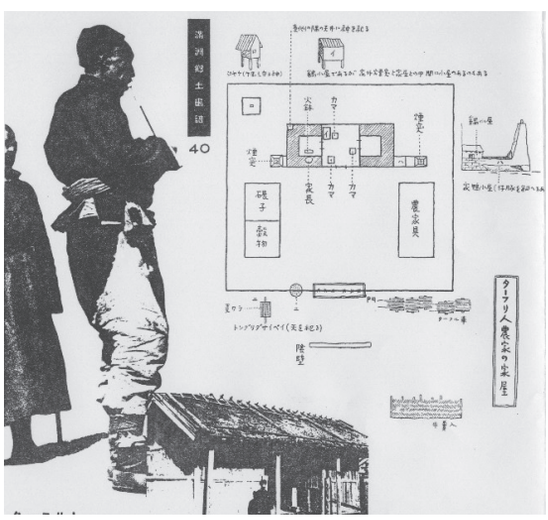
彼等が薄給を割いて牛馬を求め、同民族にわかつ心根は、これは他民族には絶対に見ることの出来ない美わしい民族精神である。

（資料は田尻末四郎君・文責甲斐巳八郎）

＊２ページ見開きのグラビアであるが、文末の記名にあるように巳八郎は文章しか書かず、掲載されている写真や平面図は田尻末四郎が提供した資料である。したがって№152には絵画作品は含まれない。しかしながら巳八郎がその優秀さを力説するターフリ人の姿を見たくなると思うので、参考として掲載された写真の一部と家屋平面図を転載しておく。

ターフリ人とは、現在は日本語でダウール族（またはダフール、ダグールなど）と表記されることの多いモンゴル系民族のひとつを指している。表記がターフリとなっているのは、現地で聞いた音声からであろう。文中には人口が約２万５千人とあるが、現在は10万人以上を数えるようである。また、ターフリ人の代表的人物として満州国参議府（皇帝の諮問機関）参議の貴福（1859-？）とその息子で興安北分省長である凌陞（1886-1936）の名をあげているが、この記事が掲載された翌年３月に凌陞はソ連やモンゴルと内通していたことが発覚して逮捕、処刑されている。父の貴福も責任を取って参議を辞任したが、その後の消息は知られていない。父とともに満州国独立に貢献した凌陞が関東軍の専横に不満を抱き、満州国軍・日本軍の軍事機密をモンゴルに漏洩した結果だが、この記事の翌年に起こる二人の刑死と失脚を、巳八郎はどう感じただろうか。

《参考》ターフリ人の写真と農家の平面図



第149号（昭和10年7月1日発行）

№153［満州郷土画譜41　小豆撰分工場］

寺児溝の満鉄舎宅街と向かいあわせて澤田組の小豆撰分工場がある。外観は赤煉瓦の狭い建物だが、中は倉庫ででもあったのだろう、二百坪ばかりの土間が五つに仕切られて、その一ト間四十坪位のところに二三百人の幼少老の満人女工がひくい腰掛に車座のようになって坐り、小豆の撰分をしている。埃りが部屋中にたち込めて蒸せて嘔吐を催しそうな臭いがする。高さ二尺足らずの机には縁がとってあって小豆がこぼれぬようになっており、机の上には小豆のまだ選別してないのがばらまかれ、女工は両手の指先を巧みに動かして小豆を赤、黒、白ボケ、花、不熟粒のなかゝら赤小豆だけを選り分ける。その手際の早いこと目にも止まらぬ早業で机の下の一斗入りの石油缶に赤小豆を落し入れる。女達の爪は、半円形にそぎとられたようにひっこみ、指先の肉も亦摩滅している。それで慣れたのが小豆に指を持って行くと両指を使用しなくとも小豆の方から喰っついてくるように見える。

仕事は冬季が主で、夏は冬の半分もない。冬の繁忙期には二百坪足らずの土間が千人に余る女工で埋まり蚕のあがり時のような壮観だそうである。

石油缶一斗入一杯を選別すると五銭であるが、缶一杯になるとあの小さい纏足の危なげな足どりで五六歳位の子供が検査員のいる秤の前まで運んで行く。検査員は斤目を秤り選別の良否を検分して合格したのには五銭のチケットを渡すようになっている。

この工場には日本人１人満人７人の検査員と監督がいるだけで何も面倒なものはない。新米に時々盗棒をするのがいるので帰りには出口で身体検査をする。

女工は寺兒溝の谷合苦力部落のものが多く、老虎灘から二十人ばかり山越して来るのもある。悉くが山東人で小さいのは四五才から六十才に近いお婆さんもいる。その六割は未婚者で結婚の支度金をつくる為に来るものが半数はあるようで、なかには一家をこれで支えているものもある。彼女達のなかには飯進上の前身者もあればコソドロの前身者もある。大連に同じ工場が三つあるがこの工場が出来てからコソドロが少なくなったと言うので、交番では喜んでいるという。

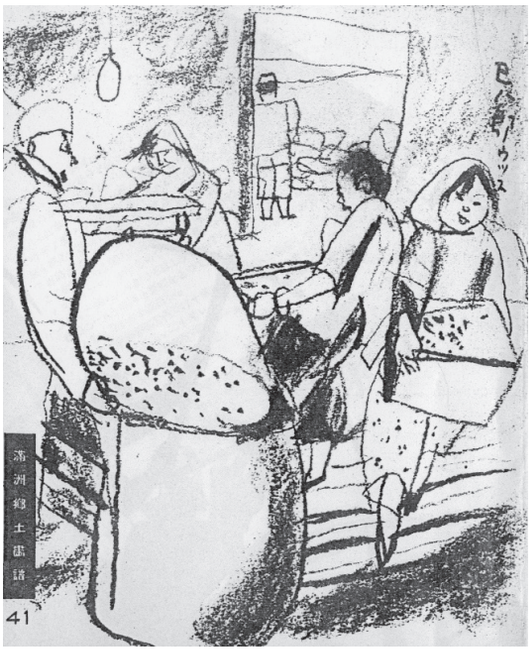
工賃は総て小洋渡しになっていて、五六歳の子供は一日かかって小洋の五銭を稼ぐのから熟練すると一時間に二杯１日十四五杯も選別して金に直すと一円は働くのがいる。

小豆は種の色んなものが一緒になっていて、また質の良い時とわるい時があるが質のよい場合は被傭者が儲かり質のわるい場合は被傭者は時間がかかって損をするということになっているので、雇主の方

はこれを逆に行くだけつまるところは同じ結果になる訳である。小豆の出所は東邊道から奉天、新京、その他各地から、出先は日本人の居るところなら何処と定まっていない。品は北海道もののマガイモノとして売り捌かれる。

多い時は一年に女工に払う賃金が十万円に上ったというが、今日では五六万どころらしい。そうしてこの金に大半は彼女達の故郷山東に流れ込んで行くという。(甲斐巳八郎)

№153「巳八郎ウツス」



＊1ページのグラビア扱いになってはいるが、紙質は本文ページと同じである。したがって、この作品の周囲に配置された4枚の写真は暗いところが潰れてほぼ真っ黒になってしまっている。写真や資料の提供者が注記されていないので、巳八郎自身の撮影と思われる。かろうじて内容がわかる1点を参考に掲載しておく。

《参考》

第150号(昭和10年7月15日発行)

№154［滿州鄉土画譜42　茶館］

奉天城内四平ら街通りの吉順絲房と言えば今日では日本人相手のデパートとして知らぬものはあるまい。しかし満州の臭いのある商品は何もない。それは商品の大半が安物の日本製品だからである。

この吉順絲房の向い側に凝香茶社と言う高級の茶館があるのはまだ日本人間には知られていないようだ。相当古くからあるものらしいが、室内の器物には気の利いた近代味のあるものも使用されていて一寸外人好みの装飾が窺える。例えば舞台や窓の桟などには純然たる支那色が残っておってテーブル、椅子などは新しい形式のものが使われているところ、北平の北海や中央公園の樹蔭によくある茶をすゝりながら漫然と時間を過す、あの気分によく似ている。それが室内であって、同時に講談や唄などを聴くというだけであるが、こゝでは茶を飲むという方が主で、聴く方は次であろう。こういう気分のものでは手近なところ日本の喫茶店と似たところがある。友人と語りあい、紅茶をすゝりながらレコードも聴ける点。が、茶館はやはり茶館独特のもので、喫茶店で人を待ちあわせたり、十分や二十分で席をたって行くというあわただしさはこゝにはない。ゆっくりと腰を据えて三時間でも五時間でも退屈なしに漫然と時をうつすそれだけが目的の場所である。巳八郎

№154「巳八郎ウツス」

＊写真３枚のうち２枚は作品の上に重なっているが、よく見ると写真の下に絵がないことがわかる。また文章の配列スペースも余白として残されている。モンゴルのパオを描いた№151も斜めに風景写真が貼られていたが、№154も写真と文章のレイアウトを含めたページ全体が巳八郎の構成である。なお、茶館に関しては確認できなかったが、吉順絲房は同じ建物のまま現在も営業しているようだ。

第152号（昭和10年8月15日発行）

№155［馬車と人力車］

夏の満州にはじめて足を運んだ人は先ず馬糞の匂いにヘキエキする。次ににんにくの臭い汗が発散する匂い、これは人力車だ。

兎にも角にも馬車と人力車の多いのは世界を通じて支那ではなかろうか。上海や北平では調査に困難する位居ると云うが、満州の四、五の都会地にも相当にいる。大連が馬車九百七十台、人力車が千五百十四台、これは甘井子、老虎灘の十台余りを除いた現在数である。

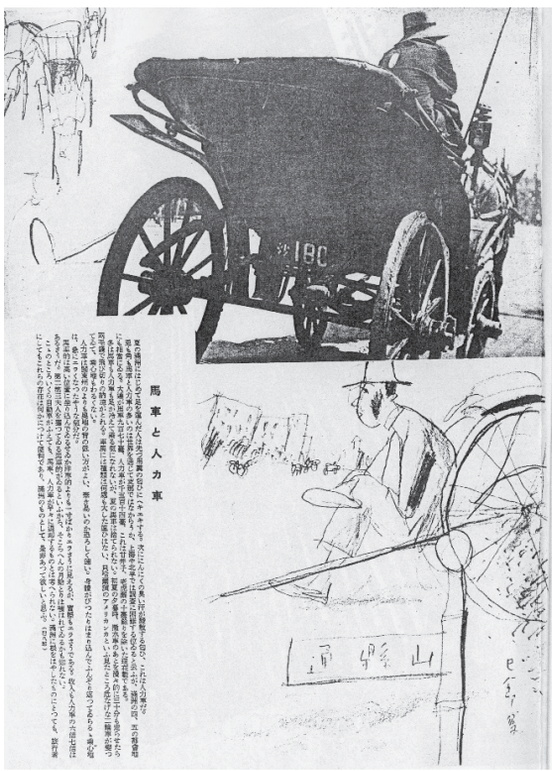
多は馬車も人力車も足が冷えて乗る気になれないが、夏の馬車は捨てられない。初夏の夕暮時、散水車のあとを漫々的に三十分も走らせたら両毛銭で飛び切りの納涼がとれる。馬車には種類は何処も大した違いはない、只哈爾濱のアメリカンカという見たところ危なげな二輪車が変っていて、乗り心地も悪くない。

人力車は関東州のよりも奥地の背の低い方がよい。牽き易いのか恐ろしく速い。身体がぴったりはまり込んでふんぞり返っていられる乗心地は、急にエラくなったような気分だ。

馬車的は高い位置に坐り込んでいるせいか洋車的よりも一寸ばかりエラそうに見えるが、実際もエラそうである。収入も人力車の六倍七倍はあるそうだ。第二第三婦人を養っている馬車的がいるというから、そこらへんの月給とりは嗤われているかも知れない。

こゝのところいくら自動車がふえても、馬車、人力車が早々に退却するものとは考えられない。満州に根をはやしたものにとっても、旅行者にしてもこれらの存在は何かにつけて便利であり、満州のものとして、是非あって欲しいと思う。（巳八郎）

№155「巳八郎写」



＊写真の左側と下に２図のスケッチが配されており、分割がむずかしいのでページ全体を掲載した。いつも掲示されている「満州郷土画譜」のシリーズ名が抜けているが、これは43作目にあたる。

第153号（昭和10年9月1日発行）

№156［満州郷土画譜44　路傍喝茶（ルーパンホチャ）］

夏の夕、涼を求めて緑蔭に集う満州人が三人も一つところに寄れば、必ずその前には茶壺（茶瓶）が置いてある。

不潔で蒸々した部屋のなかにいるよりも屋外の方がどれ位スガスガしいか分からない。それで一町も二町もある話相手を訪うにも茶壺手持ちで出かけてゆく。

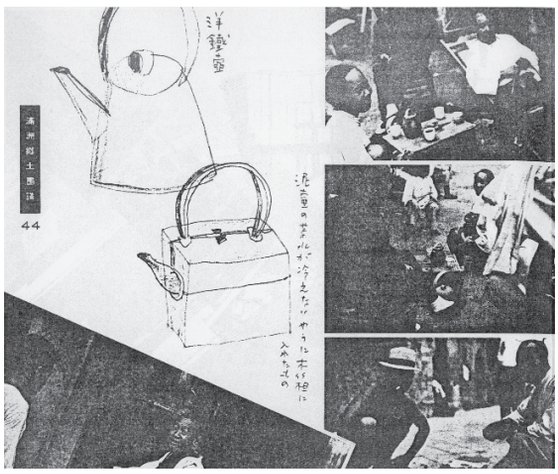
大連のように水道があり、日本人の生活に接近して来ている満州人は、殊に労働者には水を飲むものもあるが、水のわるい国に育った彼等は先天的に水は生で飲むものではないとしているのが一般である。

世間話をしながら、茶をすゝりあうのが彼等にはまたとない楽しみのように見える。何かにつけて茶を飲む。支那の汽車に乗ると、先ず持って来るのは茶水である。劇場でも同じ、判然とした茶園と称するのがあり、日本人が家のなかでしめやかに茶を飲むのに較べて支那、満州では街頭にまで進出している。

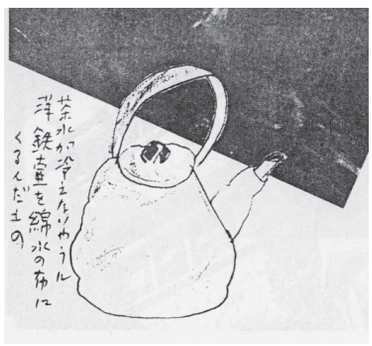
支那街を歩いているとピーピー蒸気を鳴らしている売開水的(何か商売の傍ら湯を売っているところ)が必ずある。銅子兒一枚か二枚で洋鉄壺一杯ある。これは支那人の細かい経済観念から出来たものであろう。

また、労働者街には、大きな一斗もそれ以上もはいるような水壺を据えて湯茶を商っているのがあり、片方にうどん鉢ほどある湯呑を入れた籠と片方に綿入の布にくるんだ洋鉄壺をかついだ売水的など、炎天の下に客を呼んでいるのを見うける。　(巳八郎)

№156-1「洋鐵壺」「泥壺の茶水が冷えないように木箱に入れたもの」



№156-2「茶水が冷えないように洋鉄壺を綿水の布にくるんだもの」」



第154号（昭和10年9月15日発行）

№157［郷土画譜45　大同石仏寺］

石仏寺は大同城に西三十支里の村落。雲崗というところに在る。北平から平綏線に乗って二十時間。大同駅に下車、これよりは馬車か馬によらなければならない。

石窟は東西三町に亘る岩山をそのまゝに掘り込み、七十尺に余る本尊を有する石窟が六窟もある。本尊を囲繞する中小仏像の数は何十万あるか判らない。時代は今より約千五百年前、後魏の文成帝即位の年に起工し、六十年又は八十年を費やしたと言われている。何故かくも大がかりな開鑿をなしたか、それは文成帝の前代太武帝の廃仏排仏に対する懺悔滅罪の為に一種の追善供養の心から開創したものゝようである。そうして石刻に最も力を注いだのは僧曇曜と言われている。

作品として見る時は宛ら芸術の洪水の音を身近に聴くが如く、一日二日見歩いた位ではただ圧倒されて批判の力を与えられない。ながくふかく見てゆくうちに純然たる東洋独自の芸術でないことが希臘、印度の影響を少なからずうけたところが窺われる。右図の仏籟堂アーチの浮彫は石窟中最も西洋臭味の多い作品で、なかの西方窟露出仏は等身大位の大きさで他の大石窟の石仏に較べて特異な容相がうかがえる。妖気をふくんだ笑いは奈良国立博物館の百済観音に似通ったところがある。

この絵は昭和二年亜東印画協会主故櫻井氏の委嘱で三週間、氏と共に石仏寺に起居して模写せしもの

巳八郎

＊文末に記載されている櫻井一郎（1893～1928）は宮城県出身の写真家で、大連で亜東印画協会を設立して大正13年から会員向け定期刊行写真集「亜東印画輯」を発行した人物。巳八郎は京都市立絵画専門学校を卒業した年の昭和2年7月、櫻井一郎を中心とした雲崗石窟調査隊に参加し、写真、絵画、拓本による精密な調査を行っている。この記事は8年後であるが、新たに雲崗を訪れたかどうかは判然としない。また、これまでのシリーズ名「満州郷土画譜」から「満州」が抜けて「郷土画譜」となって

いる。ただ、次号ではまた「満州」がつくので誤植とも言えるが、次号以降でも目次では「満州」のない「郷土画譜」とされている。

No. 157［仏籟堂アーチ右側］「巳八郎写」（向って右図）［西方露出仏の一部］「昭和二年七月　巳八郎寫」（中央）［東方小窟の一部］（左写真）

第 155 号（昭和 10 年 10 月 1 日発行）

No. 158［満州郷土画譜 46　開原の招牌］

開原大街に残る呉服店の招牌は開原はなやかであった往時をしのぶものゝ一つであるが、満州の郷土品として何時までもあのまゝに残して置きたいものである。

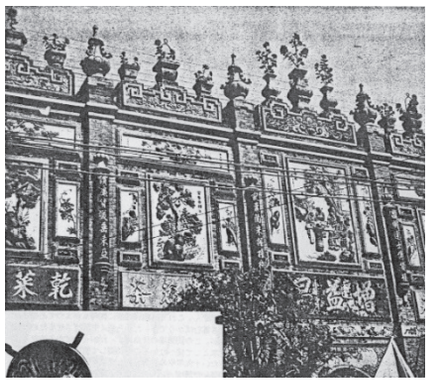
博物館にしまってあるものばかりが国宝ではない。そこら辺りの町の隅々にも国宝はいくらでも転がっている。徒らに目の玉が痛むばかりで何の効能もないネオン・サインの横暴にまかせないで、強度的なものは何らかの方法で保存することを考えて貰わないと、今に訳のわからぬ満州が出来上がってしまうのではないか。

巳八郎

＊開原、招牌については前回紹介したNo. 111、No. 118 を参照。

No. 158-1「なし」（この 1 図のみ描かれた作品であとの 2 図は写真）

No. 158-2（写真）



No. 158-3（写真）

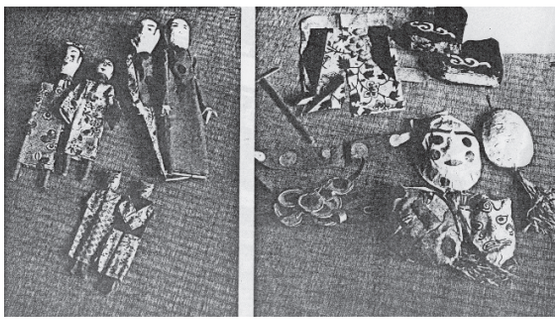
第 156 号（昭和 10 年 10 月 15 日発行）

№ 159［満州郷土画譜 47　替身］

支那の神様の数は人間社会の商売の数と同じ位に多い。四百四病の神様はもとより金を殖やして頂ける神様から家内安全、漬け物のよくつかる神様に至るまで、人間のありとあらゆる欲の皮の対象にまつりあげられていられる神様もよい面の皮ではある。一は可愛い子供を天然痘からのがれさせる為に顔を汚なくよごして神まいりをするところ。神様は眉目美しい子供を好まれ病気をうつされるというので、自分の子供はこんなに見苦しい顔です、神様どうぞうつさないで下さいというのであろう。二は替身、身がわりである。自分の病気を人形にうつして神様の前で焼くと忽ち快癒するというのである。三は神様に供える供鞋、供仮瞼、供拐杖、供眼鏡などで、これは病気の種類により、足のわるいものは供鞋、眼のわるいものは供眼鏡という風に、これも替身と同様に、神様に病気がなおるように、または全快のお礼に焼くもの。さてもあつかましい限りの種々である。　　巳八郎

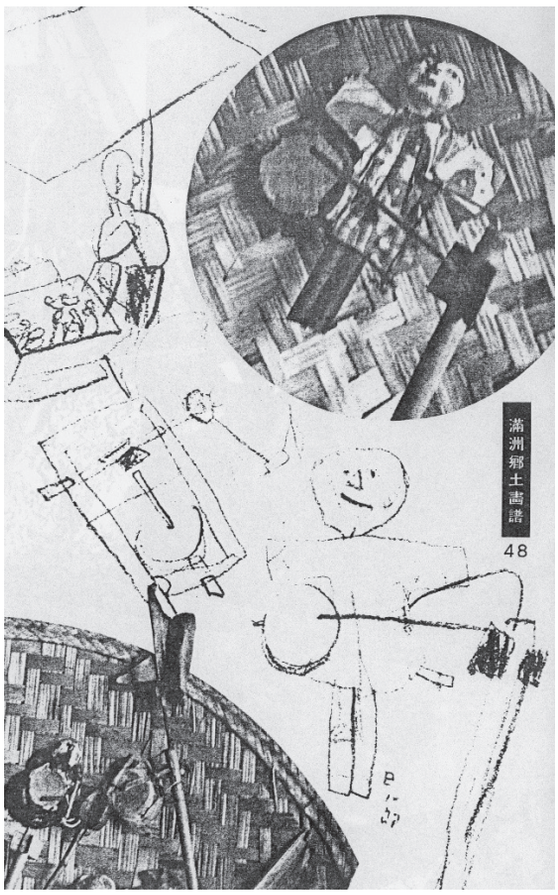
№ 158-1「なし」（この 1 図のみ絵画。あとの 2 図は写真。文中の「一」がこの図である）

№ 158-2,3（写真・左が替身、右が替蛙など）



第 157 号（昭和 10 年 11 月 1 日発行）

№ 160［満州郷土画譜 48　揺鼓］「巳八郎」（上下は写真）



満州の郷土玩具中最も野趣に富み如何にも満州のものらしい特徴を備えたものに揺鼓がある。赤土でこねた太鼓に紙を張り、その太鼓自らが人形であったり桃であったりするものもあれば、太鼓を小脇にかかえた猿や人形が紙の着物を着たのもある。これらはすべて柄のところを手で持ってグルグル廻して太鼓を鳴らすのであるが、手に持って風上に向けれ

ば自分から太鼓をたゝくのがある。
風車が五つあれば太鼓も五つついていてそれぞれ変った音色が交錯して、音は五月の田に友と呼び交う蛙の鳴声そっくりである。材料は殆どが高麗から出来上がっているのが嬉しい。揺鼓は普通の郷土人形と同じく四、五月の廟会の外は売ってはいない、ところによってつくる方法や材料が違うからであろう。その一つ一つの音色が違った風音を持っている。図にあるものは上の写真が鐵嶺で、絵は風車が奉天、札が鐵嶺、下の写真は吉林、大石橋の廟会で求めたものであるが、作る場所は違っているかも分からない。　巳八郎

＊スペースの効率から、記事と作品を入れ替えて掲載した。この記事がきっかけとなったのかどうかはわからないが、「満州沿線郷土玩具案内」という連載が第 174 号から始まる。ただし記事の執筆は須知善一で巳八郎は挿図のみ描いている。

第 159 号（昭和 10 年 12 月 1 日発行）

№ 161［満州郷土画譜 49　糖葫蘆（タンフーロー）］

足ごしらえものものしい糖葫蘆売りが正月元宵節前の城内に、群衆の雑沓にもまれながら往来する姿は先ず何よりも先に目につく。糖葫蘆売りは大連のような近代都市よりも奉天のような大きな城内よりも、海城か蘆平あたりの小さな城内に似つかわしい。

黄塵万丈のなかに、射るような寒空に砂糖飴の光った紅い山楂子の色は食物というよりも、先にその美しさに心惹かれる。長い棒の先に藁苞をつくり蘆ようのものを巻きつけて、串に挿した糖葫蘆を百本二百本と突きさしたのはみただけでも美しい。食って見れば日本人の口にも甘いものである。

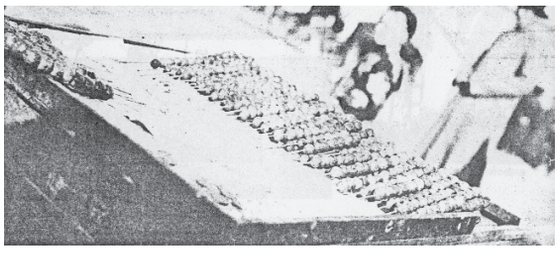
糖葫蘆の中身は山楂子の他に山芋、蜜柑と色々なものが使われるが、見ても食ってもよいのはやはり山楂子であろう。

飴菓子は暑いとながれるせいか糖葫蘆に限らず冬の方が多いようである。旧正月前街頭に出る飴売りの数は夥しいもので、あれは皂糖（ザァオタン）と言って神様に供えるものだそうである。（巳八郎）

№ 161-1「巳八郎」

＊作品 1 点と写真 2 点によるグラビア。図と写真が意図的に構成されたり重なったりしておらず、独立して併置されているだけである。巳八郎自身によるレイアウトではないのかもしれない。ただし、撮影者に関する情報がないので、以下の写真 2 点も巳八郎の撮影と考えられる。

№ 161-2（写真）



№161-3（写真）

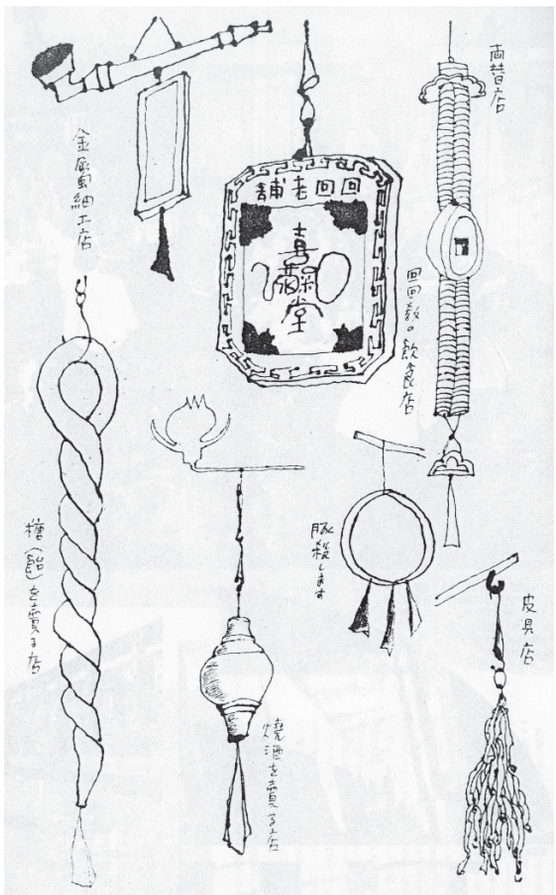
＊山楂子（サンザシ）などに串をさして飴をからめた糖葫蘆（タンフーロー）は現在タンフールと呼ばれている砂糖菓子と同じものと思われる。多種類のフルーツを使った台湾の夜市で売られているタンフールが有名で、日本でいえばリンゴ飴である。中国北部に起源があるらしく、巳八郎がレポートしているのはその原形に近いものだろう。

第160号（昭和10年12月15日発行）

№162［満州郷土画譜50　招牌2］

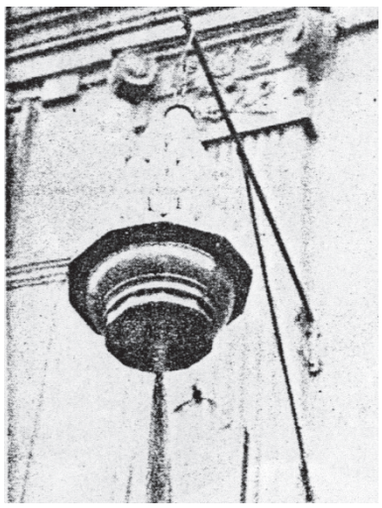
招牌は古い形式のものほど面白い。なかには売品をそのまゝ軒先につるしてあるのもあるが、やはりそのまゝのでは趣がない。売品の形をいくらか美術化したものがよい。文字のみの看板になって来ると千遍一律で、ただこの家は何を売るところだというだけで面白くなくなって来る。満州の招牌の種類は全く数えきれない位ある。大ていの招牌が商売と何等かの関係を持っているが商品とは全然関わりのない招牌も相当多い。例えば飲食店の招牌の如きどんなところから思いついたものか知らぬが。たぶん装飾的な意味だけしかないのではなかろうか。しかし無意味ななかにも回々教徒の飲食店は普通の店が紅片を用いるのに対して必ず紺布を用いるが如き、招牌の歴史をたどって行ったら案外興味深いものが引き出せるかも知れない。こゝに示した写真と絵は何千何万とあるなかのほんの一部に過ぎない。（巳八郎）

№162-1「金属細工店（左上）」「回回教の飲食店（中上）」「両替店（上右）」下左より「糖（飴）を売る店」「焼酒を売る店」「豚殺します」「皮具店」

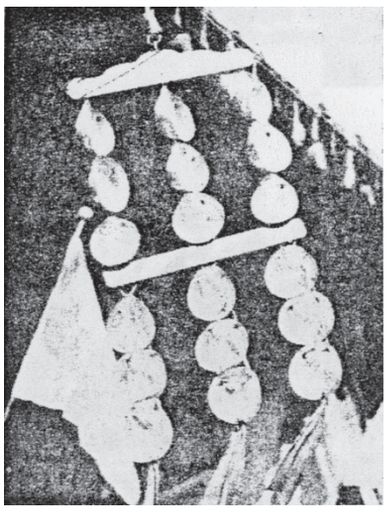


№162-2［金属細工店］（写真）

№162-3［菓子店］（写真）



№162-4［錫細工店］（写真）



№162-5［錫細工店］（写真）

＊作品と写真４点によるグラビア。タイトルが「招牌２」となっているが、「招牌１」にあたるのは第155号（昭和10年10月1日発行）№158［満州郷土画譜46　開原の招牌］である。また、前回紹介した第116号（昭和９年２月15発行）№118［招牌］でも鄭家屯の招牌について詳しくレポートしている。

第161号（昭和10年12月15日発行）

№163［満州郷土画譜51　児童百態１］

街頭にのみ拾って見た。集ったものはみな苦力の子供である。子供の遊戯は何処の国も同じと見えてコマ（陀羅）にハネ（蹄毬子）縄跳び、石蹴りの類であるが、こうした元気な遊びから一人離れて日向ぼっこする子供は見たところやはり元気がない。”飯進上”これは植民地特有のものであろう。四つ位からせいぜい八つまでの男女児童が藍子片手に銅子兒の賭博をして遊んでいる。”飯進上”の友達は”飯進上”ばかりであるが、同じ苦力のなかにも子供の時から区別されているのであろう。巳八郎

№163-1「巳八郎」

№163-2［なし（写真）］

No. 163-3［なし（写真）］

No. 163-4［なし（写真）］

No. 163-5［なし（写真）］

＊コマやハネについてはNo. 138［満州郷土画譜 30 コマとハネ］を参照のこと。”飯進上”と呼ばれる賭博については未詳である。

第 162 号（昭和 11 年 1 月 1 日発行）

No. 164［満州郷土画譜 52　草鞋（ツアオシェ）］

最も安価な防寒鞋である。同じ労働者向でも敏捷に動かない、街頭にジッと立っている物売りか馬車的向につくられている。草鞋を売るものも吹きつけの街角に坐り込んでそこが同時に職場でもある。南支から来る蒲草（プーヴァオ）という草でつくられているが、この上に豚の皮で蔽ったのもある。豚の皮は今剥いだばかりの血のしたゝる毛のあるまゝのを鞋にぬいつけている。値は蒲草だけのが金の三十銭、豚の皮を下半身と底に蔽ったのが五十銭から六十銭程度のもの。巳八郎

No. 164

＊下方に配置された草鞋の写真はコラージュ風になっている。蒲草（プーヴァオ）は菖蒲（しょうぶ）の古名で日本では蒲草（あやめぐさ）と呼ぶ。蒲草で作られた雑貨は現代日本にも流通するが、防寒用ではなく、スリッパやサンダル、すだれ、カゴ、バスケットなど、どちらかといえば夏向きの涼しげな製品ばかりである。

仙厓雑論
「虎図」の正体

中山喜一朗

ずっと以前から、仙厓義梵（1750―1837）が描いた虎図のなかに腑に落ちない１点があった。図１がそれである。当館に寄贈された石村コレクション(1)に含まれる作品で、剽軽な顔の虎が料紙から大きくはみ出すように描かれており、かわいい作品が多い仙厓の「虎図」のなかでは縦94.0cm、横 57.3cm と画面の大きさもあって堂々としている。

図１　虎図 当館蔵（石村コレクション）

腑に落ちないとはいっても偽物ではない。虎を描いた作品には偽物も確かに存在するが、これは晩年に描かれた真筆である。仙厓がなぜこういう虎を描いたのかわからないので腑に落ちないのである。ほとんどの仙厓作品には画と賛が一体となって制作意図が明快に示されており、意味を考え味わう楽しさがある。この「虎図」にはそうした賛文がない。「菩薩」の草冠を重ねた「ササ菩薩」の花押が「厓」の字と一体になった落款と、ごく薄い達磨印の印影(2)が虎の背中にあるだけで、作品理解のためのヒントがどこにも示されていない。それが第一に不可解である。

また、眼を見開き大きな口をあけて咆哮している表情や、上半身の強調、太くて長い尾など、他の虎図には見られない表現のいくつかにも、何となくどことなく違和感がある。つまり結局、腑に落ちない。そこで、この虎の正体を無理矢理に暴いてみようという、以下は相当に無謀な試みである。

１　猫の皮を被った虎

仙厓にはいろんな虎図があるが、たいていは虎というより猫に近い。かわいらしい姿である。長沢芦雪にも日本で一番大きな虎図といわれる和歌山県無量寺の襖絵をはじめ、愛らしい顔の虎図がある。しかし、太い四肢や大きな爪など、顔に愛嬌はあっても猫ではない。芦雪の虎は一見して虎である。そういう意味で仙厓の描いた虎は虎失格である。「猫か虎か当てみろ」（図２）とか「猫ニ似タモノ」（図３）といった賛文からもわかるように、仙厓自身が自分の虎は猫のようだと認めている。描写力が足りずに虎が猫になってしまったというのは単なるポーズで、意図的に猫のような虎を描いている。または完全に猫を描いているくせに虎に仕立てあげようとしているのだ。どちらにせよ、ごく単純に言えば鑑賞者に笑ってもらいたいがためのユーモア表現なのだが、図４に示した「龍虎画賛」双幅は、一見虎に見えない虎を描く真の意図、つまり禅的な意味が読み取れる作品である。

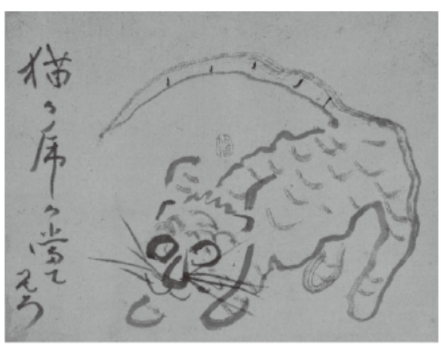


図２　虎図 永青文庫蔵

右幅にあたる龍図の賛文には「是何　曰龍　人大笑　吾亦大笑」とあり、虎図には「猫乎　虎乎　将和唐内乎」とある。仏教学者古田紹欽氏は著書『仙厓』[3]でこの図を解説しているが、これは何でしょうという仙厓の問いかけに対して、簡単に答えられるものではないと述べている。

図３　虎画賛 出光美術館蔵

「是何（これ何だ？）」という台詞が仙厓からの問いかけなのか、それとも観賞者から仙厓への質問なのかはさておいて、仙厓はただちに「曰龍（龍だよ）」と答えているのだから、頭がタワシでグニャグニャした得体の知れない動物であっても龍には違いない。長いまつげが愛らしい相方は、「猫か。虎か。ひょっとして混血か？[4]」などとクイズにされているが、龍の相手なのだから虎である。しかし古田氏はそうは考えない。笑いを誘う簡単なクイズは見せかけで、その裏に深遠な問いがあると解釈している。例えば「是何」は「仏とは何か」とか、「悟りとは何か」のように読み換えるべき問いなのであると。

図４ 龍虎画賛 出光美術館蔵

古田氏の解釈は正しい。漫画のような龍虎を描く意味はそこにある。我々は「龍虎画賛」としているが、そもそも龍と虎であるかどうかわからない。厳密にいえば、それは龍でも虎でも猫でもなく、名前（答え）などない得体の知れないモノである。だからこれは何だと聞かれても簡単には答えられない。古田氏は禅家であるがゆえにこの図の真意を理解した。

真面目に描いたが下手なので漫画になったという人を食ったようなユーモア表現の裏に、こういう意図が読める。中世以来禅林や武家階級に好まれ、当たり前の龍虎図が無数に描かれてきたからこそこういう仕掛けが成立する。普通の龍虎図に親しみ、かつ禅を知る者だけが引っかかる。「龍だよ」と即答して笑っている仙厓を負かすことなど絶対できない問答に引きずり込まれる罠なのだ。

このような「龍虎画賛」の表現意図は以前にも拙著で論じた[5]が、その時は虎単独の作品は取り上げなかった。虎単独の場合も「龍虎画賛」と意味論のベースは同じだと思う。ただ、図２「猫か虎か当てみろ」や図３「猫ニ似タモノ」は「龍虎画賛」と違い、賛文が漢文ではなく仮名まじりでやさしいし、禅問答を迫るようには見えない。禅を知らない人々に向けて描かれた作品だからである。あえて禅画としての教訓をひねり出せば、何事も上面で判断してはいけないぞということだろう。これらの虎（猫？）は「龍虎画賛」のように牙や爪を隠し持ってはいない。作品の裏にいる仙厓は、ただ自分と一緒に無邪気に笑ってほしいと願っているだけである。笑いの共有が、悟りがもたらす自由な境地の共有にも通じていくのだ。「龍虎画賛」の場合も、本当は古田氏のように悩まずに、「何だ、このへんてこな龍は」と無邪気に大笑いするほどの禅者でいなさいと教えているのかもしれない。

さて、これで**図１**「虎図」の特殊性が明らかになった。この虎は猫の皮を被っていないむき出しの虎である。だから問いかけがない。明るく剽軽ではあるが、笑うのも難しい。こういう「虎図」がほかにもあるのだろうか。

2　ミズチのような虎

仙厓が虎を描いた最初（とはいっても 73 歳）の作品は、彼が晩年を過ごした幻住庵伝来の「寒山拾得・豊干禅師図」（**図 5**）である。制作時期の不明な作品を含めても、現段階ではこれが最初の虎であると言える。この図で豊干禅師が騎乗する虎は異様である。丸顔にドングリ眼、眉毛が濃くて首が長い。首の後ろから背骨に沿ったあたりに丸い斑点が帯状に並んでいる。猫に似た虎どころではない。こんな奇妙な虎は見たことがない。賛文には「豊干所御虎其形如蛟　厓也前世親視之天台　今以図焉」とある。豊干禅師が御している虎の姿は蛟（みずち）（水中に住み、毒気を吐いて人に害を及ぼすという『日本書紀』などに登場する妖怪）みたいだが、自分は前世においてこの虎を天台山で視たことがあり、それをいま描いたのだという意味であろう。妖怪みたいな虎だけど、嘘じゃないというひらきなおりである。

この屏風には他の部分にも書き込みや賛文がある。向って右隻の右上隅には、屏風の仕立てが悪くて技術が尽くせなかったという言い訳が書かれている。月を指さす拾得の左側には「佛與菩薩共入夢　労忽然一覚猛虎　一声山月高」と猛虎が月に向って吠える詩文があり、左隻の蛟のような虎を見たという賛文に続いていく。さらに左隻の左端にある一文「世画有法　厓画無法　仏言法本法無法」は、仙厓研究にとって重要な意味を持っている。世の中の画には法があるが、仙厓の画には法がない。法の本法とは無法であると仏は言われた、というような意味であろう。最初は屏風の仕立てが悪かったのだと言い訳をしていたくせに、これは真実を写したのだとひらきなおり、最後には無法の画なのだと宣言する。異人風で異様な風貌の寒山拾得も蛟のような虎も、「厓画無法」なのだからこれでいいのだといわんばかりである。この文章のあとに「文政壬牛冬日」と年紀が添えられているから、「厓画無法」はこの大作に寄せた自賛の結語である。こうして仙厓は表現の自由を勝ち取ったわけだ。

ただし、蛟のような虎の図像上の影響関係は明かである。これに近い虎が朝鮮民画に散見でき、最も奇異に見える背骨の部分の帯状の斑点も朝鮮民画に認められる。この斑点は、虎と豹とを混同している朝鮮民画特有の表現である。それを仙厓が面白いと思い、転用したのだろう。つまりオリジナルな無法ではない。文献史料の裏付けがなく実証はできないが、この屏風は朝鮮通信使への贈り物として描かれたという伝承があるのも興味深い。

愛らしくない虎はいた。猫のような虎よりもずっと強烈な個性派だった。この虎をラインアップに加えると、図 1 の虎の、ほぼまともな表現がますます不思議に思えてくる。

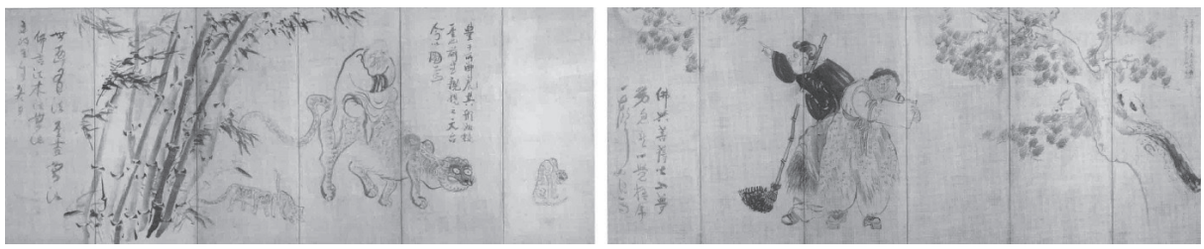


図 5　寒山拾得・豊干禅師図　幻住庵蔵

3　腑に落ちない虎はいつ描かれたか

図６　不動明王図 当館蔵
（石村コレクション）

画風からすると、1822 年（文政５）73 歳で描いた蛟のような虎が最初で、次に来るのが「龍虎画賛」の虎、そのあとに図２や図３の猫に似た単独の虎たちが続く。「龍虎画賛」は 70 歳代半ば頃と考える。「厓画無法」を標榜した高揚感がまだ色濃く感じられる作風で、使用されている達磨印も「寒山拾得・豊干禅師図」と同一、70 歳代の基準印である。対して、図２、図３は画風や印章から 80 歳代に入ってから描かれた可能性が高い。両者の違いには、禅家や武家と一般庶民という作品鑑賞者（贈呈者）の違いだけでなく、時間的な開きも関係している。

また単独の虎図という画題から、図２や図３の制作時期をさらに絞り込むことも可能である。仙厓には十二支の動物を描いた作品がひと通り揃っている。中には６曲１双屏風に十二支を 12 図、押絵貼にした作品まである。十二支の作品は、揮毫を頼まれることが多くなった 80 歳前後から最晩年まで描き続けられたと考えられる。断言はできないが、単独の虎図が寅年に描かれたのであれば話は簡単だ。仙厓が 81 歳となった 1830 年（天保元）が寅年である。この年の正月に揮毫を依頼されて図２や図３のかわいい虎を描いたという推定は、画風や落款からは首肯できる。12 年後では仙厓の没後になってしまうし、12 年前の 69 歳は仙厓特有の洒脱さが現れる以前の時期だからこれも除外できる。81 歳という想定は、「寒山拾得・豊干禅師図」や「龍虎画賛」からの距離からもしっくりくる。一応、図２と図３の猫のような虎は 81 歳の作としておこう。

では、肝心の図１の「虎図」はどうか。これも 81 歳の寅年に描いたと考えられればよいが、「猫か虎か当てみろ」や「猫ニ似タモノ」と表現が大きく違う。かわいい虎は力が抜けていてのほほんとしている。ゆるいユーモアが感じられる。しかし図１の虎の太くて濃い墨線は、そうした円熟味や落ち着きとは異なる画境を示している。だからといって「寒山拾得・豊干禅師図」や「龍虎画賛」に近い時期なのかというと、それも違うと思う。図１の「虎図」は明るくて元気だが、「無法」ぶりがあまり感じられない。つまり、表現の逸脱（奇妙さや漫画的な諧謔）が導く禅的な意味を見る者に伝えようとする意欲が強く感じられないのである。結論的に言えば、図１の制作時期は 80 歳代後半の最晩年であると考えられる。

根拠のひとつは落款である。**図６**は示寂の年、1837 年（天保８）に描かれた「不動明王図」で、これが仙厓絶筆であるという伝えもある。絶筆かどうかは別にしても、「扶桑最初禅窟　厓（花押）」の横に自ら「八十八歳」と書き入れているから没年の作なのは間違いない。仙厓から聖福寺を継いだ弟子の湛元が大島に流罪となり、仕方なく再び聖福寺の住職に復帰したのちの作である。この「不動明王図」には「厓」と「ササ菩薩」が融合した落款があり、図１の「虎図」と同じ形式である。字形も近い。ここで詳述する余裕はないが、80 歳代前半の落款の多くは「厓」の字が縦に長く伸びた特徴的な表現で、図１や図６とは異なる。画風に関しても、最晩年の特に人物表現などには、若々しい力強さや荒々しい墨線が目立つ作品が混じるようになる。少なくとも 80 歳代前半の落ち着いたゆるい表現から変化したことは確かである。図１の腑に落ちない虎はそうした最晩年、86 ～ 88 歳頃の作だと考えたい。そのように仮定すると図１は寅年の正月に描かれたものではないことが確実になる。ではいったい、何の虎か。賛文もなく、寅年でもないのに虎の姿だけを描いて何か意味があったのだろうか。

ほかの虎図と比較し、制作時期も考えてみたが、この虎の正体は依然として謎のままである。ただの虎であると納得できればよいのだが、まだ無理だ。しかたがない。切れ味の悪い大鉈を振い、虎をズタズタにしよう。

4　どのように描かれたか

図１　完成作

図７　ヒゲと落款なし

図８　縞なし

図９　尾もなし

仙厓の作画は、基本的に様々な人物からの揮毫依頼による。完成作は依頼者に贈られるのがふつうである。この「虎図」を仙厓に描いてもらった人間がいるはずだ。これは誰のためにでもなく手遊びに描いたのであって、だから賛文がないという可能性もあるが、落款がある以上は自分が描いたものだと他人に示す必要があったわけである。鑑賞者が想定されている。だから食べ物や土産物、謝礼などと交換にこの「虎図」を描いてもらった人間の目線で考えてみよう。つまり、この作品の最初の鑑賞者（もちろん仙厓自身は除く）のことである。

その人物は画面を見てどのように感じただろうか。「一（市）は川端、二（荷）は茶忠、三（賛）は仙厓」と言われた和尚の作品なのに肝心の賛がない。それにこの虎は猫に似ていない。それでもおもしろいと思っただろうか。仙厓は人がまったく理解できないもの、楽しめないものは描かないと思う。だからこの賛もなく猫にも見えない虎でも、その人物は喜び、楽しんだはずである。なぜか。その人物は我々が知らない虎の正体を知っていたからである。考えるまでもなかった。なぜなら、作画の過程を見ていたから。そういうことではないだろうか。

つまり席画である。宴会や会合などで見物人を前に即興的に描くパフォーマンスであり、御用絵師が殿様の目の前で描くのも席画という。もともと仙厓の画はほとんどが即興みたいなものだ。図１の「虎図」がそうした席画だったとしても不思議ではない。仙厓は揮毫依頼者に見られながらこの図を描いたと仮定してみよう。

図１０　虎の口元表現

では、虎のどの部分から描き始めたのか。略画とはいえこれだけ筆数があると最初に引かれた線を見つけるのは難しい。しかし最後に近い線なら想像できる。細くて鋭いヒゲは、墨の重なりからほぼ最後であるといえる。試しに落款とヒゲを消すと**図７**になった。虎が若くなった。と同時に、画面の外側に続いていたはずの背中が落款とともに消えてなくなり、プロポーションが変わってしまった。おかしな具合である。胴体や脚、尻尾の縞模様も後半に描いた公算が高い。先に縞を描いて輪郭線をあとから引くのは難しい。そこで輪郭線を残して縞を全部消してしまうと**図８**になる。あたりまえだが、縞模様がないと虎ではなくなる。猿に似ている。思い切って尾も消してしまおう。**図９**までくると、これはまちがいなく猿である。ゴリラにも見えるが時代的に可能性は低い[(6)]。虎の下から猿が現れた。

最初は「猿図」だったというのは無理矢理のこじつけではない。決定的な証拠がある。**図 10** で示した虎の口元表現を見ていただきたい。仙厓は、虎であれ猫であれ必ず鼻口部を左右に割って膨らませる。ところが図１の虎は膨らみが左右に割れていない。鼻の形が違うし、目と目の間隔も虎たちよりやや狭い。頭が大きくて寸詰まりになったプロポーションも猿なら問題ない。この虎、最初は猿だったのだ。

そもそも虎を描くつもりなら、画面の中央に大きな頭を配置するのがおかしい。下半身を描くスペースがなくなる。背中が画面の外まで続いているように見えたのは落款のせいである。つまり落款でプロポーションを意図的に変化させたのではないか。猿から虎への変化は当初からの計画なのだ。

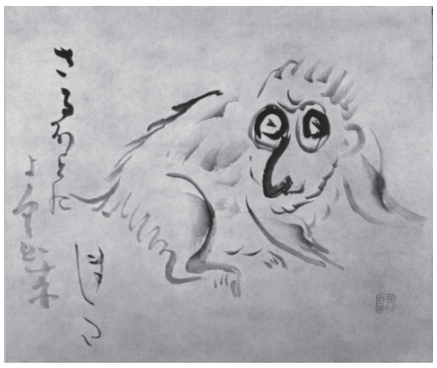


図 11　猿図 当館蔵（石村コレクション）

念のために仙厓の「猿図」（**図 11**）と比較しておこう。「さるほどによく出来ました」という賛文があり、これは猿に違いない。目玉と長めの鼻が強調されている顔は天狗猿が微笑んでいるように見えて漫画的だが、身体にはどことなくリアルさもある。ニホンザルだろう。図 1 の虎の顔はこうした猿顔のバリエーションだと思う。少なくともこれまで見てきた虎の顔よりもこれが近い。耳がなかったり、大きく口をあけて吠えているように描いたり、前脚を太くして肩をいからせ猛々しい感じを出しているのは、最後は虎として仕上げるための周到な準備であるといえる。なぜなら、まともに図 11 のような猿を描いてしまっては、あとから縞模様をつけ加えても決して虎には見えないからである。だから一見ゴリラっぽい猿になった。

猿なら長い尾があってもよいとも思えるが、尾が長いとその辺の裏山にいる見慣れたニホンザルではなくなる。仙厓が猿猴捕月図で描く室町水墨画風のテナガザルも尾は短い。尾が長くてもいいかもしれないが、いろいろと吟味した結果、尾が描かれていない段階である図 9 が、猿図としての完成形として最も自然であると結論した。

図 1 の虎は途中まで猿だったのだ。席画ならおもしろい趣向だと思う。何を描いているのかできるだけわからないように筆を進めていって最後に画題がわかるというパフォーマンスもあるが、この場合は猿だったはずが劇的に変化して虎になる。ただし、見物人が途中までは猿図だと思ってくれていないと困る。できれば「これから猿を描くよ」などと言わなくてもこれは猿だと早い段階で思い込んでくれれば、虎への変化は効果絶大である。しかし画題を明らかにしないまま漫画のような動物を描き始めて、すぐに猿だと気づいてもらえるだろうか。

簡単である。寅年の正月に描いたのが猫に似たかわいらしい虎図だったように、図 1 は申年の正月に描かれたのだとすればよい。都合のよいことに、画風や落款から類推した最晩年期に申年がある。天保 7 年（1836）、仙厓 87 歳の年である。したがって、何か描いてもらおうという下心で、なにがしかの手土産も持って、申年の年賀の挨拶にやって来た客、または客たちを目の前にしての席画、というのが一番ぴったりくる。それなら図 9 の状態になる前から今年の干支に因んだ猿だと客が勝手に予想する。これでパフォーマンスの成功は約束された。

「ほれ、出来たぞ」と仙厓は猿図を客に見せた。上部にまだ余白があるし、賛もないし、客は物足りなさを感じたが、「今年の干支ですね。縁起がいい。せっかくですから和尚の作とわかるように落款を入れてください」などとサインをおねだりしたかもしれない。仙厓は上機嫌で「よしよし、わかった」と答え、猿の背中の微妙な位置に落款を入れ、ところがそのまま長い尾を描き足し、あっけにとられる客を尻目にさっさと縞模様を加えていって、縁起の良い猿を干支に無関係な虎にしてしまった。落款まで要求した欲張り者へのオシオキと見せかけてはいるが、実は最初からのもくろみだった。こうして図 1 の「虎図」が完成した。

全くの空想で新作逸話までひねり出し、虎の正体を席画パフォーマンスであると無理矢理結論したが、まだ全然すっきりとはしていない。画竜点睛を欠く。なぜ猿を虎にしたのか。虎にした意味があるのだろうか。客が持って来たお屠蘇を飲み過ぎて仙厓自身が「大虎」になっていたから、などとはいくらなんでも言えない。

この最後の難問をやっつける前に、図 11 の「猿図」についてつけ加えておこう。これは 87 歳の申年の作ではない。印章の使用年代などから判断して 82 ～ 83 歳、猫に似た虎図に近い頃と考える。75 歳の申年の作とするのも画風から無理がある。申年の正月を祝う干支の図ではないようだ。さるほどに都合よくいかないこともある。

5 「さるとらへび」現わる

参考図１　高賀神社扁額（部分）

なぜ猿から虎へ変化させたのか。干支の順番なら猿から鶏だ。この難問は長いあいだ解けなかったが、最近になって目から鱗が落ちた。「さるとらへび」という、なんとも安易な名前の妖怪がいたのである。安易な名前のとおり、頭が猿、身体が虎、尾が蛇という妖怪である。妖怪マニアにもあまり知られていないようなマイナーな存在で、その伝承も博多から遠く離れたごく一部の地域に限定されている。したがって妖怪画方面に少しばかり関わっていながらもこれまで気がつかなかったのである。そんなマイナーで博多に縁もゆかりもない妖怪と図１の「虎図」を結びつけようなんて、それこそ単なる空想にすぎないと思われるかもしれないが、それがそうでもないのである。

仙厓の生家とその所在地については、仙厓研究に一生を献げた郷土史家三宅酒壺洞氏の説、美濃国武儀郡武芸川町（現・岐阜県関市）の農夫井藤甚八父親説が現在一般に採用されている。美濃国武儀郡の農民の子だったという点では三宅氏以外の諸説も共通している。この旧・武儀郡武芸川町の隣村、旧・洞戸村(ほらどむら)(7)に伝わるのが「さるとらへび」の話である。この妖怪の伝承について中央大学の民俗研究会が 1987 年（昭和 62）に岐阜県武儀市洞戸村（当時）で調査した報告書があり、その概略は国際日本文化研究センターがウェブ上で公開している「怪異・妖怪伝承データベース」に記載されている。それによると、高賀山(8)に住んでいた妖怪「さるとらへび」はたびたび洞戸村へ降りてきて田畑を荒らし、女子を連れ去った。夏の盛りに大雪を降らせたこともあるらしい。それだけでなく、遠く京の都にも黒雲を駆け夜毎あらわれ人々に危害を加えたので、御門の命を受けた藤原高光が洞戸村に遠征し、瓢箪に化けていた「さるとらへび」を矢で射て退治したという。この話は口伝によるもので、残念ながら文字記録は存在しない。ただの言い伝えである。関係がありそうなのは洞戸村にある高賀神社の縁起を語った 1812 年（文化９）の『高賀宮記録』で、そこに藤原高光に退治された妖怪が登場する。ただ具体的な姿や名前は記載されず、「さるとらへび」ではないらしい。なにやら心もとないが、1858 年（安政 5）に高賀神社に奉納された扁額(9)（参考図２）に頭が猿で胴体が虎の妖怪（画面右下）が退治されている場面が描かれており、高賀神社にまつわる伝説として、「さるとらへび」と呼ばれた妖怪の話が江戸時代から伝わっていたのは確実であると思われる。

仙厓が故郷を離れて行脚に出たのは 19 歳と伝える。それまでは、この極めてローカルな妖怪の話が伝わる村のすぐ近くで生まれ育ち、11 歳の頃からは近隣の清泰寺で得度して禅僧としての修行の日々を過ごしていた。つまり、仙厓は「さるとらへび」伝説が流布していたと想定できる地域に 20 年近くも住んでいたのだ。幼い頃に怖い妖怪の話を聞いて、猿と虎と蛇が合体した化け物が心にしっかりと刻まれたとしてもおかしくはない。突飛な空想ではなく、確率の高い推理である。

ところで、頭が猿で胴体が虎、尾が蛇の妖怪と聞くと、鵺(ぬえ)を思い出す。『平家物語』などに登場し、源頼政に退治された鵺は、頭が猿、胴体が狸で手脚が虎、尾が蛇だった。別の物語では背が虎で足が狸、尾は狐だとか、頭が猿ではなく猫といったバリエーションもあるらしいが、『平家物語』の鵺をスタンダードだと考えれば、狸の胴体以外はほぼ「さるとらへび」ではないか。『平家物語』に語られる源頼政の鵺退治がオリジナルで、仙厓の故郷では藤原高光の「さるとらへび」退治に話が変化したと考えたほうが自然であろう。

鵺の具体的な姿は、鳥山石燕や歌川国芳、月岡芳年らの作品に描かれた図像で確かめられる。いずれもどう猛な猿の頭と胴体や手脚に虎の特徴が備わり、長い尾の先が蛇の頭になったりしている。それらと比較すると仙厓の図は無邪気でのほほんとしているし、人に危害を加えるようには見えないが、元々が即興的な戯画であり、かわいらしさが仙厓画の個性であることを差し引けば、図１の虎の正体は仙厓流の「さるとらへび」と言えるかもしれない。

5　虎の皮を被った妖怪

参考図２
鳥山石燕『今昔画図続百鬼』より「鵺」

猿から虎への変化理由がわからなくて、妖怪まで登場させてしまった。仙厓は様々な動物を描いたが妖怪はさすがにない、という反論はしかし成立しない。蛟のような妖怪じみた虎を描いているではないか。[10] 博覧強記の仙厓は『日本書紀』の蛟を知っていた。世阿弥の狂言にもなり、各地に伝説が残っている『平家物語』の鵺を知らないわけはない。蛟のような虎を描いたのなら、虎のような「さるとらへび」も描くのではないか。

仙厓が目にした可能性のある鵺の図像は鳥山石燕の『今昔画図続百鬼』に載る「鵺」である。石燕は 1776 年（安永 5）に刊行した版本『画図百鬼夜行』が大ヒットし、以後 1784 年（天明 4）の『百器徒然袋』まであわせて 4 編の妖怪画集を次々に刊行した。鵺が描かれた『今昔画図続百鬼』はその 2 番目にあたる。仙厓が武州（横浜）の月船禅慧のもとで修行し、その後に京や江戸、東北地方まで含む広範囲な行脚をしていた時期である。江戸で石燕の妖怪画集を目にする機会があったかもしれない。

こんなことを書くとまた空想だと言われるだろう。しかし、石燕の「鵺」の顔と図 1 の虎（猿）の顔はどことなく似ている。顔の向き、眉や頭髪、特に大きく開いた口から見える反り返った舌などの共通点が認められる。石燕の猿頭は鼻口部が左右に割れているものの、鼻から口、下顎にかけての描きぶりは、図 1 の猿顔をイメージした源泉だと言えるのではないか。行脚中に見たのなら半世紀以上も昔のことである。なぜそこまで強く印象に残ったかといえば、それこそ石燕の「鵺」がなつかしき故郷の「さるとらへび」と重なったからだろう。「鵺」の図を見てはじめて、具体的な妖怪の姿として「さるとらへび」のイメージが形作られ、同時に「鵺」が「さるとらへび」のオリジナルであると思い至ったかもしれない。

図 12　切縄画賛 出光美術館蔵

半世紀以上を経て、「さるとらへび」が仙厓の記憶の底から甦った契機も想像できなくはない。石燕が火付け役となった江戸の妖怪ブームは、19 世紀に入ると歌舞伎狂言における怪談興行の大当たりと重り、その後は浮世絵師によって数多くの幽霊画や妖怪画が生み出されていく。仙厓の晩年期は江戸のオカルトブームと重なる。江戸の流行が博多でも人口に膾炙され、80 年も冬眠していた「さるとらへび」が眼を醒ました可能性は否定できない。江戸土産としての浮世絵の流布を考えるとなおさらである。

残りの問題は尾である。図 1 の尾は蛇に見えない。ただ図 2 や図 3 の尾よりも太くて張りがあり、頭の前まで延びてくるほど長くて立派である。極めて意図的な表現であるのは確かだ。しかし肝心の蛇の頭がない。先端に長い毛がしょぼしょぼと描き込まれているだけである。最終的には縞模様がつけられているし、これを蛇だとするのはいかにも難しい。それどころか、虎の胴体と繋がっていないようにも感じるし、見ようによっては後ろから飛んで来た縄の切れ端みたいに見える。

実は、そこにこの尾と蛇の意外なつながりも見つかる。石燕は「鵺」の姿を「頭ハ猿　足手ハ虎　尾ハくちなハ」と説明している。「くちなハ」とは朽ち縄（口縄とも書く）のこと。薄暗い夜道では、蛇に形が似ている朽ち縄に思わず驚いてしまうことがある。ここから朽ち縄は蛇を意味する忌み詞となった。大の男たちが朧月夜に縄を蛇と間違えて驚くさまを仙厓は描き（図 12）、「切れ縄に口ハなけれど朧月」という賛をつけている。描かれた

切れ縄には縄らしい縞模様がある。つまり図1の虎の尾は朽ち縄なのだ。いや、これはどう見ても虎の尾だと笑われるかもしれないが、それならどうして右端をすっぱりと切ってしまっているのか。尾の右側に料紙の欠損はない。墨の掠れ具合からして右側から筆を入れたことは明かである。胴体は画面の外に繋がるように料紙いっぱいに描いている。だったら、画面の外にある尻から生えている尾なのだから、こんなところから描き始めてはいけないだろう。落款の位置と較べても左に寄りすぎで、胴体との非連続を意識したとしか思えない。つまりこの尾は空中から唐突に出現しているのである。ほかの虎図にはない先端のしょぼしょぼした毛も、縄の切れ端の表現だとすれば納得できる。虎の尾の先端は、「龍虎画賛」のように太く丸いほうが自然だ。このしょぼしょぼはどこか不自然、つまり意識的である。さらに、これは朽ち縄つまり蛇だと強く主張できる有力な証拠がある。「切縄画賛」の男たちのように、この朽ち縄を蛇だと勘違いして驚いている顔が図1には描かれているのだ。そう、猿の頭である。この顔は石燕の「鵺」のように咆哮し、威嚇してはいない。蛇の出現に驚いている顔なのである。その視線はしっかりと朽ち縄の蛇を捉えているではないか。そう気づくと、もはや驚いている顔にしか見えないだろう。

ようやくすべての証拠が揃った。証人喚問は不可能なので、あとは考察に修正を加えた最終論告である。

図1は席画だった。作画経過を見せることで相手に意図が伝わるので賛文はなくてよい。申年の正月に猿を描いて一旦完成させた。次に尾を描き足して尾の長い猿に見せかけ、尾の先に毛を加え、縞模様を入れて朽ち縄の蛇とした。臆病な猿が朽ち縄に驚く図である。さらに前脚や胴体に縞を入れ、最後に髭を加えて咆哮する虎に仕上げたのである。途中、「さるとらへび」や鵺の話を客にしたかどうかは不明である。しかし、この席画パフォーマンスに猿と虎と朽ち縄（蛇）という三つが絡み合ったことは確かで、仙厓の頭に「さるとらへび」がいたことも間違いないと思う。ヒゲが生えた瞬間に明るく剽軽な虎の皮が完成し、「さるとらへび」は皮を被って姿を隠した。以上、正体は暴いたと確信しているが結局は「虎図」になってしまった。完全犯罪だから判決は無罪である。

これでやっと腑に落ちた。エッセイと空想とほんの少しの論考が合体した「さるとらへび」のごとき怪しい推理に終止符を打つことができる。さて、この論告に数々の異議ありとか、「虎の皮を被った妖怪」などまったく腑に落ちないという方は多いだろう。よく切れる刀で、バッサリと退治していただきたい。

（なかやまきいちろう　福岡市美術館副館長）

註

(1)　博多の和菓子舗石村萬盛堂の創業者故・石村善右氏による仙厓コレクションで、昭和55年(1980)に96点が当館に寄贈された。「虎図」は2点含まれる。なお、当館収蔵の仙厓作品は寄贈・寄託を合計すると総数300点を越える。

(2)　ここに押された朱文達磨形印「仙厓」は基準印ではない。「ササ菩薩」の花押もある点からしてこの印章は後印の可能性がある。しかし、同種の印が使用された真筆も複数認められるので、わざと薄く目立たないようにして仙厓が押した可能性も残る。達磨印の詳細については中山喜一朗『仙厓―その生涯と芸術』（福岡市美術館叢書2）「印章研究」参照。

(3)　古田紹欽『仙厓』（出光美術館選書）1966年　出光美術館

(4)　文中の「和唐内」は、父が中国人、母が日本人の鄭成功をモデルとした歌舞伎『国性爺合戦』の主人公「和藤内」を示し、虎と猫の混血という意味で使われていると一般には考えられるが、ワトウナイではなくワカラナイとも読める。

(5)　中山喜一朗『仙厓の○△□』（2003年・弦書房）「第二章　うまいかへたか」P72～76

(6)　19世紀からヨーロッパの動物園でローランドゴリラは飼育されているが、仙厓がゴリラを知る可能性は低い。

(7)　洞戸村は2005年（平成17）に近隣の板取村・上之保村・武儀町・武芸川町（三宅説による仙厓の生地）とともに岐阜県関市に編入されている。

(8)　高賀山は岐阜県郡上市と関市にまたがる越美山地東部の標高1,224メートルの山。山岳信仰で知られる。奈良時代の創建と伝える高賀神社が山麓の旧・洞戸村にある。

(9)　実物は未見。150センチ内外の大きさがある杉戸絵である。ただし、図様は源頼政とその家来猪早太二人による鵺退治を描いた図であろう。写真はNPO法人洞戸村ふるさと塾ホームページより転載させていただいた。また、扁額については高賀神社神官武藤道彦氏より情報の提供と掲載許可をいただいた。

(10)　蛟の如しとした理由は明確ではない。石燕の妖怪画集に蛟の図はない。首が長く、背中にある斑点が鱗のようにも見えるところから龍や魚が連想され、水龍である蛟を引き合いに出したのではないかと考える。

(36) この茶事については、前掲書『茶道三年』中巻・一一一―一一四頁「益田翁招待」にも記録されている。

〈主要参考文献〉

① 斎藤利助『書画骨董回顧五十年』（四季社、昭和三十二年）
② 『昭和人名辞典』第一巻［東京篇］（日本図書センター、昭和六十二年）
③ 『大正人名辞典Ⅱ』下巻（日本図書センター、平成元年）
④ 『講談社日本人名大辞典』（講談社、平成十三年）
⑤ 『角川茶道大事典』（角川書店、平成十四年）
⑥ 東京美術倶楽部百年史編纂委員会編『美術商の百年　東京美術倶楽部百年史』（株式会社東京美術倶楽部・東京美術商共同組合、平成十八年）
⑦ 『新版茶道大辞典』（淡交社、平成二十二年）

を聞いた事を思出し、顧みて呆然。」と賞讃している。

(9) 本書影印本の「人物略解説」七三八頁に「松永耳庵出入指物師　御徒町住」とある。

(10) この茶事については前掲書『茶道三年』中巻・六三―七三頁「小田原口切」にも記録されている。

(11) 現在、東京国立博物館所蔵の「烏図新形釜 銘濡烏」。

(12) 中村富次郎。旧姓は川田。原三溪の秘書役を経て道具商「中村好古堂」に婿入りし店主を務める。

(13) 本書影印本の「人物略解説」七四四頁に「福田喜兵衛　田中親美の娘婿」とある。

(14) 縣治朗（一八九七―一九八二）。美術家。田中親美の娘婿。政斎が「常連」と記す親交の深い茶友の一人で、本書にも度々登場する。

(15) 柘植曹谿（一八八〇―一九五三）。別号に不及庵。石州流の茶人。

(16) 塚本閤治（一八九六―一九六五）。写真家、記録映画作家。山岳写真、山岳映画をよくした。

(17) 金子堅次郎（一八八七―一九七四）。経営者。三井合名常務理事、三井物産取締役、東京芝浦電気（現東芝）副社長・副会長など。

(18) 小野賢一郎（一八八八―一九四三）、号は蕪子。俳人、陶芸研究家。

(19) 本書影印本の「人物略解説」七四二頁に「柳瀬文化会館惨事」とある。

(20) 八田冨雄　東京の道具商。

(21) この茶事については前掲書『茶道三年』中巻・七七―七九頁「金毛窟侘びの茶事」にも記録されている。

(22) この茶事については前掲書『茶道三年』中巻・八〇―八三頁「益田邸歳暮」にも記録されている。

(23) 現在、福岡市美術館所蔵の「粉吹茶碗 銘十石」のこと。この時に政斎から本器を購入した経緯について、耳庵の書付（本器の箱に附属）には次のように書かれている。「仰木政斎 前年朝鮮渡りし際 有所にて発掘品を蒐探して持帰りし内此陶碗有り。箱を造り益田翁に譲らんとして是を予の目白邸に見せに来た。二百円を投じ彼も意を動かして遂に予の有に帰す。翌年 熱海十国庵にて翁并に高橋箒庵を招き用いた。翁揮毫して十石と銘す。」この時の鈍翁による揮毫の様子は、「熱海十国庵」の文中（本稿50頁）に記録されている。

(24) この熱海、伊豆行の出来事については、前掲書『茶道三年』中巻・九四―九八頁「熱海十国庵茶会」（高橋箒庵寄稿）及び同九九―一〇二頁「南風村荘茶会」にも記録されている。

(25) 現在、出光美術館に所蔵される宮本武蔵筆「竹雀図」のことと思われる。この賛文において政斎が「蒼」と読んだ字は、実際は「鷹」である。

(26) 岡部長景（一八八四―一九七〇）。官僚、政治家。爵位は子爵。

(27) 仰木茂・ゲルトルード夫妻。仰木茂（一九〇四―没年未詳）は洋画家、版画家。仰木魯堂の息子。

(28) 大月源二（一九〇四―一九七一）か。画家。

(29) 平岡権八郎（一八八三―一九四三）。洋画家。

(30) 川喜田半泥子（一八七八―一九六三）か。本名を久太夫。実業家、陶芸家。

(31) この茶事については、前掲書『茶道三年』中巻・一〇五―一一〇頁「小田原蝸殻庵」にも記録されている。

(32) 小林一三（一八七三―一九五七）、号は逸翁。別号に靄渓学人など。実業家、政治家。阪急東宝グループ（現・阪急阪神東宝グループ）の創業者。松永耳庵とは慶応義塾の福澤門下生として出会い、終生の友として親交を深めた。

(33) 名取和作（一八七二―一九五九）。実業家、政治家。写真家の名取洋之助の父。富士電機製造（現・富士電機株式会社）初代社長。貴族院議員も務める。

(34) 加藤武男（一八七七―一九六三）。銀行家。吉田内閣経済最高顧問。

(35) 平田篤次郎（一八七二―一九五〇）。経営者。昭和五年に芝浦製作所社長に就任、同十四年には東京電気と合併して東京芝浦電気（現東芝）を設立した。

床に緋達摩の幅 讃ニ育王山徳光 九年面壁云々 とある此の幅こそ肥後の血達摩と世に称えられるト

床脇地袋上ニ青磁一重口香炉、水指雲草江口棚桑宗薫茶透二重棚政斎作

茶入蒔絵平棗、茶碗高麗堅手銘藤ハンコウ袴替黒お茶菊水

お薄は御令姪阿部夫人に依って御手点あり、主客らより今日のお振舞に対し亦数々の名器拝見についての挨拶の内にお番茶水菓子など丁重なおもてなしの内、暁山主（ママ）は、皆さん、この水指棚は、元松平不昧公在世の折時の名工小林如泥に命し苦心の作であり、以後今日迄多くの工匠に其の模作を試られしが、遂に成功を見ずに終りましたが仰木君が、本個所有者、酒井常盤主人に乞い斯く寸分たがはず役割せられ、私にお譲りを乞いました。糸透ハ内部に灯を入れなければ見えぬ細い線ですから実ハ電燈が入れてありますよと思い掛けぬ宣伝にハ恐縮此上もなく面目をほどこした。翁ハお茶の御主人振りとしてえハ福徳円満、先づ鈍翁三溪らと共に三福ツイとも云えよふ

この席上中座席の譲り合い中親美翁が染附松竹梅火入のある莨盆を袴のソソに掛られ席中灰神楽の一騒ぎも一興と言はんが慎むべき事。幸い火入ハ無難であった。

回数二十七回

以上にて第三部茶会記も終り第四冊に改め集録す

時に昭和廿六年八月廿五日　手記終る　有望

〈註〉

（1）杉本九八郎（一八七六―没年未詳）。実業家。山丸商会、高岡ステンレス、南朝鮮興業、名古屋螺子製作所など数多の経営に携った。

（2）團琢磨の妻。

（3）堀越宗圓（そうえん）（一八九二―一九七八）、本名は梅子。女流茶人（裏千家）。松方正義の五女。

（4）この茶事については松永安左エ門『茶道三年』（非売品、昭和十三年六月発行）中巻・四八―五二頁「團家　松滴庵茶会」にも記録されている。

（5）現在、福岡市美術館所蔵の「柿蔕茶碗 銘白雨」。耳庵は翌年も同じ三溪園蓮華院での茶事で本器に接し「実に柿蔕中の優品」と賛辞を送っている（同書下巻・七九頁）。『雲中庵茶会記』の記録や本器に附属の書付などにより、耳庵が本器を入手したのは、その約二十年後の昭和三十二年頃と思われる。

（6）現在、東京国立博物館敷地内にある茶室「春草廬（しゅんそうろ）」のこと。江戸時代前期の商人で海運や治水に功労をなした河村瑞軒（瑞賢とも書く）が元禄年間、大阪の安治川開鑿の折に休息所として建てたものと伝える。原三溪の手に渡り横浜本牧の自邸・三溪園に移されたが、組立てられぬまま松永耳庵に贈られ、埼玉の柳瀬山荘内に移築された。戦中、柳瀬山荘に疎開した仰木政斎は妻とともにこの茶室に住み、その日々の様子を本書に詳しく記録している。戦後、松永によって多くの茶道具とともに国に寄贈され、東京国立博物館敷地内に移築された。現在三溪園にある同名の茶室とは別物。

（7）塩原又策（一八七七―一九五五）の妻・千代のこと。塩原又策は、号は禾日庵。実業家。三共株式会社創業者。夫婦で茶の湯に親しみ、朝茶事を得意としたようで、本書にも頻出する。

（8）この茶事については前掲書『茶道三年』中巻・六〇―六二頁「祥雲寺の鐘の茶会」にも記録されている。銅鑼の代わりに祥雲寺鐘楼の巨鐘を鳴らした政斎の演出に耳庵は「此の音色をば借り来つて迎付に聴かした主人の手腕と其得意さは、去年の春、三溪園にて耕庵老と共に山吹茶屋にて延命鐘

間もなく銅羅七点の引入れに（餘音）さらざる内に再入席（正客の銅羅に対する挨拶）床を見ると

花入（古銅） 花（牡丹）水指（空中写鈍阿焼）茶入（袱紗包竹中次）藤重、茶杓（庸軒）共筒茶碗（青井戸探幽箱）

建水曲　已上の（道具組にて濃茶を巡服しお薄ハ省略され元の寄附に動座すると）銅羅飾りがある（この銅羅ハ井上家旧蔵を同家入札前求めしと、面白きハ其の入物にて）籠張りになっていた事である

この頃（この客組は、謂ば常連にて交歓もヒンヒン丈に、茶話に）美術談も多く（夜のふけるを忘れ天狗連丈面白き夜会であった。）

p194

○白金藤原暁雲庵の茶事　三月廿一日夜会

p195

（此頁忘脱し空白）

〔ママ〕暁山翁夫人から数日前、松永さんを正客として、一会催したい、お客組をおまかせするとの電話があり私はそれは誠に結構お客組はなるべく気の張らぬ同士の常連ニとよろしくとお引受した

（松永さん、田中さん、一子夫人　魯堂、余中村氏）と決しての今日のお催し）

自分にハ藤原さんの茶の正式ハ今日が初会（十五日会などには招かれたが）時刻五時半（本邸前を過ぎ席に面した横より）

寄附ハ（土間を這り二畳長棚床つき）（芭蕉の豆色紙）うくいすの今落したる椿かな、があり、丸炉に鉄瓶

汲出（染附胴ヒモ）、振出（祥瑞） 台朱以上（琉球長盆ニ）棚ニハ（蒔絵芦手小硯箱）莨盆（桑手付）火入（黄瀬戸） 敷物（萬暦）セン、（火入ハ特に珍品肌も良く）祥瑞（香煎入ハ言ふまでもなく）

芭蕉の句季節適幅を賞す内奥さんのお迎い附にて本席に入席すると、

床へは（備前） ニ花（白蓮黒百合）外一種、釜（切子）鐶付 （伊予松平家旧蔵）、炉縁（沢栗久以作）

お炭のお手点ニ炭斗（唐物籐組）、羽箒（青鸞）（火箸ハ桑柄釜敷時代籐）灰器ホウロク

御主人暁山翁（〔ママ〕）は日常人に接せられ、すこぶる温顔好感を与られるお人であるが、茶に対しては殊更その風格の豊かさに、席中連座何のコダワリなき応待ぶりの内にお懐石のお運び

向（胡摩あえ）器ハ（志野）、汁（三州味噌大根薄切り）、椀（白魚シンジー）人参（短冊切若菜）、焼物（ウヅラ焼若筍）織部蓋物

進め魚（鱒焼）器ハ（仁清御室焼菊形）八寸（抜きにて）香の物（沢庵薄切小松菜叩キ）酒器（尹部ノ銚子徳利祥瑞瓢）杯（金襴手刷毛目）

已上終始物なれしお動作にて御主人のお給仕に柏屋の庖丁と食器の名品に一同重分頂戴した　ただ私はお花入（備前）には何となく腑に落ちぬ感じがせられた。お花は（遠来の珍花であった。）

中立は、そばの腰掛とて、ここより見おろす広い庭内大樹の植込と言ふより自然林の眺め、眼前にて鈍翁より贈られしと言ふ、沢庵（禅師）に由縁ある大平石の（ゆるぎなきかにドッシリト）すえられてある。王子製紙育の親、藤原邸の広大さを眺る内、銅羅の合図ハ強く低く谷へ響く一同清寂に聞き入り再入席

床（大切なお席の幅を忘れしは自分ながら粗骨千万まだまだ茶の道の遠さ）

水指（南蛮）縄簾（小形）、茶入（瀬戸玉川手）茶杓（宗甫）歌銘若草「（うすくこく野辺の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむらきえ）」茶碗（粉引白雲）

建水曲（フタ置青竹）、見事なお手前にて、お濃茶を練れた。其の態度の豊さ流石（千軍万馬）と敬服する。茶碗（粉引）の名碗に対し若草茶杓の（お取り合せも、申分なき）、当代お数寄者の一方の重鎮ぶりである。廊下伝いにお広間に移ると

○自宅（雲中庵大炉）の茶　三月九日夜会

過る日伊豆南風山荘にて三溪翁筆（杜子美）の幅も仕立が出来、益田さん蝸殻庵での（空中）瓢の花入の面白さに早速玉川窯に手造写も焼け上ったのを幸ひ、今宵一会を催した。

お客は相違ず（松永さん御夫婦 魯堂夫婦に）縣次郎君（〔ママ〕）

寄附にハ（ひさご 手炉）黒柿（火鉢）香煎は運びにて露地を広間に招じ

広間向掛け花入（信楽）土 花桜草梅もどき、懐石 膳は山挽丸

向（赤貝ネギ）ぬた器ハ（織部足付）汁（よめ菜 水からし）椀（玉子豆腐 エビ青豆、鶴菜）焼物（甘鯛器ハ）備前紅鉢 煮物（牛蒡若筍）器（唐津）

芋棒、吸物（梅さんご）八寸（紫エビ 松露インキン）漬物（沢庵 奈良漬）会寧焼 酒器（鉄かん 錫）

徳利（粉引写 杯染附腰ネジ）志野 菓子（栗のよむぎ餅 飴かけ）

食事が終り三畳（向切）に床一遍上人（残欠）時代（短檠）に灯ツケテ（休憩を乞い）

後席に床三溪翁（杜子美ノ幅）釣釜（風呂先、楽浪古材 明恵上人写経帳）水指（古備前 赤絵ブタ）茶入（瀬戸）水滴袋漢東

茶杓（楽浪、益田家蔵自作 宗旦写鈍翁筒）茶碗（高麗）堅手 建水曲

蓋置（漢時代 車軸）已上にて濃茶を練ったが、茶はドウにか練れたが、手前の順序がヘンだと、美代さんなの（〔ママ〕）指南に松永夫人の口添えに、ますます固くなったが、そこは大胆に点て通した。薄茶ハ省略し番茶などの内最近各家の茶評や、新作（信楽）写花入及杜子美の画に対する仕用につき、（利休 宗旦）時代新物仕用につながるなど、道具を持たぬ、無茶振り夫の挨拶など、なかなかのお茶人振りの快談の折 魯堂兄より明夜一会興行する約束あり散会された

p192

茶の道楽も骨の折れる者、一度催すにも季節や器物にも適するとなると甚だ以て容易でない。殊に我々に於ては猶更である。然し考えよふでは名器ツグめ（〔ママ〕）も面白味が薄い。結構結構と主人本意では茶趣ハお客こそ迷惑至極。自分はよくこんな場面に出会こと多く茶の真隨に徹なさを感じる。この点可もなく不可のないのが必用と思はれる。

○原宿魯堂（約束）の茶　三月十一日夜

九日夜の前約により、少し早めに出掛けると、中村好古氏先着、水屋にはまだ準備中と見え飯道の姿さえ（チラホラ）。間もなく耳庵翁ご夫婦、続いて親美翁、最後に團刀自もみえられ、客組も大分変わっている

即ち（耳庵翁、團夫人、親美翁、松永夫人、余に中村氏、後席から縣次郎〔ママ〕君の）七名）

寄附（飾附ハ）床（遠州外寄り合の）句（横物）、長炉ニ（手取釜、寒雉作）汲出鈍阿焼 香煎入カラン入古竹 台根来、盆（山挽時代）蓋置（瀬戸）、火鉢（ひさご蒔絵）紅艶（旧蔵）莨盆（花梨火入）古萩（足附）などである

迎い附後（正客）の譲り合は例により、耳庵翁先陣にて、庭に（新春のまだ何となく、うら寒く敷松さえ其のまま石燈の灯に）さそわれ本席に（古画寒山、拾得）釜（古芦屋 梅松文）広口 （幅ハ唐画とも思はれる図様ト筆致佳品ニテ 釜又堂々たる大振りと肌合い）

炉縁ハ（主人自慢 黒柿）お炭があって懐石、向（鶴菜 胡摩）アエ（器ハ肥後、焼平皿）汁（新ふき 三州味噌）椀（貝柱若菜ノ、シンジョー）

焼物（若竹の子 器は織部）煮物（大根 輪切）器（備前、平）香の物（沢庵 からし菜）八寸（小鰕焼、百合）外ニ（スッポン 粥土鍋ニテ）菓子（そば、饅頭）

以上食事が終り（腰掛の用意ありしも 寒さに元の寄附へ）

p193

○平松君（十国庵持出し）の茶　二月十四日正午

伊丹家の先代大元時代から二代に続き（忠実）に奉仕しながら益田さんにも蔭武者としてつかえる平松君が一日松永さんに持出し茶を差上げたい、是非取なしてと依頼を受け今日其実現となり熱海に同行した 食事丈ハ奥さん提供。

向（鯛の切身）　汁（三州味噌、小松菜）　椀ハ（例により、雑煮）　焼物（興津鯛）　煮物（ヒジキ、小芋）

八寸（カラス身、青円豆）　外は略す。釜（延命釜広口）　蓋鏡、炭斗（大ひさご、灰仕込、灰さし唐物）　香合（信楽）　切り餅

床の幅ハ（鈍翁筆、一休ノ詩写）　、花入ハ（炭斗大ひさごの早かはりで）　花ハ（牡丹）　水指（呂宋ノ大壺）　口を割り（蓋丹波）

茶杓（象牙、唐物、茶杓）　茶入（名物松島肩衝ノ木型ヲ塗りて、内朱）　盆（唐物四方）　茶碗（高麗銘昔高麗）　彫三島手　建水（鈍翁所持遠州蔵帳）

写鉄鉢　フタ置（古竹）

平松老好の趣向、大瓢の二役（名物）木型の茶入及呂宋（エガミの口を打ち割）りし大侘び茶は至極興味深く釜迄の持出に主人夫婦と共に其熱心さと労を謝した。茶は道具の利用に依って、名品ナミに役立、茶味の湧くもの。それ丈変化もあり面白く娯みられる。同家一泊朝帰京した。

P189

○熱海十国庵(36)　二月廿二日正午

小田原から師範先達の鈍翁がお越になる、道具組に変化もないが、是非相伴せよとの案内　それは大物のご入来 兎も角と出掛けた。

正客ハ（益田鈍翁、高橋箒庵、余ニ伊丹揚山、飛び入　平岡篤次郎翁）

広間の床に鈍翁消息を掛け　床脇ニ（白川〔ママ〕楽翁随筆、白河文庫蔵）耳庵翁の茶への悟入は僅か三四年前であるのに、今は茶家として大家の群に侶し然も文筆又人に勝れ、既に茶道三年と云ふ茶会記迄編纂し、茶友にわかたれる程の精進ぶり。

茶会としてハ鈍翁にハ初めて十国庵入来である。全国を通じ美術茶道の本山丈主人また、ただならぬ歓待振り 先づ懐石ハ

向（クラゲ、胡瓜、椎茸胡マアエ）　汁（三州鶴菜）　椀（白魚人参海苔かけ）　焼物（興津鯛）　器ハ（丹波）　煮物（牛蒡、芋、椎茸）　器（赤絵丼）　強魚（ヒジキ油揚）

器（鼠志野）　進メ物（生ウニ）　器（染附四角）　吸物（芽甘草）　八寸（カラス身青豆ウド）　漬物（沢庵薄切味そ漬）　器志野、益田さんに対し食器など控え目らしく見える。

中立後席ハ床（光琳光悦）の梅ハ翁にも（至極萬足）

花入（古備前舟、釣）　花（ヤシャ白山吹）　水指（木地）　曲、茶入（鈍翁好老松）　大津袋掛けて茶碗（古雲鶴）　筒　茶杓（宗旦）　建水（遠州蔵帳写鉄鉢）　蓋置（地引網のヲムシ）

鈍翁に対しては、何の手ゴタエはあるまいが、主人としてハ熱海別荘での一会とて、海辺に対する釣舟の花入に縞物の漁夫に因む蓋置への心入に揚山君の合槌で御師範ぶりの上機嫌の内に、余から捲き上られし粉引茶碗(23)の箱書を求められ、之れを有望君からセシメられしハケシカランとツブヤキながら銘十石、と書附られた。簡単の薄茶があり三時過ぎ退散せられた。同時に我らも帰京す

P190

床に 近衛予楽院 の朗詠 花入 雲鶴 花白玉にて懐石

向フな小造り 器 染附扇形 三州 味噌若菜 水からし、椀 ウヅラ打角切 煮物 鯛スガタ身器呉須赤絵平鉢 強魚 若筍キンコ

器 肥後焼 八寸 伊勢エビ姿煮 松露 湯吸物 甘栗若芽 香の物 沢庵薄切味そ漬 酒器ハ備前 徳利 杯唐津外一

小清の腕とて新席開きの献立共に美味であった
馬越家又小清であったが今日の方良し

食事が終りお茶にハ 釜 新物地文アリ 水指 春慶釣部 茶入 菊蒔絵棗 茶杓 象牙

茶碗、ハンコウ黒、 茶入 瀬戸 銘 朝美とり 建水曲、以上で濃茶の振舞アリ 薄茶にハ水指 信楽

新物 茶碗 熊川 替 黒楽 新物 茶入ハ棗 前ニ■入シタ 香合青磁 一輪菊 などを用い、広間に

光悦歌切 大横物 これは 三年前原宿にて、松永田中さんらに依って巻物を切りし内 宅ニモアル

今日の魯堂指導茶ハ大和と何にかの因縁あるか、道具類い凡て兄の蔵品であった。兎も角場所柄とて耳庵翁も憶い出もありし事とて愉快に散会した。

○熱海十国庵の茶　二月十一日正午

P188

夜雨荘耳庵翁から、東電社長小林一三(32)逸翁 らが来られる、お出掛さいと通知を得たが、近頃お茶も大分続き疲れもあり、十国庵も毎かさなり、変った趣向もあるまいと、お断りしたが、今日の客は逸翁以外にお茶ケのない連中是非との事に、又も引パり出されて熱海へ出掛けた。処が今日の客は三人丈故後席は余に主人を願いたいとの注文

客は（名取和作(33)、小林一三 加藤三菱銀頭取(34) の三氏）なる程茶には縁遠い人ばかり

十国庵 床にハ 光琳 梅の幅 釜は常釜 懐石ハ白水の庖丁

向 椎茸胡瓜 ゴマあへ 黒い 汁 合セミソ、椀 雉煮 煮物 筍ムツノ子 、焼物 甘鯛ぶり 黒丹波、

粕汁 酒器 瀬戸ノ志野 杯 黄瀬戸徳利 香の物 と云ふ献立

中立後席になると正客の譲り合い 本来なら小林さんたるべきに、小林さんハヲレはいやだ 主人が松永だ、彼れもヲレでは遠慮がある、加藤君では松永が承知すまい、名取君なら、次客の僕が教えてやるから、なんでも君お正客だ、元来茶は正客より次客が大切の役割のある者と無理やり名取さんを正客に祭り揚ると云ふ事に落着いた。小林さんハ 話の中に名取君、松永が茶席の一ツでも持つよふになったは不思議だ アノ我無者らの乱暴者が、お茶に這など夢にも思はなかった。それも益田さんや原さんなどの大物を相手ニ 僕などまだ両大家に対った事もないのに、彼れの強引にも驚くネーと、話の内に迎附があり入席する

水指 木地曲、花入 古備前舟、 花 甘草 茶入 梅形黒棗 茶杓 宗旦 茶碗、雲鶴 筒

にて濃茶の手点があり、お手前振り対し 逸翁 から お流儀ハ餘り拝見しないよふだがとの挨拶に耳翁は新派柳瀬流ですと平然と答えられしも面白く、両電力王の問答と当代金融界の大立物加藤氏 生保界の長老名取翁の対話に興も深く、続いて一子夫人のお淡手点があり

茶碗ハ 織部黒筒 替 粉引イビツ 茶入 一閑 石川丈山絵あり お淡を振舞れしが、名取加藤の両雄も共にお辞退と言ふ有様でお開きとなる。

一同が帰られし迹元三井鉱山の重鎮平田篤次郎氏(35)が来遊された。財界の苦労人丈談話も面白く話の内に僅か北海道砂川鉱業在勤中凡[11]年も前益田さんが巡視に来れた際、翁の画かれた竹の幅を失敬しお茶を上た事があり、其頃藤原さんハ小樽在勤中であったが 益田さんの勢力の偉大さは大変なものであったなどの旧懐談などあり 薄茶を呑みながら親み深い老紳士と共に夜食をすまし帰京した。

焼物真鯉器ハ黄瀬戸、菖蒲手、大根の絵、煮物若筍ニ器織部深輪花、生椎茸手附

八寸ハヤ、カラスミ鯨糀漬百合根小吸物フキノトー ここにて鯛ノ茶づけに椀が出る

山メの切身蓬蓮草椎茸、香物沢庵ウス切打〔ママ〕キ菜唐津の鉢

以上鱒の不着で翁独自の献立に御厚意を謝し、終始のお給仕に老體少しも疲労なく翁より年少の連客ただただ恐悦の外はなかった。食器の内黄瀬戸ハ井上家の忽草絵と同よふ、何れ劣な〔ママ〕ぬ逸品である

お菓子お手製草餅を頂き元の腰掛ニ動座した二月初と云いながら暖い日柄、要意〔ママ〕の炭火もいらない程であった。

後席銅羅の音七点の引入れは大中小の音響がほぼ同じに聞えしは、翁の耳の遠い為かと評し合い席にくり込む

床ニ空中作瓢の花入向ふ懸不味公旧蔵花山椿梅母水指南蛮ハンネラ盞

茶入竹ノ中次銘茶臼山前田家伝来利休花挿裏に(欽アリ)茶杓江月作不銘

茶碗長次郎作赤楽一文字見込ニ一文字ヘラ見る為ノ銘赤トハ云へ黄味ヲふくむ長次郎特有のカセ強く高台内丈赤味釉濃し銘ハ仙叟トアル

後席のお道具組を拝見しても知れるように大寂揃い三溪翁に対するお心と云ふか、挑戦的であった事は言ふ迄もないが、我々に取り

此上ない名品の寂に徹する丈に、御当家としても餘り出会難きご趣向であり仕合である。そこに翁が茶の大御所たるとも言へる訳

空中作ひさご花入は空中中の佳作、其型の面白さ信楽土ノ肌合い、少しバカリの自然釉薬の湧出、雅品絶景である。一文字は今更云ふ迄もなき名物茶ただ如何にも疵大くお濃茶を練られテも、いたいたしさがある。姿型とも原家蔵無一物に良に似たるも、無一物は、見込を深く焼成後いつの時代にか、深く地土を摺り取られあり多少腰ノ高い為かそこに相違がある

已上にてお濃茶を頂き、猶竹の中次銘茶臼山は、普通ナンデモなきよふ見る丈と、いたく感じた私は之こそ休居士自身の手グサミそれに「茶入書附ニ普斎がこんな事を書添へている■仙斎の造り給ふ竹の茶器は、いつの年の頃かはしれぬ、於べば■皮まくらに五ヶ年の夢の覚るとも過ぬ己が師松も於もからんもはずかしく、又この中月を見るやといえ共ある じ名草■■よといひもせし、お礼は是は此のさよの中次いのちとて筒はいたらぬ人のてむさみ

普利休茶臼山にて斎茶を奉る袋利久〔ママ〕漢糸外箱と利休居士一字別形アリ宗旦より参る卜」

さてお茶が終ると田舎家に招せされた寄附に乾山の歌

餓き■睡御無礼は芋やいてくふなることをしるかそもさん 皇■我山直指座下霊海深省与

△広間床海北松徳筆達磨の幅讃九年面壁嘯咸労麻竿三寸舌降六宗■遠孫比丘宗玩拝讃箱ニ

松徳ハ永徳門人別翌也與千宗易相談而改画風号友松青々光琳床脇ニ螺鈿時絵住吉大神宮正平十二年丁酉八月日唐櫃奉施入云々云々ト銀文字アリ釜四方肩衝、水指瀬戸棚に飾る床内ニ青磁向獅子香炉鍍金山王洗米用高杯茶入備前小壺銘松かさ、茶碗対州玄悦茶杓象牙建水丹波已上伊丹揚山氏の代点があり、東禅寺夫人も加はられ、

一座和気満ち、翁のただならぬ寂び茶を称し近来になき真の茶に浴せるを謝し四時散会した。松永さんハ熱海ニ余又タッテト進られ同行した。今日の茶に対する噂にふけり伊豆長岡南風荘三溪翁宛道具組など消息を送られた。

○築地大和堀女夫新席の茶　二月六日の夜会

魯堂兄ノ手にて新営中の旗亭大和から披露の為のお茶に出席を進められた。

客は松永耳庵翁、田中親美翁、余ニ縣治朗君、魯堂兄

P187

この外雲鶴狂言袴の青い中に褐色三部の色のよさ、雲鶴中の逸品である。交趾香合、豊後肩衝に到る迄名器を持ってうづめられしお茶であった。亦も庭を過ぎ広間へと案内さる。

床に元信筆梅くぐり天神讃ニハ北天神影依夢相図之、表装中残黄金襴、一風安楽庵香炉青磁一重口長益上ニ

床脇青蓮院尊円親王金沢文庫旧蔵萬葉集巻一元冊等々のお飾付にてお番茶水菓子の振舞を受た

この参謀は言ふ迄もなく、山澄不門君（ママ）であり、斡旋また大に行き届いた接待ぶりであった。

ご婦人連とは言え、御主人以上の数寄者のお二人とて、座中一寸のスキなく主客一連の雅会には我ら相伴者、又こよなき娯であった。猶、馬越夫人ハ牛歳、お生れとかにて、今日の取合に、さこそうなづかれ御主人なき迹永く厳父愛品の愛護を祈りお暇した。

○小田原蝸殻庵ノ茶(31)　二月一日正午

蝸殻庵の催にハ原三溪、耳庵、田中森川の四氏であったが三溪翁及田中親美翁の風邪の為白羽の矢は余にむけられ、松永夫人と共に今日参列するは意外な得物であった。

小田原駅へのお迎い車ハ余一人の為であった。運転手の話でハお客は皆お揃いとのこと、猶客組ハ急に変更の為箒庵翁と松永夫人トにあなた丈との事にて、常連丈に娯みつつ掃雲台へ

蝸殻庵は母家玄関前を右に登り田舎家を右に其の中間に設けられている。席の中段に急設の腰かけ寄附に、遅ればせに馳せつけると、先着（松永夫婦、箒庵翁前夜名古屋からの森川如春先約あり）、網代構い腰掛にハ炭火が山と盛られてある。この日の接待役伊丹平松倉持氏の斡旋の中に、山上より、綿帽子に杖の九十一翁は翁（ヲキナ）さながらの姿でにこやかにお迎い附け、無言一礼のまま山上へ引き返される背姿にお爺さんハ元気だなー と如春の口から洩る。古色を帯びし土塀の門を潜ると松花堂筆幽月亭三字額が懸られ正面席切妻にも蝸殻の額あり。席の左屋上に五重ノ塔其の下に蹲あり正客箒庵翁先達にて啾に清め入席する。

席ハ縁側付二畳台目付持仏堂アリ三尺床床に貫行（ママ）寸松庵色紙梅の香のふりおける雪をながめるとたれかことことはてはおらまし表装浅黄印金中紫印金」老翁しとやかに出座ご挨拶に箒庵正客と余ハお客組変更は此上ない仕合を謝した。

釜古芦屋大厩江月所持炉縁時代松遠州より江月に贈る香合交趾柘榴、炭斗唐人傘藤組羽箒青鸞

灰器南ばんサジは桑柄お炭があり香一煙後香器拝見する。青、黄、紫、との色彩釉、地土の白さ置キ口の作行ナント見事さ

交趾柘榴中の名作に一同喜悦であった。釜と云い松大寂び炉縁など三溪翁への目標道具組である。懐石にハ狭い席とて、余ハ茶道口にすわる。さてお献立ハ膳椀共に性法寺（ママ）

向寒斛小作あえ者器ハ和蘭陀四方汁三州松菜、水からし進魚生雲丹、小皿へ徳利、

井戸脇杯青磁見込に梅花アリ雲■

お給仕中翁は、お椀は、朝から箱根御殿の養魚場に釣せてヤッテいますが釣ないと見え帰ってこないから残念ながら、其紅鱒が上げられない。この罰金は又一会催しますとの訳明（ママ）、なる程お椀の出ない訳、

○波満澄会初会　一月十五日夜

出席者ハ辻、大月（28）、平岡権八郎（29）、川喜田（30）、香取、守屋
中川、澤田、星野、山崎、能勢、岩田ニ余

新年とて福引の餘興などあり席にて薄茶床ニ玉堂筆讃 山縣公
窓おせばかすかに梅の香か那
夜里■ながら月り見参無　有朋

花入 手造 花 寒菊外　水指又 手造 茶入茶碗共に新作であった。

——P180

○馬越家 穴ウメの 茶　一月卅一日正午

この朝魯堂兄から、市兵衛町馬越さんのお茶会がある、お正客は團の奥さんだが田中さんが風邪で不参、その穴ウメながら、ドウダとの電話。馬越さんにはまだ一度も茶に接せず、同家ハ故化生翁が益田さんとお道具の争奪家でもあり、多くの名器蒐集家である。それ丈穴うめなり共今日の娯も深かった。時刻にまかり出ると、

（團刀自、藤原銀次郎夫人、縣次郎〔ママ〕君
余に美代さん　の五客）

この新席は魯堂の建造である。寄附 三畳板敷 丸炉に釣釜 桃山時代小硯箱 桐の 火鉢、萬古焼手炉 莫盆火入宗品

など

汲出 染附松竹梅、振出 青磁
出台 真塗天目台形　盆 朝鮮青貝寿福文字入

化生翁の他界後僅にして夫君孝次郎〔ママ〕氏亦逝かれた未亡人今日の御主人ハまだ豊艶色香さらぬかの容姿、おしとやかなお迎い附、團夫人を先頭に、流れにそい庭伝へに本席に

——P180

床 雅縁 千代もこの神をそたのむくらい山　応永二二年十二月今年中偕石金吾八■昇進依為
懐紙 こふてうれしみちのめくけり　春日■平野社宝前詠参議従三位行兼右衛関白藤原雅縁

釜 芦屋霰松地文　鐶付 松ノ実　炉縁 黒柿　香合 交趾■牛　炭斗 四方黒葛箱　鐶 梅花形　火箸 桜皮巻　水指 真ノ手桶　茶入 中興名物

瀬戸 豊後肩衝　袋 白地ウルコ権大夫　阿部豊後守 旧蔵　茶碗 玉子手　鳥羽屋玉子手

茶杓 宗甫　八幡名物歌銘 初春のはつねのけふのたまはうき　手にとるつとにゆらく玉緒　瀧本坊 宗甫

茶入 建水曲 蓋置　青竹 お懐石ハ向 鮒小切 土筆頭　器 赤地金欄手　汁 白味噌葉附 か婦、青のり掛て

椀 鰕のシンジー、鴨、松露栗、ウド小切　〆飾蒔絵椀　煮物 キンコ若竹の子　焼物生若さぎ　器 織部長角足附　吸物

フキの頭　八寸 山ノ芋短冊切黒豆松葉刺　くし子、香の物 沢庵薄切味噌漬、小松菜打〔ママ〕キ　器 金襴手呉須赤絵小　菓子 梅ねじ白煎

已上名器名具にてお濃茶

懐石を頂戴し中立 茶碗ハ白釉高台土見深く見ゆ、青釉厚く掛ル

後席床 古銅　花生 白玉サンザシ　花 水指 朝鮮　唐津 白釉ナダしあり　見事デアル

茶杓 古象牙、茶碗 雲鶴筒茶碗同窯一作鶴 筒 狂言袴　箱ニ 師家家屋三一品　宗中 三井家伝来　替一入 土見高台一入トシテハ作行強シ

建水 仁清　袋形　茶入ハ 金地　野々宮 蒔絵 牛車棗

已上にてお薄を頂く。お濃茶道具と云い、凡ての名品揃ハ流石化生の物数寄、蒐集力の旺盛もうかがはる。殊に茶杓玉の緒は、化生翁古稀祝の折、一流実業家より、翁への祝い品として選考の上、翁愛蔵品の内より、金杯替りに、純金にて茶碗茶杓を模作して贈る事が意義も深いと茶碗と共に、此玉の緒を写す事に決し、現品を金工に渡すを恐れ、自分をシテ桑材にて写作し金工に渡すことになり、自分は桜川町の邸に出張欣作したと云ふ、それ程化生翁秘愛茶杓である 従て余にハ今日茶に用ひられ、当時を憶い出されて一入感に耐えぬ この茶杓雅致に富み一見遠州トハ思れざる作行、彼が松花堂に贈リシ自信の程を憶ふ

茶が終り翁の書斎に導れた。壁間にハ翁の筆にて「澹薄去、烟■■雉犬野人家風味」晦の木額」唐三尊石仏などアリ　翁が悠々自適画筆に親まれるこの書斎の広さ、翁ハ仰木君 君から頼まれし杜子美の絵は なか なか ウマク描けぬが、之れで我慢が出来るならお持帰りを願いたいと、半切杜子美の画を示された。之れは何よりと、押頂いた。間断なき美術談にお昼を頂き、亦も三時の打つ迄長談義の上お暇した。雪にても なり相な空合を、ご家族方に沼津行バス迄お見送りを得てお別れした。御厚情ツキヌものがある　三日間の風流旅行も、新春気分であった。

○團芳子 刀自 年始の茶　一月十六日夜会

P 178

團さんの奥さんから極く親しい人丈にお雑煮を差し揚げたいとの御厚意で出向く

先づ第一洋間に通され床を仰ぐと唐画 馬公〔ママ〕祖筆 人物桃柳の画 が懸り 床脇 ニ 光琳筆 湘藩〔ママ〕八景ノ帖 鎖子 和蘭陀獅子を拝見し次の洋間ニハ富岡 鉄斎 筆 放牛の 図 、食堂にてお雑煮の馳走

連客は（田中親美 中村好古）魯堂に余の四人）

先づお雑煮、煮物 茄子 大根 器ハ 備前 汁 百合 焼 焼物 ブタ 焼 八寸 カラス身 トンキン豆

食事が終り奥の小間 三畳 向切 床へハ卒翁、筆 布袋 痴絶 道沖ノ讃

文ニ曰ク「枝杖布嚢擬何、家去譲何事、淳和〔ママ〕戊申十月 回皈而顔嚢中、星光滞貨安等 閏月金陵玉山主道沖讃」

表装 一風紫印金、中古金襴 花入 古銅 梅耳 高サ六寸位 花白玉臘梅 釜姥口 笹地文 芦屋 水指、南ばん エビツマミ 不昧公箱 茶碗、青井戸 銘常盤 茶入、黒中棗 五郎作 袋 白地古金襴 小牡丹 茶杓、宗旦 共筒 不箱ニ 雲林院、トアル 薄茶器、刷毛目塩筒、小服 建水曲 フタ置 青竹

以上のお組合で奥さんと共に美代さんの手点にて、お濃茶と共にお薄を頂き、気あい人々丈に親み深く、お国風お雑煮を頂戴した。広間で番茶水菓子などのお進めもあった。

馬公〔ママ〕祖ハ馬遠の父とあるが、馬遠に及ばず。光琳ハ余程若絵と見える狩野家風がアル　卒翁ハ誠ニ結構、特に花入ハ益田家青海波より肌合も良く名花入であった

御主人なき跡この新年にもお心淋しく迎えられしと感慨無量の内に　厚くお礼を述べお暇した

○自宅雑煮の振舞　一月十四日夜

P 180

又も日附が前後した。兄一家 魯堂夫婦ニ 茂夫婦（27）を田中親美翁をお招きした

広間にて向 鯛の甘酢 代 器 小 汁 白味噌 百合 雑煮 国風 鯛の荒煮 唐津 片口 進め魚 雉焼 生椎茸焼 器 刷毛目 小鉢

料理は案外良カッたと見え親美老 魯堂 共雑煮四椀 のお替り 荒煮又 お替りと云ふ豪腹ぶり。

床に動座を乞い、床に 信楽 ウズクマリ を掛け花 梅ニ 山椿 釜 浄味 アラレ 茶入 御殿山産れ 茄子、 鈍翁銘箱 茶杓 老松 歌銘 鈍翁 茶碗 鼠志野 銘山の井 建水 ハン ネラ 蓋置 古竹 自作

大寂山の井花入 信楽 に対し両雄も至極満足げに夜をふかしお帰であった。

釜 笹地文 [漢]口 炉縁 時代 檜丸太 水指 南ばん焼〆 上釉アリ 蓋 古染附竹ツマミ 笹の絵アリ 、茶碗 志野 檜垣 、茶入黒 独楽

茶杓 普斎 節下ソゲアリ 、フタ置 青竹 建水曲

お手前ハ例により淡美の内に濃茶が練られ一巡拝服し茶碗拝見す。

この茶碗は昨年一度出会しに今再見すると團家朝萩にも劣らぬ名碗である 、芋頭水指も又 益田家の柔さとハ違い 焼〆丈に光沢あり畫と釣合もよく

行光牛ハ 世に定評あり一部 国宝指定の絵巻の一部

幅を賞し茶を味い諸家の茶事を談し清寂中の歓話の後、元の大炉板敷へ移る。ここにて魯堂夫婦の謡の餘興がありしも、閑居山荘にハ一興であった。

然し聴く連中にハ少々アキラレ気味

△扨之より程近き静浦海岸へ津浜、岡部長景子別荘(26)へと一同出掛た

御主人ハ留主中であったが トンネルを下に、魚見の松の山上に お家柄の母屋が あり田舎家あり

眺望佳絶眼下に海面を見、遠く遠州灘 を賞する好位置である 留主居の斡旋にて田舎屋炉中に粗朶を焚き、魯堂携帯の茶箱開き

茶碗 黒瀬戸筒 口ト腰ニヘラ目 檜垣絵 アリ 下敷 三島 茶入 竹 中次 茶杓 象牙 巾筒 乾山 、かし器 黒根来内朱 香合

織部 以上 で淡茶の振舞あり、当代数寄者揃いとて、茶道に対する怪奇談ニ茶道についての批評、諷発漫談もつきず、一月にも似ぬ海温にめぐまれ、長岡南荘に帰る。

この日一行と帰京の予定であったが、三溪翁ハ君にハ話もある、是非一泊せよとの事であったので田中さん丈無理に引留我ら二人ハ又もここに一泊する事となった。冬の日の暮れやすく、風呂に浴し一日の疲労を癒す。夕餉も大炉に釣鍋、翁ハ君ハ胃腸も悪いよふであるからとて、蓬蓮草の粥の用心であったのには翁の心入に感激した。処が用件などもなく、只近か頃松永君の茶への執心に対する批評ニと言ふ話題で、僕は松永君のアノ豪胆さ、人に屈せぬ態度の面白味を感じている。然しこの頃益田の如き大茶の湯に交遊される為、トカク人真似になり勝ちゆへ 茶は出来る丈省略即ち奇略が望ましい。坦々であること茶道にかなう物、自己の意図を放れては茶は成り立ない。そこに妙味が湧きでるからであると、淡茶をすすりながら夜話であった。尚私は近頃の道具披露処謂儀式茶は嫌いゆえ、以前から茶に招かれてもお断りしている

ただ魯堂の茶と、タマに益田さんに行く位い。最近ハ松永君の所にハ出掛けるが、茶は見せ物ではない、侘のこむった物でなくては趣味丈でハ興味はうすいからである、など夜を徹しての講義を聞されたのも益する事が多かった。

早朝の村荘の気分のよさ、湯町に烟る朝霧を一周し長岡山トアル

日蓮宗の古寺に詣す 山門二重層形式ノ変った門

道すがら、伊豆ハ古来由緒深い所、古蹟でもあらばと、同行の親美翁に話すと、老い私も不案内だが、此の先に目珍しい上代石棺が露出している、それ丈ハ飛鳥朝同よふとの事で東道を願った。場所ハ南風荘より約三丁程にて畑に面した小稜の中服〔ママ〕にある。成程見事な石棺 量も太きく〔ママ〕スバラシイ 物であった。想はぬ思いで山荘に帰ると朝湯の用意に一風呂浴び朝食を炉辺で

白味噌汁、手打 そば 、蓬蓮草ヒタシ 翁ご自慢丈にそばの美味さ

そばのツナギハ益田家ハ山芋、原家でハ玉子の黄丈にてとの説明

食事がすむと 四畳の間 床ニ病の草紙 土佐 光長 筆 残欠 懸花入 古竹 寸切 花 加州椿 ハシバミ

釜は前と同じ 水指 春慶 釣 茶杓 佐久間 将監 、茶碗青井戸 大寂 にて一服を進られた。

△熱海から小田原への正月のお茶の娯み茶の道であらばこそである。

自分はこの行に（粉引）茶碗の（箱書を鈍翁に乞わんと持参せるを途中耳庵翁に分捕れ、其替りニ）[23] 志野銘鈍翁、山の庵を得た。

○熱海夜雨荘より伊豆長岡南風山荘への茶行脚[24] 一月七日

p174

元旦より伊豆長岡南風荘に避寒中の三溪翁より、遠征せよ七日に美術座談でもするからとご案内を得ていたが、先生の都合で一日は延べ明八日となった。我ら一行は、打合せの都合で、兎も角熱海まで出掛け松永夜雨荘迄行く事に決した。一行はいつもの常連、

（田中親美老、魯堂夫婦中村氏に余の四人）熱海に着た頃にハ朝からの曇り小雨となる

この日夜雨荘でハ、箒庵翁と第二号及び自分へのお茶の用意中であったのに、此の一行の飛び入にテンテコ舞、然し耳庵翁丈ハ意外ナ珍客で大喜び、兎も角お食事をと奥の間にて食事の振舞い　床にハ常信（寿老）の幅（鎌倉）時代（木彫）牛に花が挿してある。

向ハ（鯛の切身）汁（合せみそ宇佐美ネギ）新海苔、椀（鰤雑煮）煮物（鯛の浜焼下仁田ネギ）焼物（ツグミの味噌漬備前平鉢）八寸（カラス身外ニ）

酒器ハ（瀬戸の銚子）杯（朝鮮唐津）ニ瀬戸

箒庵翁二人を交え七人と云ふ大勢の賑かさ。正月とてお雑煮も九州風にて、都人にハなかなかの馳走であった。食事がおわり、茶席に案内さる。

床ハ光琳（光悦）の梅の外、去る四日同よふの茶具組にてお濃茶。（掛物にハ新春として好評雲鶴茶碗と共ニ）

お茶終り一同は東伊豆谷津中村氏の別荘に一泊の予定であったが、耳庵翁が、長岡に行きたいとの事で自分丈ハ熱海に一泊し兄らは谷津に出発した

△翌六日九時半熱海発三島から自動車にて南風荘に着きしは十一時頃であった。耳庵翁と共に山荘を訪ねしは始て。長岡湯の町郊外南風山荘ニ梅の老樹の植え込み背にハ孟宗林に囲まれた大田舎家風の建物にて、広い土間に板敷の間に四尺四方の大炉を構え、持仏堂に（鎌倉）時代地蔵像が安置されてある。土間には、すべて田舎家にふさわしき農具も備えてある。凡ての造りは伊豆地方は特有古風の構造である。土間に雉山鳩などが釣され何れも山家らしき翁の好みである

到着も早い為三溪翁好文字入（南風荘）釣釜を用い美術や茶問答のある内、谷津からの一行も到着された。唯一人美代さんを交えた古びし板の間に羅漢揃に小野の小町の出現だと揶揄せられ一座堅くさは（ママ）微塵もなく流石悟脱の心境である。間もなく食事のお運びは（老女によって）

向（鯛の小切あへ物）椀（焼鰻白味噌ネギ蓬蓮草）お替りあり。煮物（野菜）、八寸（カラス身山の芋）菓子（粟もち飴かけ）

美味を主とせる簡粗な、そして食器などにこだわりなく、時代丸卓上にて、扨食事が終り、次の八景の間を経り、廊子を経て長四畳茶席に通る。八畳の間の床に宮本二天筆（竹に雀）の画讃掛る[25]

讃ニ曰ク「雞栖蒼〔ママ〕忡々、独遊翠竹叢双暉何所闕達葉探飛蟲　亀川山野納隨縁子讃」、長押ノ下ニ（お福ノ面）鈴など懸られ

（新春気分到る所に漲る）

床ハ（長四畳）九尺ニ（尺三寸の踏込床）床に伝行光筆（放れ黒牛）残欠（横物）懸花入（伊賀）

ニ（ハシバミ小菊）と云ふ備え

夜雨荘は熱海桃山山上にあり遠く初島は海上に浮島かと眺め、大島の噴火に尾を引く烟りと共に日蓮上人机島など一望の好位置である。今日の客組は、

（主客 冨永氏、藤瀬刀自、荻野博士 田中親美翁 余 伊丹信太郎の 諸氏） 冨永氏ハ益田翁 先夫人の里方

先頃出来た 新席 床ニハ 光琳筆 金銀泥 梅の画讃光悦 誰云春色促東到 露暖南枝花始開 紀州家 伝来

釜 鐏口 文字アリ 甲癸〔ママ〕□□歳正月吉日河内産ニ 藤市郎鐏口□□寄附神前夢雲龍□□

水指 瀬戸 椿手筒 茶入 梅花式 墨蹟 新 鈍翁 贈り物 茶杓 原叟 作、茶碗 古雲鶴筒

火替アリ にて濃茶

拝服す

光琳 光悦 合作梅〔ママ〕を絵を初め、雲鶴茶碗に 正月云々の記名ある お釜などお取合は正月初々此上ないお組合で新春を寿ぎ、小田原正午のお茶もあり、私と田中さんら一行は松永家から車をもらい小田原十一時着く。松永さんも同行を望まれしが、風邪ぎみで取やめられた。

小田原幽月亭

紋服の主翁に平松君ヲ伴はれ、お迎いつけ洋間寄附にて、年賀を申上げ旧臘の歳暮ノ茶のお礼などと共ニ

床にハ 藤瀬 刀自 豆色紙と歌 一首 大人のよそいめでたく 千歳の秋はノ云々 季子、 ストーブ上ニ 唐時代ノ盤 高麗鈴 古銅地 鎮器

ここにて金杯三ツ組にてお屠蘇を頂き、奥の間 控えの間に入る 守景筆 屏風を構い

間柱に花入 利休 作小田原 尺八 花 太郎庵 椿一輪 （この花入こそ豊公小田原在陣ノ折 韮山竹を以て利休作中の名品）

懐石は向 柚菓付 花野菜 椀 鯛の切身 素焼 七りん 持出し 帆立貝 貝鍋に 蛤 ムキ身、味噌 白菜ネギ 煮込、

湯吸物 ウズラ玉子 八寸 木曽川山蟹、カラス身、鮭ノ子外器備前平鉢 酒器ハ 銚子 青磁フタ 、徳利 備前 ヒタスキ 杯 染附 粉引

構いの間にての懐石も変たお趣向であり、小七りんお持出の貝鍋も正月らしく感じられて嬉しく食事を終り、廊下伝いにお席幽月亭に移る。

床ニ公任堺色紙 はるくれば窓くる〔ママ〕うめの花 君が千歳をかざしとそみゆ

釜 柏釜 姥口 松平杵筑〔ママ〕公伝来 魯堂より有賀家ニ 香合 染附 寝牛 炭斗 木地 四方 菊盛上げ

羽根 鶴 火箸桑柄、鐶象嵌入 釜敷籐組 灰器 出雲焼 箱不昧公

お炭があり、水指 南蛮 芋頭 蓋エビ、ツマミ 茶入 漢作

銘弦付き 箱松花堂 袋笹ヅル 茶杓 宗編 銘翁

茶碗 青井戸 銘若菜 箱 宗甫 建水曲 蓋置 青竹

公任色紙の歌と云いすべて新春にふさわしきお取合にハ、毎回お催も折にふれ時に応じての数々の御秘蔵多きを今更ながら驚嘆の外はない。お茶を拝服して広間に動座すると、

床ニ雪舟筆 牛乗西王母 江月賛 白頭軽御笠、一見眼中寛、四席花何筧、常騎黒牡丹 欠伸子謾賛 勿論 迹書入レ

猶此幅ニハ 松花堂写 江月ノ添アリ 賛ニ曰ク 歩行坐■平生自由入真人、誰住以頭■然道行退人一牛 欠伸子戯賛

書院 時代 蒔絵山水絵手筥、 貫行〔ママ〕 亀山切 和歌集 巻ノ二 或ハ行成とも称せられ 十二葉冊子 釜 古芦屋霰 放し馬地文 炉縁 高台寺蒔絵、 水指 祥瑞輪花 共フタ 棚 直斎好四方 矢筈棚 にノセ

茶入 胡民作、片輪車 茶杓 象牙 茶碗 雲鶴 筒 小服 替 宗中空 在銘上釉ナシ

年賀に対するお道具揃いは、前も記したが斯くも豊富を自由自在に駆使せられ眼福この上なく無限の喜び。荻野藤瀬お二人の帰れしも田中伊丹両氏と共に余は迹に残り、年頭の書きそめを乞い、一首を得た。折り柄横井夜雨君も年賀にこられ、共に今日の茶談にふける内鮪の寿司の馳走に亦も服をみたしお暇。余ハ又熱海に引返し、耳庵翁にも今日ノさまを話し夜は茶席にて淡茶を喫し夜話にふけった。

床に　朝吹英二翁より　拝啓青海波花生御懇望ニより御譲りさして永く
青海波花入譲り文　御愛蔵賜度■望の至りに存候

歌に　嫁入は目出度けれども親心
うけ〔ママ〕しくもありかなしくもあり　以一笑■■　東京三十四年除夜真言寺拝具
観崎先覚　玉机下

さては名花入青海波が出るのだと思いしも、たとへ送り文に除夜云々とあるにしても、アレ程の古銅名花入と、この田舎家にはと、いぶかりながらお懐石を頂く。

釜ハ　利休所持　田印　采目　共蓋　名物　炭斗　ふくべ利休所持　香合　槻牛彫宗編朱書

懐石ハ向　柚葉付、フグノ小切あへもの　木地　丸盆　汁　暗汁白味噌ぶり野菜ノ小切　御主人得意の汁

煮込　猪ニ下仁田ネギ人参　器　源内焼フタ物　狸　自慢　手打そば籠に盛り薬味入備前手付　椀　蛤の吸物

八寸　百合、鮭糟漬、鱈子、外器南ばん平鉢　漬物　白菜沢庵、菓は搗立栗餅　飴かけ　以上献立も田舎家らしき翁一流であった。

食事がすむとお茶振舞ハお道具は　花入青海波　白玉

水指　紹鴎　好　小竹合せ手桶、茶碗　翁さび克徳作　後撰集より　大正　名器鑑所載、茶入　野田手肩衝　袋冨田鈍子　茶杓

杉木普斎　銘　去年今年、袋ニ　宗甫文添、茶碗ハ令弟　克徳氏手造中の名碗をお用いになり、ご早世されし愛弟の遺作を憶はれ、銘亦御自分の九十一才を迎られる翁と称へられるも此上なく適品に加え、普斎の　去年今今〔ママ〕の茶杓と言い、歳暮の茶に申分なき、連客の喜びも一入である

翁が晩年は茶道三昧に閑日月を過され、自他共へも娯を別られ、心行く迄茶の妙程に達観されるハ茶に親む我らにも仕合千萬である。

翁の芽出度くお年越しを祈り亦すぐに春のお催しをねだりお暇した。この折楽浪古材茶杓を呈した。

△猶、雑談中私が去る廿五日畠山さん、ご夫婦がこられし際、奥さんから、ケサ夜明前に夢を見ました。それは、益田さんから卅日にお茶に招かれた夢であったと聞かされし事あり。その夢の話を翁にお話すると、翁ハ手を打って大悦びで、早速家人を呼び速座に案内状をお出しになった。それでも気がすまぬて見え、電話を以て申込まれた。扨帰宅すると畠山夫人から電話で、先程小田原から夢の茶で御案内をお受けしたとて、電話口で大笑いの挨拶があり、夢物語の真夢となった事も風流事である　以上を附記す。

○原宿魯堂ノ茶　日附前後したが　十二月廿四日夜　——— p170

急に一服上げたい松永さんご夫婦丈お伴れを乞ふとの事でお電話で打ち合わせ、耳庵翁ハ社から夫人ハ目白から、母屋の茶席にて

床にハ　宗達　源氏　五十四帖の内、雪だるまの絵　元團家屏風ノ一部　琵琶床ニ　蒔絵鏡の巣　釜　四方口　水指　古備前矢筈口　茶入　盛阿弥棗　茶杓　庸軒虫喰　茶碗　高麗　松浦家伝来

食事は美代さん手料理に舌鼓を打ち、濃茶をすすり、広間に動座、

花入　古伊賀　花　ヤブ椿　この花入ハ大分大物魯堂鼻高々　お淡があり、耳庵に進め高麗茶碗を分捕られて　お開き

○熱海夜雨荘　於松永　別野　小田原ニ続く　昭和十二年一月四日　——— p171

去年の秋程茶の湯の各家に催れし年は稀れ〔ママ〕あった。それ程茶に親む私にハ仕合でもあった。年改まり新年の祝詞に例年一月四日小田原に出掛けた自分は、昨三日東京を立ち夜雨荘に年頭を延べ一泊した。それはこの日耳庵翁のお茶会があるからで。

天狗そろいの面白い茶事にて、それ丈一同満足この上もなかった。

さて一同お暇をつげ、今シも山を降る折しも、蓮華院上の山より、幽に聞ゆる鐘の音数点、これこそ客を送るご主人の心入れぞと、主人の高雅な茶趣を感銘し帰途についた。

○赤坂梅露庵歳暮の茶　十二月廿三日夜会　——— p166

主人五郎三郎君ナキ迹、若い未亡人に依って、家業茶器商を続け、後継者の指導と共に茶に親みつつある、未亡人から、今宵團さん夫人と一服さし上げたいとて案内を受けた

処が團奥さんは風気味とて、急に不来となり（魯堂夫婦余と鈍阿　君の四人）

寄附　光広卿の文（風吹くや籬の丈にて、春をまつ雪のさむけれ）、袋棚ニ裂（手、鑑）、炉に釣釜

汲出（萩新物）　香煎入（染附）　盆（ムベ組丸）、長露地の夜色を賞し本席へ

床（備前）花入（花白玉梅）　釜（松ニ鶴）　地文、（炭斗脛アテ、火箸桑柄羽箒鶴、鐶象嵌入、）　釜敷（籐組）　香合（伊賀）

お炭があり懐石　向（油波〔ママ〕貝柱）おろしあへ（器ハ小代）　汁（合せみそ蓬蓮草）

椀（甘鯛豆腐）海苔かけ、焼物（海老芋鴨）　織部手鉢　強魚（胡摩豆腐）、吸物（フキノトー）　八寸（エビ百合根）

備前（足付長角）、香の物（沢庵古茶漬）　器ハ（志野沓鉢）、菓子（煎蕎麦饅頭）、以上の馳走で中立ち、

中立後　床ニハ一休（和尚）　無ノ一字（横物）　茶碗（井戸小服）、茶入（瀬戸面取）　遠州箱、茶杓（桑山宗仙）

水指ハ（宗和好春慶）　手附（割フタ）　已上にて、しとやかなお手前にてお濃茶を進められた。

淡茶ハ（茶碗）　金梅（小服）　替（楽黒原叟）　茶入（竹の中次）　藤重（トアルモ後書）　茶杓鈍翁作（銘鷹ノ峯）

（鷹の巣む峯にまいゆきひんがしのたかきにつとう手柄かほ可那）　水指ハ（空中）信楽にてお淡を頂き、刀自の茶趣をめで厚くお礼を述べ散会した。

○小田原掃雲台田舎家　歳暮の茶（22）　極月廿八日昼　——— p168

廿日頃から廿八日に歳暮茶を上げたいとのお便りに今日を娯み小田原へ、例の通りのお迎車、駅にて熱海からの耳庵ご夫婦と落合い同車掃雲台につく。田舎家前にハ主翁を初め先着田中翁伊丹氏らに出迎いられた。蜜かん畑を囲む田舎家前にハ、大根に蕪などが釣され田家の風情もゆかしく、そばにハこんこんと湧き出る古井戸にてウガイに身を浄める。土間を見ると今餅つきの真最中

一臼の粟餅のつき揚りし処、歳暮茶気分も漲り、何と気持のよさ。土間の壁を見ると、恵比須（大黒の餅搗と福助の豆撒きの）図が掛っている。其の趣向に一同満悦。遅れ馳に藤瀬夫人も到着され共に寄附に通ふさる　床に（沢庵）の文（綿帽子を送る云々）　何と云ふ

（寒い年の暮れニ対する適幅であろう）

長炉に（釣釜）（炉辺に大炭を盛り上げる[午]の）　香合（青竹網代に梅の折枝青松葉を敷き）　上に大亀を飾り松竹梅の趣向

（も主翁らしき好み）　九十一を迎えられる老翁の雅気でもあり、亦茶番ケもある。

廊下軒先にハなんと無数なハヤト瓜が棚一面になり下っている。相模湾又視野に入る。

式翁の構想であるも面白く、東京からの汚れを清め広間に通る。

床にハ南禅明極楚俊墨蹟文ニ曰ク「包無外処致、難斎貫古送、今識者■索性二回■■到、底休論是ノ興非―■上人作時　建武□季冬上■三月前住南禅明極叟楚俊書■少林間■□□」

時代蓮華刻長方袈裟筥宋時代刺繍裂入レ長永〔ママ〕二癸丑春三月上金堂宝前西大寺官師の裏朱書アル　以上床間

文房飾机光悦風塗猿面硯銘■の下蔭、水入古雲鶴墨架三月堂　薬師寺古材乾漆獅子文破片　応用台付　裏に蓬庵トアル

筆班竹架ハ、妙法華経第一ヨリ第八迄八部鎌倉時代古銅時代塗筥へ桃山時代棚上ニ六朝石彫獅子下ニ鎌倉刻白紙罫引大香合

已上名墨蹟を初め、奈良時代より鎌倉に到る古代美術の数々を拝見する内」にも「角大棚の、畳摺に車軸の附きしも目珍しく」、次の間に食事の用意がされた。

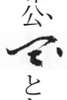
時代長卓上にて、椀秀衡三ツ組スッポン煮物レンコン後にハ雑すい、この献立にも広間に対する御主人のご趣向が現れている。さて食事がおわり、主人の案内にて庭に降り、伽羅石点在する露地を金毛窟に入席した。

床に地獄草紙残欠詞書寂蓮花入古備前矢筈口花寒菊を無雑作に入れ

釜九兵衛作姥口菊地文炉縁黒柿大時代水指時代薬籠、茶碗伊羅保大寂茶杓ハ江雪共筒

炭具ハ時代竹組、火箸桑柄香合ハ仏像ノラハツ二ツに切り応用

なんと常人に見られぬお道組、地獄草紙と云い、水指に用ゆべき矢筈を花につかわれ薬籠を用いられたこと、香合仏像頭髪ラハツに至りては、凡そ普通人に及びもつかぬ翁独自の見識ではないか。然も大寂伊羅保に対し、茶入飛騨塗春慶中次の取り合せ。其の茶趣味の豊さ、建水ハン、ネラ蓋箱古竹不昧公花押、之れ以上の侘びと寂び茶が、翁又いつになき嬉しそうなご主人のお点前、破顔の内に濃茶を練れた大人のお姿に無限の茶趣がひそめられ、何にか敬虔を感ずる思い、其内にも亦和気靄々談笑湧が如くであった。正客耳庵翁は元よりこの御主人の趣味高遠なると其の偉大な風格には、只々顔色なきである。

益田翁と倶に双璧と信じながらも、上代美術品の取入方にも、茶趣向の点に於てもかなりの相違点あり。過言のよふだが私の信ずる限り鑑賞の点にも一段と秀れられしと思はれる。さてお道具拝見の折、この前蓮華院に招かれし際翁自作の竹の蓋置を〔マント〕如春氏に捲き上げられたことあり。今日の古竹蓋置ハ、まさしく翁の作と思い、むらむらと野心が起り拝見と共に、すぐに、これは私が頂戴しますと袂に入た。三溪翁ハニコニコ笑っていられしに、そばの中村君が、それはモッテの外、よくご覧んさいと〔ママ〕注意するので、ヘンとは思ったが、ひそかに袂よりのぞかせ、よくよく見ると、なんと不昧公  とある。之れは大失敗と一座大笑いの内にお返しすると云ふ大しくじりも座興であった。例によりお淡は省略された。

△三溪翁の今日の催しに、こんな逸話がある。過る日魯堂兄から一服差上たいと申入れると、私はこの頃健康を害している、お茶の催しなら、何か名品でもお手に入りしことならん、是非病気見舞として慰に見てもらいたいと中村君を通し懇望された。そこで兄は近頃求めし伊羅保の茶碗即ち今日用ひられた茶碗がそれである）処が茶碗の返却もなく、お蔭で病気も治ったから、君方に快気の茶を上げたい云ふのが今日の催し。こんな訳で、流石の兄も、鳶にさらわれた形ち。

茶席の招じ　水指（木地）手桶の外茶碗茶入同じ　但し茶杓丈ハ（鈍翁作歌銘老松）

この老松茶杓ハ、畠山さんお招きするにつけ、鈍翁に茶杓一本所望すると、翁ハ畠山君は謡の熱心家ゆえ、老松に因みし物こそよけれと、早速この茶杓の筒に認め賜はったものである。

以上でお茶を進じたが、おぼつかない手前に畠山夫人の物笑いを受けるやらの滑稽を演じるなど、従て座は大賑いであった。茶杓についてのお尋に、小田原に馳せつけた事を答えしに其の心入れに対してハ満足された。濃茶が終り続いてお淡を上げた。

水指（備前種ツボ）　茶入（蓬雪好竹割フタ）　茶杓（象牙）、茶碗高麗（鈍翁銘我師）　替一入（了入箱書）

建水（ハン、ネラ）、釜ハ（古浄味霰）を用ひた。

貧者の一燈とも言ふべきお茶を、この大茶人に供するも、宗旦の遺風をしたう自分としては、心に構ゆる茶の精神に何の変りもない。或ハ物持数寄程に、時にハ今の世にも、こんな茶があるのかと、語り草にもならば、必ず茶ハ名器ならずとも、身分相応と感じられると思い、謂ば座興的のこの一会に、意外にも満足せられ十一時過ぎ迄の長いお遊びに恐縮した。

○横浜三溪園金毛窟の茶（21）　十二月十八日

——P162

三溪翁から中村氏を通し、歳暮の茶を進じたいとの案内で先月蓮華院での一会後とて、喜んで今日を待った。処が昨夜突然松永さんがお歳暮の挨拶にこられたので、三溪園の話をすると、それは羨い、飛入が出来れば私も行きたいと、翁一流の望、三溪翁も松永さんなら飛入にもお構あるまいと、横浜駅でお出合を約して置いた。東横線で今日の一行と落合い横浜駅に着と会社の多忙を捨て馳せつけられた耳庵翁とも出合た。意外とされた一同は、今日は我々丈と思いしに之は之はと驚かれた。自分は昨夜の（イキサツ）を話たので、一同もそれは思ぬ珍客三溪先生も喜れるならんと

ここで一同ハ（田中さん、松永さん、魯堂余と中村氏の五人）が三溪園にクリ込んだ。）

同家に縁の深い、中村氏の案内で玄関敷瓦長（ママ）が廊下をへて庭に出る。古びし大踏石を源公堂を右に見て石橋の渓流を渡る。間もなく本流から流れる水声を聞き、聴秋閣を眺め鎌倉期と見える十三塔を左に朽ち寂し木橋を過ぎ山上へと辿る。十二月中ば過でありながら、今日も目珍い暖かさ、汗ばみながら（国宝）天授院前にたどりつく。天授院横より流れる小流にハ、南都法華寺伝来と言ふ、自然の舟形石が流の中に蹲として据つけられている。伝来と言い、時代の古さ苔むす古色蒼然掬すべき物がある。この丘陵より眺むる園内ハはるか前面山上の三重宝塔、宏大な蓮池との築庭の妙は、程近き汀によせる浪の音と共に之れが三溪翁個人の庭園を想ふと、翁の偉大さも、ただ尊敬の外なく横浜絹糸貿易の巨頭たるを思はしめ、翁の構想に耳庵翁も想像感も深かった。

ここにて三溪翁の出迎いに松永さんハ飛入の挨拶 主翁亦心よく迎えら、（ママ）

十畳広間（次に八畳付廊下付）

この広間は、下の源公堂から上屋附数十段の階段を昇りし場所である。この廊下の角に

黒根来（時代）輪花式（覆輪）付丸盆上ニ（足利期の水瓶）が備え付られてある。（この構えハ手洗後浄水用に設けられし）仏教

れ一座は亦一段との興を添えた。耳庵翁は一通の書附を取出し、私は廿九日ここでの茶の模よふを会記に控えたが今宵も釣鐘を聞きましたかと質問に、一同は意外の面持ち。そんな餘興までありましたかと、少々不満気、猶その夜の趣向は魯堂翁の前だが、私にはこの趣向が一歩上だと想はれたなど、おだてられ、話はいつか十二時近くに迄になり帰途を忘れられしかに夜話が続き散会された。

今日の客ハ　田中さん、魯堂兄、縣次郎〔ママ〕(14)　兄夫婦　中村富治郎〔ママ〕氏　の六人であった　師走の月ハ中天に昇り　塔中の閑寂また深く

○自庵連会　十二月四日夜会

横井夜雨氏にハ琴平町自邸　又ハ小田原飯後庵にも数度招からテ〔ママ〕おり、一度お返を催したいと考もあり四五日前案内をすると、病中だが四日頃ハ大丈夫との事で今日に取りきめた、処早朝電話で医師がなかなか許さない、残念だが、代理に家内と岡部君を願たいとあった。此の外石州流の家元柘植(15)君の外婦人連とて、すべて前回通り　ただ婦人連とて、土鍋をお椀仕込にかえた。

客は（植柘〔ママ〕老、横井夫人、塚本夫人　岡部長二氏、粟田天青老ら）

正客ハ石州流の宗匠外人を多く指導せる人、横井夫人ハ裏流の達人、塚本夫人ハ夫君に閤治氏(16)と言ふ山に対する一人者ヲ持　お流儀は有楽流ノ熱心家　天青老ハ又茶道誌の主幹　それらの人々の前に、点前に手ほどきさえ受けぬ自我流茶人のお手前を大胆にも進める不敵さとも言えようふか。只茶は侘である心體(テイ)を基とする自分は客に対する真の心が通じられれば、そこに初めて茶友と共に静閑の興を与えうると考えるからである。お客はサコソご迷惑ならんも深夜まで茶談に過され散会せられた。

P159

○自庵郷友の会　十二月九日夜

郷里の出身、京都電力社員田中健介君から、同じ隣村出身とて三井合名理事と迄出世した、金子堅次郎(17)君及び芦屋出身で放送局■芸部長の小野賢一郎君(18)らと一同会食を申込まれていたので茶には縁の薄い連中であるが、国風のチリ鍋でもと今日お招きした。同時に松永翁の惨事である中村庄吉(19)君を合せて、小野君丈ハ陶器研究又ハ茶にも趣味あり　芦屋釜で有名な筑前出身者丈　釜についても造詣あり、先回通りお茶を呈し、郷里の憶い出話に歓談娯いつどいであった。

P160

○雲中庵自席の夜会　師走十二日晴

畠山から電話で、君はこの頃茶を掛けしと田中さんから聞いた。日を期して一会催せとの事であった。そこでトンデモない、私共ハ所謂茶番などでとお断りしたが、イヤ、ソーデない田中君は感服していた是非とのこと。一寸ためらうのは、先月の益田さんのあの名器があり、それに又畠山さんには名器の所蔵家からと、一応お断りしたが、考える迄もなく、益田さんなど比較するのが間違でもあり我々貧者の茶を供するも一興と考えなおし、それでは、制作中のお仏壇を検分かたがたお越を願ふとお約した有様。お連れハ、ご一家の外左の通り。

（畠山一清氏、畠山令嬢酒井夫人　同、夫人　（吉田白雲氏　同　夫人　八田富雄君(20)））十二月十二日夜会

寄附ハ大石良雄の消息　外前の通り

大炉の間　床に宗関公一首を掛け　懐石亦前同よふ、続いて

P161

菓子 春雨 菓子盆 一閑 梅花式 、掃雲台一流の御献立に 翁の福よかな お給仕に元気ながらも一同恐縮した

元の寄附に動坐し満服の腹を抱えて、月山の名幅やお道具に対し

今日ハ特別大奮発なお振舞を語り合い、扨之からのお茶を楽む

お引入は 銅羅 の相図もなく翁のお出迎いに後席へと這る。

床を拝見すると これは 又 以外〔ママ〕、山姥の面 光悦作 毛絵宗達 が黒板にて掛られてある

水指 南蛮 縄簾、茶入 名物 大瀬戸 肩衝 茶杓 津田宗及 共筒、茶碗 御所丸 黒刷毛 銘堅田 建水曲

蓋置 青竹 、茶は代々木の森

能面をお床に用ひられし御主人の御趣向に一同面クライ、ながら、名器の配合に満座敬服感ニたえず殊に御所丸黒刷毛に至りては、御当家ご秘蔵の名器丈に、其稀世の程を賞し拝服した。翁はご迷惑でもお淡を広間で差上げたいとの事に、山を降り水にうつる紅葉を賞し広間へと移る。畳廊下の大広間にハ、豊太閤の文 小倉宛とある 、桃山 時代 卓を添え

献茶あり茶碗白天目 芙蓉台 茶碗ハ 紹鷗 所持 遠州蔵帳 紹鷗より後関白秀次に伝り云々の書附アリ

書院砂張 三足 象ノ 花入 有楽伝来 花 太郎庵 椿 釜 破れ窓 自在に掛け 釜ハ太閤所持 、自在ハ蒔絵桐文豊公宗和公に贈られし者 伝来利休所持

時代 木地 下ニ文字上透し の風呂〔ママ〕先にて囲い、長板に水指 祥瑞 在名 共蓋 灼立 砧青磁 鳳凰耳 火箸

時代 砂張

何と豪華なお道具組かな、豊公への因縁も深き品々を、斯く迄多くお組合ハ他家では見られぬ光景に只々一同目を見張るばかり。愛孫高子嬢のお手点にてお淡が進められ主翁も共にご服合い、遅ればせにも一騎打ちを目ざされる耳庵翁も、ご主人相手の戦いなど思いもよらぬと嘆声をもらされるなど、それ程に今日の大盤振舞に恐悦されるのみ。

茶碗ハ 蕎麦 小服 替へ一入 銘 孤月 茶杓ハ 象牙 建水 砂張 合子 遠州 蔵帳、干菓 盆唐物 八重菊 朱

高子さんの見事なお手前にてお開きとなったが、翁ハ道具組から料理に至る迄自ら台所に出掛け召使えのお指図、よくも九十才を過され、殊に今回の口切の如き豪華判のお茶にも至極のお元気。翁ハ私はこのお茶の為一日家中を歩くと凡二三里にもなる。それが運動にもなり自他共が娯にもなる。松永さんも近頃花界の四畳半を脱してお茶三昧にご転向され、長生がせられますよう精々つとめてお茶に精進なさい、仰木君頼むよと、茶道の先達ぶりに一同感喜の間ニお暇し松永さんご夫婦は熱海に私らハ東京にと引揚げた。時に八時であった。

○雲中庵自席の夜会　師走ノ三日

P158

先月廿九日に催した茶の噂が、いつか長兄に伝りしと見え、田中さんらと共に是非今一会釜を掛けよと催促。当代古筆の一人者親美翁に取っては物笑いの種と思ったが、良い気になり今宵お招した。実兄とは言へ寂の本山と迄三溪翁からの推賞な丈、なにかてごわい思いであった。然も相客中村好古氏(12)ハ東都一流の書画商。福田君(13)又親美翁の女婿だけに、

寄附ニ大石良雄の 消息 こよい茶あけたい西条から到来の枝柿少々持を云々 神崎 定右衛宛 外去る廿九日と同じ

広間にハ掛物 宗関公の歌の外 水指に 黒根来手桶 自性院什 応永年号アリ この外献立茶碗とも前会同よふである

お茶の終りし頃突然、ドコで聞かれしか、松永翁があたふたと飛込で来ら

んは先夜原宿のお茶との比較について、こんな茶なら、益田さんや三溪翁をお招きしても、必ず満足される、是非続けてお催なさい、私も御相伴すると、なかなか世なれた、ご挨拶ぶりであった。猶 私も今日の茶は大にうる処があったが、然し引入の鐘には、ナントモあの情趣は出来ないなど、十一時過ぎ迄余談にふけられ、裏門鐘楼脇から送り出し、何とかお茶を、にごした。

○小田原掃雲台の口切(10)　**十二月一日正午**　——— p154

鈍翁主が秋の口切は月の中ばから連日続けられ、松永さんハ十八日、自分ハ亦五日にお招きを受けたが、松永さんの怪我の関係から、なるべく松永さんと同日が、主客にも面白からんとお願し今日迄お延べを乞ふた

益田さんのお茶日には、いつも好天気が多く、今日亦益田日和と云ふ天気であった。十一時半小田原駅に着くと、翁の愛孫高子さんも品川から汽車でお逢し、益田さんからお迎いの二台の自動車に分乗し掃雲台につく。玄関には平松君を従え翁自らお迎い付であり、玄関次ぎの洋間に寄附を構えらる

床にハ

京都山科 醍醐寺 塔内壁絵彩色仏像画板ノ残欠 此ノ板絵ハ 塔内腰板ノ一部約三尺と上下に仏画アリ半切とセシ物、 其半部ハ 今松永家にアル

ストーブ上ニ 唐時代、銅盤、縁ニ、鳥ノ文様アリ 朝鮮 出土四方仏像ノ古鈴 政斎渡鮮に将来

鎌倉時代 木彫阿弥陀像 十二神将と思ふ二躯 が安置されてある。之れらを拝し、廊下より庭に降る 相模湾を眺む園内は今紅葉のさかりで秋の錦を飾り、渓流を渡ると、古き十三塔が右に聳え、爪さき登りに主翁ノ先達で丘に辿れば池畔に出る。このあたり池のめぐりは又紅葉の酣、池中の緋魚溌溂と水面に浮び我らを待つかに思はれた。翁ハ一振りの餌を投じられると、尺餘の鯉魚の群れの肌すり合ふて餌をむさふるも一興、然も池に囲いに、新に杭を打ち網が張られてある。松永さんは、何と思はれしか、御主人こんなお場所の池ニ杭などお打にならぬ方が風情と思ひますがと 之に対し翁ハ速座に、イヤお家の庭でさえ怪我をされるご人もある。まして他人の庭にてお怪我でもされてはと考え悪慎に打ちましたと、六十四才の耳庵翁に対し懇父の児に対すが如き心入の挨拶には、流石の耳庵翁も、之れは恐れ入った粗忽者へのご配慮と哄笑された。

池畔に設けられた小亭 寒松庵にハ 雨春庵紀念写真 置炉 楽浪古材、政斎作 釜 淨味作文字アリ 鎖 自在徳元名アリ 汲出 鈍阿作 台 紅葉蒔絵 香箱入 祥瑞小口 盆 青漆八角道志作 莨盆 時代百日紅、火入赤絵 手炉 時代桐太郎庵伝来 敷物 唐、織 相客顔ぶれは、（耳庵翁、西脇済三郎氏 藤瀬刀自、松永夫人ニ余）

寄附より池をへだて、明治天皇を祭神とされた松ヶ岡八幡宮の鳥居から山上の御社を仰ぎ、程なく春雨庵本席にこの席ハ 松花堂好 床を仰ぐと

東山御物 月山の稲の幅、下に壺飾り 銘清香、扇に清ノ文字アリ紹鴎直書 釜 名物 濡烏(11) 芦屋古作、雪舟下絵

炉縁 沢栗利休伝来久以作 五徳福爪

香合 青磁 桔梗、炭斗瓢、 鈌象嵌瓢頭 火箸桑柄 織部所持、 羽箒 大鳥、 灰器 長次郎作隨流直書 灰匙 時代 桑柄、釜敷 籐組利休伝来 已上 之れも名物名器揃にてお炭手前が終られ 御懐石

向 リンゴにハヤト瓜 海老 白菜胡摩あへ 器ハ 色絵金襴手、 汁 小蕪水がらし、 椀 甘鯛白菜椎茸、口柚、 焼物 釜むし、鴨、松茸銀なん

強魚 海老芋器ハ 織部 四方 手鉢、湯吸物 笹梅ハリショウガ 器ハ 乾山光琳 合作 寿老ノ絵、 八寸 鮭薫製、カラスミ黒百合、菊スズけ

香物 浅漬、白菜コウシ漬 器 伊賀、沓鉢 酒器 染附人■蓋銚子 酒次ぎ 粉引徳利 杯 雲草紅毛

主客は（益田鑑子夫人、藤瀬刀自　牧田夫人　余二平松老）大炉（銀鍋　よせ煮）向（鯛細ツクリ　胡摩アエ）志野丸、（汁小蕪　水がらし）銀なべよりアぶなげな（主人の給仕）煮物（里芋　牛蒡）器鼠志野　湯吸物フキのトウ　八寸（カラスミ　百合青豆）酒器（備前　徳利）杯（黄瀬戸　粉引馬上杯）漬物（茄子）、献立には取立てた具風（ママ）もなく（遠来の客に対し）食事がすむと、炉にハ手取釜、備前（水指）、茶碗（志野）茶入（時代竹の中次）茶杓（慶首座作）にてお濃茶の振舞われた。耳庵翁が茶席耳庵のあるのに、この略式茶は、この春三溪翁来遊の際、其新席を見て、松永さん、こんな新席の茶は私は同調されない。寧ろ田舎屋広間こそお茶に適していると言はれて以来がこの略式茶となったよふだ。一足飛びの大茶人振りの侘び茶、それ丈熱心ぶりも人一倍い、何れにしても心づくしの程、ただただ謝すのみ。広間はこの前ノ飾附通りで省略す。柳瀬川土堤に放牛のさま平林寺の埜と共に、唐絵牧溪の画でも見る風姿を眺め帰京せるは燈火の点し頃であった。

○自家雲中庵の夜会(8)　十一月廿九日

茶の道に趣味を持つ自分は近来引続く各大家の茶事に親みながら、茶器のたくわえとてもなく、余程気軽な茶友の外、改めて茶事も催さず独楽三昧で過したが、不慮の怪我も入院手当で原宿の茶にも励まれし松永さんをお慰にと案内せしに、それは何よりと早速の快諾で、今日を期し一会を催すことにした。ない中の道具組、料理の献立、庭の掃除まで、老妻と二人の仕事、台所口にて炭切を初めると、本坊の和尚が通られ、何になさるか炭を切ってと、茶宗と迄説えらる臨済禅門のこの問に、茶ケのない者かと、ホホえみながら和尚さん今宵一寸来客があります。裏の鐘を入合頃の六時に打たしてくださらないかと懇望すると、日頃物やかましさに似ずヨロシイお撞きなさいとのお許し。サテハ之れにて茶ハ一済出来たと、心ひそかに喜んだ。貧乏人の茶は趣向以外にない。先づ之れにて安心と席入の時刻を待った。今夜ハ松永ご夫婦の外、永い間柳瀬荘の築庭を終り一ト先づ金沢へ帰宅すると言ふ丸岡耕園老外、お出入の常連であった。

——P152

（先づ瀬津雅陶と共に（細野老）が次いで（耳庵翁夫婦　丸岡、越野(9)）も到着された。）寄附の用意は、

壁床に鈍翁筆（めでたく　かしく）十一月十一日　日附（九十曳　くゾちい）とある（小幅）を掛け、（丸炉に寒雉鉄瓶）汲出（青華　振り出刷毛目）

朝鮮（木地）台盆（時代　高山盆）時代仏具（火鉢）手炉（古瀬戸　牛の）黒柿（矢倉の　火鉢）敷物（唐物　緋ノ刺繍を）

お客全部が揃はれたので裏門に出で、和尚の許を得た鐘を大中小と七点を撞き迎い附を行った。先づ広間に通す

床に（片桐宗関）公筆（九重の籠に云々の歌を掛け）大炉に（大土鍋　鯛チリ）向（白アユ）汁（合せ味噌　水がらし）器根来　煮物（耳庵翁土産）芋に（牛蒡）、焼物（トコ節　葉付蕪）器（古備前　平鉢）湯吸物（海壇瑚に　フキノトー）器（南ばん）漬物（沢庵　薄切り）鈍阿

菓子（手製）栗の（飴掛）（薬味入ハ雲鶴小鉢）以上でこの間耳庵翁は（寄附めでたくかしくハ私の病気回復に対するお心入れと思ふがそれになを

お引入れの鐘の音にて一入の心づくし、大家自慢の大銅羅に増す、ご主人の心かまえにハ、ただただ敬服の至り 今宵のお茶は満点至極との挨拶、夫人又これ程の趣味を持ちながら、なぜ今少し前々からお招きを得なかったかと、喜ばれしは、何にが幸になるかと、多少面目をほどこした気もされた。

中立後三畳（向切）の席に動座を願い、向掛け花入（尺八銘　ひねくれ）、花（瓜の殊花）風呂（鉄　道安好　ヤツレ）

釜（興福寺大茶屋釜　釜座住国次作ト）文字あり（小泉三伸旧蔵）敷板（亀山上皇陵敷瓦　南禅寺正伝院旧蔵）茶碗井戸（九ツに破れ　宗関歌附）

茶杓（縣宗知共筒　銘秋の夜）茶入正意（銘菅龍　鈍翁箱）水指（朝鮮）耳附（赤絵　フタ）建水曲、蓋置（古竹）

こんな事で濃茶を供し、庭の柿などを進めた。淡茶は省略したが、松永さ

茶碗として侘の上位を〆る柿の蔕二碗の拝見はこの上なき仕合せ。白雨にハ寂の内に美を帯び、作行きにも他に見られぬ特徴があり、茶家として最も愛すべき物である。それ丈に又数も少なく、翁が斯く二碗も愛蔵せられる程に侘茶人としての風格が億(ママ)はれる。

拝見が終り、かねて翁ハ松永君に耳庵の水鉢前石が飾りに乏弱で石を一ツ贈りたいとの事を聞ていたので、今日はその石の選定を乞い、田中氏らと共に天授院山上に登り、御主人にハ気の毒であったが院の前にある役石大石を見立て翁の許しを得たのと、河村瑞軒遺構(6)の茶席一棟をも解体材料を見て進呈を求め之又快諾されし三溪翁の豪服にハ感に勘(た)えなく、晩秋の庭内を賞し夕陽に聳ゆる前山大塔を仰ぎ翁に送られ帰路についた。

○原宿魯堂庵の夜会　十一月廿八日

P 149

茶の道に這いられてからの松永耳庵翁は、心機一転其の途に邁進され、まけぬきらいの性格と、実業界の猛者だけ、鈍翁から原三溪翁と、其の道の数寄者と交遊され、僅か数年ならずに大茶家の格に悟入せられた。最近柳瀬山荘にて、不事の怪我をされ聖路加病院へ入院加療中であるのお慰めノ為魯堂兄の催し。然し顔面ハ繃帯と云ふ折とて、一寸ケ念したが、電話を通じると、それは難有い繃帯姿へイチャラだと早速のお受であった。相客は

翁の外夫人、塩原夫人（7）　余の六人
牧田夫人　梅露刀自

△顔一面の繃帯を何のおく面なく茶にのぞまれる茶家としては耳庵翁ならぬば見られぬ風景である

いつもの寄付にハ雲谷等　筆道士　画、長炉鉄瓶、茶碗新物、芋を焼く顔　振出根来、台、盆上

引き入れ本床定家　郷秋の歌二首を前ニ懐石が進らる。

懐石胡摩アえ　向器ハ、志野　汁合せみそむかご　椀貝の柱シンジョー　焼物鴨、大根煮込　器繊部手附　進め魚このわた、唐津へ

湯吸物水前寺のり　針ショウガ、八寸カラス身、青豆　百合　器信楽、香の物沢庵ウス切奈良漬　雲鶴(ママ)

酒器銚子徳利　高麗、杯青磁、雲草　菓子越後屋酒まん　以上のお献立を賞味し中立腰掛ニ

銅羅七点の音に再度入席すると、床へハ宗旦作ウケ筒花人　花秋の、残花　釜古芦屋風呂(ママ)

妙喜庵ヤツレ写　香合天平　彩色蓮片　炭斗唐物時代篭火箸桑柄羽根　鶴　ここにて炭置とがあり

水指根来桶、茶入瀬戸大海　茶杓遠州　共筒、茶碗柿の蔕　建水ハン、ネラ　蓋置古竹

怪我で繃帯も忘れられたかの耳庵翁、イツカ数杯を傾けられ、奥さんのご注意もなんのそのと言ふ其快食ぶりに終り露地を伝い広間に通る。床孔雀明王　幅、

鎌倉　時代金銅鈴羯磨　など御時代盆上ニ飾る

床脇経筒　共蓋、書院経巻原三溪翁筆筒沈香抹塗　政斎作

御婦人とまじへじ今日の茶にも、何にか仏教趣味があり、寂茶を通した当りハ、何となく三溪翁らに一脈通ずるの感あり面白い一会であった。翁ハ病院に帰られ、いかなる茶感を夢見られるかを我亦其の感を誌して見た。

○埼玉柳瀬山荘大炉を囲み　十一月廿一日正午

P 151

日附を前後したが、茶事応酬の盛んな此の頃、耳庵亦シキリに茶湯が催られての相伴し東上線志木を経秋の野道を柳瀬荘に出かく。

美、森川如春に落ち合った。勿論お二人共三溪園行きとて同行し園内に這ル

時間もあるので広い園内を一巡し、十一時半天授院（国宝）に到り門をくぐると遙かに敷瓦廻廊の源氏窓を通して庭園を眺むる。三溪翁は、そこ迄出迎えられ、互に今日のお招きつきの挨拶を交す内、小田原からの鈍翁も自家用車に九十の高齢を元気よく到着せられ、ここにて庭ぞうりにはきかえ、三溪翁の東道にて庭に出る。池を堺に桃山遺構の古建築を望み、紅葉酣なさまを賞し、池を右に蓮華院山道へと進む。鬱蒼とした樹林と竹林の路を登るにツレ、途の左右には神代名棺、古井桁たなどが如何にも自然に配置されている。進につれ、これ又公孫樹の黄葉が、通路と言はず、あたり一面に落散り、黄毛氈でも敷きしかに、落葉と言ふより黄金を見る思い。この幽玄こそ主翁の日を期してのお茶事も想像せられた。おしげもなく落葉をザクザクと踏ながら亦も進むと、古塔の跡らしく礎石の苔むせるが点在し、私は嘗て南都郊外秋篠寺に詣し奈良朝時代の古寺に遺る叢林を億い出された。今日ノお席蓮華院はこの上、正面に海背に聳えた松林の山々との渓間に構えられている。大師風の蓮華院三字木額は数十年前御主人の筆の跡とかに古色をおびている。

ここにも敷瓦土間があり、正面にハ、木彫聖観音像が（藤原時代）（安置）高サ三尺五六寸、台座は石棺の一部と思はる。土間ニ時代（前卓）ニ（金剛盤ニ盛り供物）土間一隅にハ（高句麗時代幡龍文様アリ出土ノ石器に暖をとる為焚火）の用意さえある。連子窓の宇治平等院（螺鈿入格子を）用いられし御主人の多彩のお趣味の程を（胸にひそめ）（益田翁を主客に（森川、田中、）の両氏と共に）六畳（琵琶床附）ノ席ニ　ここでの広間に通さる

床寂心和上（墨蹟）（寂心和上ハ菅公と文を競ふ程の文学者なりしも世を悟り吉野如意輪寺に隠遁　写経三昧に終られし高僧）と御主人の説明であった。鍍金ノ経筒（金峰山出土）親美翁及三溪翁筆写経を納メテ

ここにて懐石、向（鯛糸ヅクリ胡摩アヘ）器（染附）金襴手、汁（三州焼栗）椀（甘鯛）豆腐（ノリ、かけて）焼物（鶏、茄子、エビ串刺、重に入れ）煮物（尾州）産（淡島蓮根）漬物（沢庵茄子の）古漬　器ハ斑（唐津）酒器（粉引ノ徳利）杯（ペルシャー刷毛目）膳（宇治、茶、煎り盆）このお献立にも翁の茶に対する独特ナ気分が現れている。床の上代高僧の墨蹟又ハ稀世の名幅　金銅経筒を前に、この懐石ヲ鈍翁初め当代眼識家と共にせる面白さ、（さて御主人に導かれ隣室ニハ）

二畳の間壁床に花入（瓢道庵作）銘（木兎）花ハ（ガクのスカシかる茅）水指（国焼南ばんフタ）、鉄風呂（ママ）（北野庄の文字アリ）釜（天猫）瓦（寸松庵）炭斗（漆桶）火箸（東大寺釘）香合（志野壺）と云ふ取合にてお炭が終り

茶入（黒根来）茶杓（庸軒作銘虫喰）茶碗（長次郎作赤筒）銘無一物（雲州家伝来等庵所持）蓋置（古竹三溪直書）

三溪翁ハ主客鈍翁と共に大の蒐集家、然もお二人とも、世の数寄者とちがい、仏教美術にも造詣深く、殊に翁の茶は侘びを一貫され、終始茶は侘びにあるとの主張家丈、今日のお道具にも侘に徹せられている。お手前亦然りで、何のこだわりなく主客一玉の内に濃茶を練られた。茶碗無一物は主客鈍翁家の一文字赤楽に対する主人の心入れでもあり、之に対する（田中森川）両氏の評価談に席中快話に花を咲し和気に満ちた内に三時お開き。鈍翁丈は先発、我等三人は迹に残り母家遺構の大間に移る。如春氏の発案にて、同家愛蔵の柿の蔕茶碗拝見を乞ふ。

柿の蔕銘白雨（5）（不昧公朱漆書）雲州家旧蔵（内外共に釉薬光沢あり上品の作）　当時値ハ一、三〇〇〇

同　無銘　大さび茶碗（疵アリ）（梅沢）旧蔵　〃　三〇〇〇

床ニハ茂古林 墨蹟 堂上枯主丈仏曰ク云々 至治二年十一月廿日 生陵鳳堂清茂 の奥書あり 十一月の催しにハ至極の適幅 釜 芦屋鶴地文鐶付 松カケ 香合 青磁 一葉 釣棚 上ニ羽箒と共ニ、お炭用具ハ 静岡産曲塗灰器南ばん でお炭を直されて 懐石 向 鯛の昆布〆 器 金襴手丸紋 汁 合せミソ 椀盛 若鳥焼豆腐 器 染附結文人物絵 焼物 甘鯛むし ヨマシ麦 南京赤絵蓋附にて 八寸 百合根青豆 カラスミ、湯吸物 海、珊瑚 香の物 澤庵薄切打ち菜 器 御本三島、 銚子 メン取り青磁寿老蓋 徳利 井戸風と古備前 杯 黄瀬戸六角萬暦銘いり お菓子はサカ 饅頭であった。 この間お炭の点火が不安で平松老気をモミ炭置し 懐石ハ例により小清の腕前申分なく器物 献立にも心つかいの馳走に正客耳庵翁も杯を過されたようふだ。

中立ちは上の丘ニ腰かけ、秋の園内も紅葉色そめ風精も一入である。銅羅の響も幽に峯につたわり、淀屋愛蔵の銅羅の名鉦を億〔ママ〕び大中小と声ゆる餘音と共に再入席する、と

床 伊賀の花入 白玉とハシバミ 茶入 薩摩文琳 添へ文ニ

「御書院方江に題し、右ハ慶長五年九月関ヶ原合戦し後国分様大阪御屋敷御退し成其節御自身御携ひ成来より御代々御伝来ノお茶入の由御記録に知申■云々の長文あり」

茶杓 宗甫公作 茶碗美濃 井戸 箱 遠州 香合 青貝一葉 水指ハ 南蛮縄スダレ 酒井家旧蔵 蓋おき青竹

伊賀花入の寂に文琳茶入の大振りへの美濃井戸の 大徳寺喜左右衛門 に似たる堂々のお組合ハまことに申分なく、感じられたが、欲を申せば水指を木地曲なり桶をお用いならば猶一曽〔ママ〕のように思れた。代々木森が練られ、たお〔ママ〕茶碗を抱えて放さぬ正客をうながし順服の光栄、この茶碗ハ其の内に 茶シミノ寂アリ 其姿高台作り名物としての資格も重分〔ママ〕な点から狸山翁在世の頃の秘蔵品である。自分は狸山翁有り頃一度この茶碗により相伴せる事あり、今亦刀自にて再度拝服したことの喜しさと感慨又深きものである。

露地つたいニ広間に移ると、床に 佐竹家伝来信実歌仙ノ内藤原ノ敦忠 歌「あひみてののちのこころにくらふれば むかしはものをおもわさりけり」 花入 青磁竹ノ節 花牡丹 琵琶床 冊子〔ママ〕 時代蒔絵扇面散乱盆上ニ 鎮子 古銅鹿 釜 古芦屋エヒカン 棚 遠州網透、水指雲堂小フリ名品 茶入 膳々広口 茶杓 象牙 茶碗 花之島銘雲井 替一入 黒にて 美代さん代点でのお淡があり高杯にて菓子珍らしき水菓子などの持成し

参謀に魯堂あり 伴胴に伊丹金蔵老あるとは言え、斯くの名器珍什のお取合せには、正客耳庵翁も流石にお蔵の深きに驚かけれ〔ママ〕、且つ大満悦であった。その上松永翁の正客ぶりも、千軍万馬を猛者だけに面白き捗挨〔ママ〕ぶりであった。御使用中の香合一葉はツイ先頃まで魯堂兄の手元にあり、是非翁にお取置をと進めしも何にか気乗り薄で其ままでありしに、今日團家で見られて、初めて、ナデもっと強く進められなかったか、要は私の目がたらぬ罪かと、口おしげな残念話も一興であった。

二日前の杉本家と言い、今日亦かくも豪華なお茶に恵まれしは、茶の道の仕合でもあり團家の御厚意を謝する外はない。同じ豪壮ながら両家の道具組を案じると、それぞれの相違があり趣味の程も察られることである。松永耳庵翁も團家にハ初会とて殊の外の嬉でありしハ仕合せ

○横浜三溪翁蓮華院にて　十一月廿四日正午

この前日三溪翁自らお電話で、明廿四日お茶を供したいとの案内を受けたので、少し早めに自宅を出て東横線桜木町に下車すると、偶然にも、田中親

P146

朝から霧こめ茶事には申分ない好適日であった。

お相客は（團芳子夫人（2）、堀越夫人（3）、田中親美翁　魯堂兄　余　美代子さん）

寄附　三畳踏込　床にて　江月一行　快人一言快馬一鞭の幅　光悦風　錫縁波に月　小硯箱床内　莨盆　一位木地　手付

火入　織部四方　足附　時代　大　小　火鉢ニ、敷物　絞り　セン　丸炉ニ鉄瓶と云ふ具合であった。

汲出ハ　新物　振出　朝鮮唐津　蓋置楽宗旦花押

主人のお迎い附にて順次路地に入る右手に母屋を見てカラ堀に架せられし橋を渡り凡そ二丁程にて、吟水　松花堂　とある破風の木額を仰ぎ入席

席ハ三畳中板　床ニハ隆蘭渓　梵笠仙　賛ノ賛　墨蹟　賛に　道、長沙禅師僧問如何云々　曰ク　梵這則公安蘭渓隆和尚云々

奥書　貞治三年　甲辰仲日　梵僊、懐石を進られ、向　鯛の　昆布〆　器金襴手、汁　小蕪　水からし　椀

雉シンジー、焼物　甘　鯛　器　備前　手鉢　強魚　カラス身　おろし大根　器　黄瀬戸　八寸　銀杏若藻　ワカサギ　漬物

沢庵　茄子古漬　器　雲　鶴　酒器　徳利刷毛目　杯青磁、唐津、菓子　小吸物　針ショウガ　、これにて中立動坐腰かけに莨盆は　手附　火入　信楽が備えてあった。銅羅の合図に後席へとくり込む。

床　古銅　ソロリ　花入　白玉　花入　利休、伊丹屋紹無　箱書　同　宗不　海部屋　宗　雪　伝来。釜ハ　寒雉柏釜　共フタ　炉縁

寸松庵　伝来　黒柿、香合　染附銀杏、尾花に蜂の巣　水指曲　木　地　茶入　朱無地溜　銘　籬　不昧公箱「吾家乃進乃営農荒行乎　真乃埜邊尓奈須猶可南」

と万葉風の歌あり

茶杓、宗甫、無節　筒ニ「濃州関住人兼之作　堂ち花屋長兵衛殿　甫　吹毛用了色須磨　喘々喘々、欠伸」則ち　遠州より立花屋長兵衛への贈もの江月の書入あるも、面白し

茶碗　名物　ノンコウ　七種　の内桔梗黒、建水　砂張　鉄鉢、　炭斗ハ瓢、羽箒鶴　灰器乾山瓢形　であった。

隆蘭渓ト云い食器に数々の名器献立の心入を初め、伝来ただしき銅の花入、茶杓に至る迄由緒も深きお道具、中にもノンコウ桔梗ハ 口釉マクも多く光澤見事にてトッシリとした名器、誰れが選びしや七種の名は、それ丈御主人の得意は元より、拝見する一同は猶更の喜び、布袋然と肥満の御主人の老練な濃茶に咽喉をうるおし、広間に通される。

床松花堂筆　佐野渡り　江月賛　佐野渡過、馬蹄不口　吟袖掃雪孰与浩然　欠伸献書三輪放下　トアル　竹筒箱　佐川田喜六直書

花入　古伊賀　耳附　 　花　臘梅　寒菊　床脇　近衛家代々ノ歌集　定家筆、釜　芦屋、縁　時代　菊蒔絵

水指　染附露草、紹鴎棚　茶入瀬戸擂坐　茶杓　竹形　象牙　箱　宗納公筒書　十ノ内とある。

茶碗黄伊羅保、箱裏ニ　女郎花今日はすがたもますならん　露の結へる玉かつらして、　替高麗　片身替り　、菓子器独楽落かん

お商売からとは言え、何と豪華なお道具組ならん。之れが近頃の道具茶標本とでもあらん。器物拝見にハ、之の上なき仕合であるが、今少しお省略あってはと心ひそかにお暇した。猶淡茶にハ花夫人の美装、ご令息のはこびなど雛段を見る風精に老主人と共に満足至極であった。

○原宿狸庵刀自の茶(4)　十一月十日夜会

P144

お正客ハ　松永耳庵翁、同夫人　藤瀬刀自、余　平松君にお詰を願い、いつもの寄附に　冬の日の短し道筋に　ハ露地灯りもゆかしく

寄附に入る

丸炉ニハ　霰時代ノ　鉄瓶　汲出　朝日、　焼　振出　朝鮮　唐津　台　真　ぬり　丸盆　溜　五十嵐　道甫作　硯箱

火鉢莨盆　火入　志野など

奥さんのお迎い入れで露地つたい三畳台目席に這ると、

『雲中庵茶会記』翻刻稿③

後藤　恒

今回は、仰木政斎著『雲中庵茶会記』全二十冊のうち、第三冊全ての翻刻稿を掲載する。内容は、昭和十一年（一九三六）十一月から翌十二年三月までの諸家及び著者の茶事の記録が中心となっている。

時の数寄者の双璧たる益田鈍翁と原三溪、両人に導かれて茶に没頭する松永耳庵、尊敬してやまない兄・仰木魯堂…戦争に突入する前にして数寄者たちが茶を通じて演じた高雅なる交遊の様を、政斎は詳らかに記録している。そして今回は、政斎自身の茶事の記録も充実している。自身の茶を「貧者の一燈」と卑下しながらも「宗旦の遺風をしたう自分としては、心に構ゆる茶の精神に何の変りもない」（本稿62頁上段）と奮い立ち、精力的に茶事を開いては好評を得て、次第に自信を深めてゆく様子が伺える。

（ごとうひさし　福岡市美術館主任学芸主事）

凡　例

- 翻刻にあたっては、左記の影印本を底本とした。仰木政斎著・味岡敏雄編『雲中庵茶会記』（限定版・非売品、平成九年発行）
- 影印本と照合する際の便宜を考え、項目ごとに影印本の当該ページ番号を表示した。
- 漢字は原則として常用漢字に改めたが、常用漢字に含まれない漢字及び一部の人名表記では原文のままとした。
- 変体仮名は現用字体に改めた。
- 踊り字は原則として同音の平仮名表記に改めたが、「々」は原文のままとした。
- 固有名詞の明らかな誤字は訂正した。
- 固有名詞以外の明らかな誤字・脱字や文意が通じない部分は基本的にそのまま表記し、適宜傍らに〔ママ〕を付すか、註記した。
- 原文において著者により文字の訂正がなされた部分は、新たに書かれた文字のみを示した。
- 原文において補記として傍らに加えられた文字は、丸括弧に入れて行内の該当箇所に入れた。
- 区切り符号の位置は原文のままであるが、文意に沿って翻刻者が句点と読点を区別した。
- 判読不能の文字は■で示し、判読困難な文字について推定したものは□で囲んだ。
- 前号で註記した事項については、註記を省略した。

雲中庵茶会記　三

（影印本上巻の頁番号）

○高樹町杉本九八郎邸(1)の茶　昭和十一年十一月八日正午 ――― P141 ～ P142

杉本さんに初めてお会いしたのは、去年秋京都光悦会の折、畠山さんご夫婦に招かれ、東山疏水畔の旗亭瓢亭での招宴されし席上であった。畠山さん同様加州出身にて證券業を営みつつ茶にも親まれ従って茶器も蒐集せられているとのこと、今日はからず、お招を受けた訳である。

凡例

- 各論文中の作家名、作品名等については、福岡市美術館の所蔵作品である場合、同館の所蔵作品データの表記にならった。
- 各論文中の著作物については『　』、団体名については＜　＞、作品名については《　》でくくった。
- 註の参考文献については概ね下記の順で標記した。
  日本語論文　執筆者名「論文名」編著者名『著作物名』（出版社、出版年）引用ページ
  欧米論文　執筆者名“論文名”，編著者名，著作物，出版社，出版場所，出版年，引用ページ
- 註の中で、既に挙げた参考文献を前掲書として参照する場合は、前掲書（註番号）引用ページと標記した。

福岡市美術館研究紀要
第７号

2019 年 3 月 11 日印刷
2019 年 3 月 14 日発行

編集・発行　福岡市美術館
〒810-0051
福岡市中央区大濠公園 1-6
PHONE：092-714-6051
印刷　株式会社四ヶ所
〒838-8512
朝倉市馬田 336

表紙写真

蝶花束文様更紗筒型腰衣（ウイ・スーチュン）

Tubular Skirt-cloth with Butterflies and Bouquet, OEY Soe Tjoen